はしがき

本書は、カシュミールのジャヤーピーダ王（在位七七九―八一三）の宰相にして詩人のダーモーダラグプタ作のサンスクリット語の風俗抒情詩『クッタニー・マタ』（遣手女の忠言）の邦訳である。サンスクリット文学も近年かなり日本語に翻訳され紹介されているが、高尚優雅、恋愛情緒あるいは荘重勇武、倫理教訓などを主潮とするこれらの作品と本書とは、著しく違った風流抒情詩である。題名からも察せられる如く、本書は遊里の話が中心となっているが、愛経文献（カーマ・シャーストラ）的な単なる好色本とも考えられず、博識な著者の筆は、文法・修辞学・神話・伝説・故実から当時の風俗にまで及び、皮肉で教訓的な要素も含んでいる。遊女をヒロインとする作品としては、シュードラカ作の戯曲『ムリッチャカティカー』（土の小車）が有名であるが、そのほか『ダシャクマーラチャリタ』（十王子物語）、『カターサリットサーガラ』、『シュカサプタティ』（鸚鵡七十話）などにも遊女の話は多く見出され、またプラハサナという一幕物の茶番劇、あるいはバーナという一幕物の独白喜劇（艶笑落語の如きもの）を集めた『チャトゥル・バーニー』（四バーナ集）などにも遊女が登場する。パ

ーリ語の仏教文献にも遊女の話は随所に見られ、詩的作品ではないが、性愛文献として最も有名なヴァーツヤーヤナ（四世紀頃）の『カーマ・スートラ』（第六篇、遊女篇）は、遊女につき詳説し、またカウティリヤの『アルタ・シャーストラ』（上村勝彦訳『実利論』上巻一・二七）には、司政官としての遊女長官の職掌が述べられている。詩的作品としての本書の内容は、上述の諸作とはいささか趣を異にし、類書としては、ダーモーダラグプタの後継者とも目せられる、クシェーメーンドラ（十一世紀）の『サマヤマートリカー』（慣習の母）、『カーラ・ヴィラーサ』（技芸の戯れ）がある。

作者の文章は比較的簡略ではあるが、作者は好んで修辞的技巧を用い、特にシュレーシャ（śleṣa, śleṣopamā）という一語のもつ他の意味を含ませて、本文とは別の意味をもたせる語法が多用されている。サンスクリット語に通じた読者ならば、一読して裏の意味を理解するであろうが、これを外国語に翻訳することは極めて難しい。第一義、第二義というように別に訳せば解り易いわけだが、本訳では別の意味を括弧内で示したので、読者の理解を妨げる個所も少なくないと思う。日本文でも懸詞とか、地口、駄洒落などの語法はあるが、それよりは少し複雑である。また本書には当時（八世紀頃）の風俗を語る場面も多いが、辞書に見出されない単語もあって不明な点もあり、註釈等によって辛うじて訳した部分もある。俗にいう軟文学でありながら、難解な片苦しい辞句が用いられているため、原文にできるだけ忠実にとの配慮から、読み難い訳文となったことは全く訳者の不敏の致すところである。日本とは全く異質のインドの風俗で、しかも一千年程も昔の話であるから、註釈による説

明がどうしても必要となり、甚だ煩雑で読み難い文章となったこともお詫びをしなくてはならない。いつもながら困るのは、会話の中の呼びかけである。個有名詞ならまだよいが、種々の名詞の呼格が用いられていて、これを文中に挟むとまことに調子が悪くなる。もともとこれは韻律に合わせるために挿入するのであるから思い切って呼格をすべて省略する訳者もあるが、作者の意図を考慮すると、それもできない。

原文はすべて書き流しで、章別などはないが、読者の便宜のため、適宜分類した。全篇の概要を予め述べておく方がよいと考え、以下にあら筋を紹介することとする。

あら筋

ヴァーラーナシーの町に、マーラティーという若い遊女がいた。彼女は容姿もすぐれ、魅力のある女であったが、水商売のからくりを知らなかったために、よい客がつかなかった。ある日、家のテラスにいると、どこからともなくアーリヤー調の詩の歌声が聞こえてきた。その歌は、「遊女は若さや美貌を誇らず、男の心を捉えるこつを知らなければならぬ」といっていた。よいことを聞いたと思った彼女は、年老いて経験豊かな遊女上りのヴィカラーラーという遣手女のところに行って、その道について教えを乞うた。ヴィカラーラーは、マーラティーの美しさを褒め、その器量なら金持男の心を捉えることができるといって、忠言を与えた。先ず手始めに、役人の道楽息子のチンターマニと

いう男が、父親が王様のお伴で都を離れて留守なのをよいことにして自由勝手に振舞っているから誘惑してみなさい、といってその方法を教えた。先ず気の利いた女を彼のところへやり、マーラティーの美しさを褒めたたえ、彼女があなたに夢中で恋患いをしていると伝えさせるのです。チンターマニがその罠にかかってやって来たら、母親ともども彼を快く迎え、寝室に連れこんでからだをまかせ、さまざまの愛戯で彼の情欲を満足させ、こんなよい旦那様をもった奥様が羨ましいと嫉妬するふりをし、私を忘れないでといって、彼の愛を確保するためこんな話をするのですといって、一つの話を彼女に教えた。これが第一の挿話である。

「パータリプトラの町に、良い家柄に生まれたスンダラセーナという若いバラモンがいた。ある日、友達のグナパーリタと二人きりでいると、勉学のために諸国を遍歴することを奨める歌が聞こえてきた。歌声に刺戟されて、両人は連れだって遍歴の旅に出かけ、アルブダ山に登ったが、スンダラセーナはそこでハーララターという美しい遊女を見染め、恋の虜となった。ハーララターも一目で彼が好きになってしまった。彼女の朋輩のチャンドラプラバーは、遊女にも似合わぬひたむきな彼女の恋心を思い止まらせようとしたが、聴きいれず、やむなくスンダラセーナにハーララターの慕情を訴えた。一方のスンダラセーナも、友達のグナパーリタが、遊女の愛などを信ずるなとの警告にも耳を藉さず、ついにハーララターの家に行って、そのまま一年半の間、彼女と楽しい生活を送った。ところがある日、スンダラセーナの父親から飛脚が来て、身分の高い家柄のものが、遊女にうつつをぬかすとは以

てのほか、即刻帰国せよとの厳しい詰問状が届いた。スンダラセーナは途方にくれたが、友達の忠告に従って帰国の決心をし、ハーララターに苦衷を述べて、榕樹の下で悲しい別れを告げた。しかし、別れて間もなく、彼は後から来た旅人から、彼女が悲痛のあまり死んだことを知らされ、急いで榕樹のところに引き返し、彼女の亡骸に縋って泣き伏した。友達が彼女の死骸に火を点じると、彼はその火中に身を投じようとしたが、その時いづこともなく賢者の声が聞こえ、殉死を思い止まらせたので、彼は友達とともに苦行者となって遊行の生活に入った。」

スンダラセーナとハーララターの悲恋物語はここで終るが、遣手女のヴィカラーラーはマーラティーに向かい、あんたはこの話をして、あんたの愛情がお金のためでないことをチンターマニに信じさせ、彼がそう信じたら、さまざまな狡い手段で彼のお金をまきあげるのだといって、その手練手管を教えた。たとえば、あんたは阿母さんと喧嘩するふりをするのよ。阿母さんは、あんたがチンターマニのために、お金持のお客を振ったといって責め、そのお客から貰ったものをすぐに全部返しなさいというのよ。するとあんたは、チンターマニに本気で惚れているのだといって、怒って装身具などをみんな渡してしまうのさ。そういういさかいを聞けば、チンターマニは遊女にも真実の愛があるものだと信じ、あんたを喜ばせようと、持物を全部くれようとするわよ。でももしそれが巧くいかなかったら、別の方法をやってみるのさ。あんたは友達に頼んで、彼にこう告げさせるの、「あの人は前夜あなたに会えなかったので、宝石などを身につけてあなたに会いに出かけたところ、途中で盗賊にす

っかり奪われてしまいました」と。これも巧くいかなかったら、また別の謀略を用いるのよ。あんたがチンターマニのために、真珠を抵当にしてお客から借りたお金を、そのお客が返済しろといっている、とか、以前チンターマニが病気をした時、快癒を祈って約束したお供え物を神様にお供えするお金がない、とか、あらかじめ家財道具を他所に移してから家に火をつけ、全部焼失してしまった、などというのよ。こうしてチンターマニから持物を全部まきあげたら、今度は彼を袖にして愛想づかしをする算段をするのよ。それには、男と離れて坐り、嫉妬をやいたり、男の恋仇を褒めたり、お喋口をたしなめたり、男の話を遮って別の話をしたり、態度を詰ったり、同席を避けたりするのよ。それでも効目がなければ、母親のいうことにも従わなければならないから、暫くの間でも会わないでくれ、というのよ。

こうしてチンターマニを追い払ったら、以前にお金がなくなって別れた客に、またいい寄るのよ。もちろんその客が再びお金を儲けていたらのことだがね。そして前に別れたのは、悪い奴の陰口のための誤解だったといって、自分の誠意を信じさせ、男の情欲を燃え立たせるため、かつての逸楽を想い出させるのよ。しかし、お金がなくなったら、また捨てるのだよ。要するに遊女の態度というものは、十分果汁を吸い取ったら捨てるマンゴーの殻や、肉をたべた後で骨や皮を捨てるのと同じなのさ。

老女のヴィカラーラーは、マーラティーに自分の忠言を納得させるため、もう一つの話をした。

(第二の挿話)

「デーヴァラーシュトラ国の王子サマラバタは、シヴァ神殿に参詣するため、従者を連れてヴァーラーナシーの町に行った。参詣をすませた後、王子は踊り子や役者や女優、楽師、遊女、商人たちの集会で歓迎をうけた。その場に居合わせた劇団の座頭は、王子の質問に答え、この町では芸能が衰退し、遊女たちも芸事の稽古よりも、客をとることばかり心がけているといって歎いた。そして彼は、王子に可愛らしい踊り子マンジャリーを紹介し、自分の一座が上演する『ラトナーヴァリー』という芝居を見てくれ、といった。王子がマンジャリーの演技に感激して宿に戻り、従者にその美しさを語っていると、そこへマンジャリーの使いの者が来て、女主人が王子に恋い焦がれている心持を伝えたので、王子の情熱は一層燃え上がった。マンジャリーは、王子からの色よい返事を聞くと、召使いを連れて王子の宿に乗りこみ、さまざまな愛戯で王子を悦ばせたが、王子の財物を搾りつくすと、あっさり捨ててしまった。」(このマンジャリーの演技の描写は、演劇の上演に関する好資料として評価されている。)

ヴィカラーラーはこの話を終えると、マーラティーに、お金を沢山儲けたいなら、私の教えた通りにしなさいといった。マーラティーは彼女の忠言を信じ、喜んで家に返った。

以上が『クッタニー・マタ』の概要であるが、第一の挿話の終る前半(四九七句まで)は、専ら客を誘惑する方法を教え、後半(一〇五九句まで)は客を操縦してさまざまの手練手管を用いる方法を教えて

いる。本訳はこの前半のみで、引続き後半も続けてはいるが、近頃兎角四大不調で、とみに視力が減退し、紛れ易いデーヴァナーガリー文字の原文や、細かい活字を読むのにはルーペ（拡大鏡）の力を藉りる有様で、生来の遅筆がさらに度を加え、完訳までにどの位かかるか予想できないので、一先ずここで区切りをつけ、本書の内容を読者に紹介しておくこととした。完訳を期待された読者には誠に申訳ないが、寿命の続く限り翻訳を続ける覚悟であるから、お詫びとともに御期待を乞う次第である。

本書の訳出に当っては、多くの方々に教示をうけたが、何といってもこの稀覯本のテクストを探し出して下さった国際仏教学研究所の湯山明氏に深く感謝するとともに、カーヴィヤ・マーラ本のテクストの複写や貴重な参考書を提供して頂いた東大の原実教授にも感謝の意を表したい。同学の松山俊太郎、上村勝彦の両氏には折にふれて有益な忠言や教示をうけるところが多かった。併せて、感謝の意を表したい。インドの細密画の中に、この本にふさわしいものがないかと探したが見当らなかったところ、たまたまスペインの画家ゴヤの版画に、題名もそっくりの「結構な忠告」のあることを知り、美術研究家円尾安典氏を煩わして口絵にさせて頂いた。厚くお礼を申し上げたい。

目　次

はしがき

●遊女の手引き　本篇

一、発端・ヴァーラーナシーの都……17

二、若い遊女マーラティーが、遣手女ヴィカラーラーに色の道につき教えを請うこと……21

三、遣手女、マーラティーに誘惑の相手として、役人の道楽息子チンターマニの行状を語る……30

四、チンターマニ誘惑のため、気の利いた使いの女を派遣する……37

五、チンターマニのもてなし方
——マーラティーの語るスンダラセーナと遊女ハーララ……48

ターの悲恋物語――花の都パータリプトラ……57
六、花の都パータリプトラ……57
七、婆羅門プランダラと息子スンダラセーナのこと……62
八、スンダラセーナ、友人ダナパーラに旅行の相談をし、友人は旅の苦労を説いて思い止まらせようとするが、二人は旅に出て、アルブダ山に登る……67
九、アルブダ山の描写……73
十、山上でスンダラセーナは美しい遊女を見て恋心を抱き、女も愛情を覚える……78
十一、遊女ハーララターの友達シャシプラバーは、遊女に純愛は適わしくないと諫めるが、耳を藉さない。友達はスンダラセーナの許に行って、ハーララターの慕情を訴える……82
十二、スンダラセーナが心を傾けるのを見、友達のグナパーリタは遊女の手練手管を語って忠告するが、彼は耳を藉さない……88
十三、アルブダ山麓の遊里の情景が、遊女、遣手女、遊び人たちによって語られる……95
十四、スンダラセーナ、ハーララターの家に入り、二人は熱烈に愛し合う……103
十五、遊女たちの内緒話……109
十六、一年半の愛欲生活を続けたある日、スンダラセーナの父プランダラからの飛脚が到着……112
十七、父親の詰問の手紙……114
十八、友人グナパーリタ、高貴な婆羅門の家柄に生まれた者の義務を語り、また良家の妻の在り方を

述べて、遊女との別離を迫る……117
十九、スンダラセーナ、別離の決心を告げ、ハーララターも納得して、二人の間に哀別の言葉が交わされる……122
二〇、スンダラセーナは別れを告げて出発し、残された彼女は悲歎のあまり榕樹の下で死ぬ……127
二一、旅人からハーララターの死を知らされたスンダラセーナは、榕樹の下に引き返し悲歎にくれて彼女を偲び神に訴える……129
二二、友達グナパーリタがハーララターの亡骸に火を点じた時、スンダラセーナはその火中に身を投げようとするが、その時賢者の声があり、スンダラセーナはその言葉に従い、友人と共に苦行林に入る……133

二三、遣手女ヴィカラーラーは、マーラティーに忠言を続ける……135
●遊女の手引き　註……140
●解題……169
●テクスト……172
●翻訳……175
●参考書……177
●登場人物……180
●余録……191
トリ・ヴァリー（三襞の襞）とローマーヴァリー（生毛の條）
あとがき

『クッタニー・マタ』（遣手女の忠言）＝遊女の手引き

凡例

一、本文中〔 〕は訳者の補足で、（ ）は一語のもつ他の意味を示している。

二、二あるいは数句が連続する場合は、句末に句点（、）を付けた。

註において、異本K・D以外に、異本としたのは、出版されていない写本の読み方である。

一、発端・ヴァーラーナシーの都

愛妃ラティーの蓮華の顔に接吻し、その愛をこめて瞶める輝く目の端に憩う蜜蜂なる、愛神カーマに勝利あれ。 一

諸悪を斥けて僅かの徳にも専念する尊き人々は、このダーモーダラグプタの作りし、遣手女の忠言を開き給え。 二

さてここに、あまねき地表の飾りにして、繁栄の福徳を具え、解脱に精進する人人の住む、ヴァーラーナシーという町がある。 三

その町は、欲望の享受を喜ぶ人間のための町であり、半月で飾られた〔シヴァ〕神の体に没入する（神と合一する）ことのむずかしくない町。 四

その身は黄金（月）に飾られ、幸運（灰）にひたり、情人たち（蛇）に取り巻か　五
れた遊女も(1)、獣主《パシュパティ》（シヴァ神）の身体と均しくなる〔町。〕

風に煽《あお》られ、高く聳《そび》える神の宮居《みやい》の頂にまで煽ぎ挙げられた旗によって、そこで　六
は空が、花に飾られた如く輝く。

絶え間なく歩き廻る女の、足の甲に塗った紅い樹脂の液によって赤く染められ、　七
そこでは地表が陸に生える〔紅い〕蓮華の美しさをもっている。

そしてそこでは、美しい女たちの飾りの音が、すべての方角や天空に耳を聾《ろう》する　八
ばかりに鳴り響き、弟子たちの読誦に対する師匠の叱責《しっせき》〔の声〕も聞かれない。

〔その町は〕、酔象の住むヴィンディヤ(2)の山地の如く、また燃えさかる星座に飾ら　九
れた黒月(3)の夜の如くに輝く。

そこには、音律《チャンダス》が常に休止《ヤティ》と韻脚《ガナ》の特徴を具えている如く、苦行者たちの徳《グナ》が集め　一〇

られ、〔その町は〕森の拡がりの如き塁壁をもち(4)、〔また〕トルコの軍隊の如く、
多くの楽師に充ちている。

星の群は〔空高くうかびて〕低き地に著かず、そこでは、梟《ふくろう》は常に暗黒を好み　一一
（隠密を好むものは常に悪事に親しみ）談話においては韻律《ヴリッタ》は蔑《ないがし》ろにされ、同様に賭
博においては他人の家に閉じこもる。

槍を持つものは、〔悔悟の〕冥想にふけり(5)、そこでは、文法家が語根《ダートゥ》を説明する如　一二
くに、錬金術〔の欺瞞〕を解明する(6)。
男は情事において、か弱き女を征服し、発情期が終った時、象のマダ(7)はとまる。

そこは太陽の強い光のある所、そこでは友人知己の離反はおこらない。　一三
苦行者《ヨーギン》たちは杖を携え、〔文法の〕プラグリヒヤ(8)〔という例外〕において、連声《れんじょう》
（サンディ、母音の連結）の切断が行われる（母音の結合はおこらない。）
〔そこでは〕、韻律における〔音節の〕組合せの規則によって、長音節《グル》は彎曲し

た記号で示され、[9]
ヴィーナー〔の音〕には誹謗の声[10]がある〔というが、この町では何人に対しても 一四
誹謗は聞かれないし〕、バラモンの家には歓楽〔の酒〕[11]がない〔というが、この
町ではどこにも不快なことはない。〕

〔そこには〕、〔韻律の〕規定に則った作品や、世間に普及している賢い詩人たち 一五
の譬喩もあり、〔また美しい女の言葉や詩的作品の妙味もある。

〔そこには〕、苑林の道や若い女の顔にタマーラ[12]の葉が認められ、爪痕をつけら 一六
れて喜び弾んだ声が、絃の音や愛の諍いと同様に響く。

〔その町こそは〕、ナンダナ[13]の苑の如く美しく、賢者にみち、天空から降下した[14] 一七
〔恒河が流れ入る〕ところ、
もう一つのアマラーヴァティーの都[15]さながらに、すべてを創造した神によって大
地に齎された〔町である。〕

二、若い遊女マーラティーが、遣手女ヴィカラーラーに色の道につき教えを請うこと

その町に、鳥の王〔ガルダ〕の姿もそのままに、恋人たちの心に悲しみをおこさ 一八
せ、神〔シヴァ〕の心を惹きつける、雪の山の大王の娘[16]〔パールヴァティー〕にも
似た、
マンダラ山[17]の山容を〔仰ぎ見る〕如くに逸楽に耽る男の目をひき、阿修羅アンダ 一九
カ[18]の姿にも似て、遊女たちの上に抜んで、
〔愛神の〕心に住む、性力の顕現として、すべての遊女の飾りとなる、マーラテ 二〇
ィーという名の、いとも愛らしい遊女が住んでいた。
〔彼女は〕、美しい言葉の住家、遊びの家、愛情の住まる所、笑いの地、地口・洒 二一

落の話されるところ、
その彼女が、ある時白く輝く家の高台（テラス）に登ると、誰かが偶然に流れてくるこのア 二二
ーリヤー調〔の詩〕を歌っているのが聞こえてきた。
「遊び女（め）は、若さや美しさの誇りをさらりと棄てて、ひたすら愛する男の心を捉 二三
える〔術（すべ）〕を知らねばならぬ。」
それを聞くと、臀（しり）の大きなマーラティーはじっと心に考えた。 二四
『ほんとに、この賢い人の歌声によって、友達のように適切に教えられるところ
があるわ、
では、輪廻（サンサーラ）の〔世の〕すべてに通じているヴィカラーラーさんの所へ行って訊ねて 二五
みよう。
あの人の戸口には、昼も夜も惚れた男の流れが漂っているのだから。』

このように心にきめると、彼女は急いで家の台上から降り、召使いに囲まれて、 二六
ヴィカラーラーの立派な家に赴いた。
そこで〔彼女が見たのは、〕(19)
わずかに上向いた歯、凹んだ頰、広く平らな鼻の先端、乳首に特徴のある干（ひ）から 二七
びた乳房をもった〔皮膚の〕たるんだからだ、
深く凹んだ紅い目、飾りをつけない垂れた耳朶（みみたぶ）、少し白くなった髪の毛、血管の 二八
あらわな長くのびた頸すじ、
白いさっぱりした一対の衣服〔を着て〕、様々の薬草や宝石をいっぱいつけた紐を 二九
首に巻き、細い指の根元に精錬された黄金で作った指環をはめ、
遊女たちに取り囲まれ、惚れた男たちの贈物をじっと見つめて、椅子に坐ってい 三〇
るヴィカラーラーであった。

マーラティーは遠くから、地面に頭を下げて敬意を表し、ご機嫌を伺った上、与 三一
えられた席についた。
それから彼女は両手をすり合わせ、慎(つつ)ましく席を立ち、頃合いをみてヴィカラー 三二
ラーにこういった。
「あなたは思慮の深い方、一旦こうと定めたら、
胸飾り[20]のないハリ（ヴィシュヌ神）にカウストゥバ〔の宝石〕を、 三三
馬のないハリ（スールヤ神）に〔七頭の〕ハリ（馬）を、
象のいない不死(アマラ)の王（インドラ神）に象王（アイラーヴァタ）を、
財宝のない財宝の主（クヴェーラ神）に財宝を、
必ず与えることのできる方、
あなたに財宝をしぼり取られて、襤褸(ぼろ)をまとい、サットラ祭[21]の家で〔振舞われ 三四
た〕食事を食べる人たちも、あなたのこの思慮の深さをみんな知っています。

ダナヴァルマンさんは、他の仕事を始末して、すべてのものを〔彼女に〕譲った 三五
上で、ナルマダー〔姐(ねえ)さん〕の両足の足台になりました。[22]
サーガラダッタの中の息子のナヤダッタさんは、父の家を空虚(から)にした上で、マダ 三六
ナセーナー〔姐さん〕を欣(よろこ)ばせました。
バッタの息子のナラシンハさんは、戯(たわむ)れに委せたマンジャリー〔姐さん〕の足を 三七
柔(やさ)しく撫(な)でて、この上ない満足に達しました。
清浄なバヴァデーヴァの息子のシュバデーヴァさんは、財産をすっかりなくし、 三八
いくら叱られてもケーシャヴァセーナー〔姐さん〕の戸口を去りませんでした。
他の同じような〔遊〕女たちも、惚れた男たちを手玉にとって、襤褸(ぼろ)だけしか残 三九
らぬようにしました。
それは〔みんな〕あなたの思慮のあらわれなのです。

四〇 私が、家柄も卑く、特徴もなく、病気で、除け者にされた男たちにつくすのも、私が情愛を適当に示すからなのです。

四一 阿母さん、私たちはどうしたらよいのでしょう。呪われた創造主が私たちに背を向けている限り、私たちは自分たちのからだを売物にしても、何も望むものを得られないのです。

四二 ですから、阿母さん、お願いです。私にも役に立つ男衆を世話してください。そして遊女を包む恋の矢の係蹄を投げかける方法を教えてください。」

四三 このように語る可愛らしいマーラティーを優しいまなざしで見て、肩に手をかけ、ヴィカラーラーは優しくいった。

四四 「美しい女よ、燃える愛情から立ち上がる煙のような、あんたのその髪の束は、惚れた男を奴隷にしてしまうわ。

四五 すんなりとお腹の細い女よ、かすかに動く眉のなまめかしさに支えられ、甘い微笑によって愛らしい、あんたのそのまなざしは、賢い男たちを征服するわ。

四六 あんたの顔[23]のその美しさは、耳に届いた〔噂〕だけでもきっと惚れた男たちの心に強い愛情の願いを起こさせるわ。

四七 ちらと瞬間に光り輝く帯〔稲妻〕に均しく美しい、あんたのその歯並びは、男たちに、愛の火の苦痛をはげしくおこさせるわ。

四八 魅惑の女よ、コーキラ鳥[24]の声にも勝るあんたのそのお喋りは、すべての遊び人をひきよせる呪文のように響くわ。

四九 なまめかしい女[25]よ、愛神カーマ[26]の宿る、あんたのその二つの円い乳房は、媚態を生み、他の方法で得ようとしても無駄だわ。

五〇 腿の美しい女よ、立派な腕環で飾られた、蓮の根の繊維のように繊細な、あんた

のその両腕には、誰だって愛情をおこさずにはいられないわ。

五一 愛の神の命令を巧みに果たす、あんたのその腰はほっそりとしているけれど、
生身の男を焦がれ死にさせるわ。[27]

五二 カーマ[28]の弓の弦のような美しさを与える、あんたのその生毛の〔黒い〕條[29]は、若
者に愛神の矢先の苦しみを与えるわ。

五三 象の鼻のような腿をもつ女よ、金銀の板のように魅力のある、あんたのその大き
なお臀は、苦行者の自制を失わせ、若者[30]を魅了するわ。

五四 心を奪う女よ、芭蕉の幹のような〔白い〕あんたのその両腿を、愛の焔の苦しみ
を鎮めるために、誰が望まないだろうか、美しい女よ、いってごらん。

五五 青春の如意樹[31]に絡む黄金の蔓草にも似た、あんたのそのふっくらした両脚を、愛
の実を結ぶために、〔この世の中で〕誰が望まないだろうか。

五六 若い女よ、柘榴[32]〔の実〕の紅さにも負けない、陸[33]の蓮華の美しさをも凌ぐ、あん
たのその両足が、誰の心を飾らないだろうか、〔いつも心の飾りとする。〕

五七 魅力のある女よ、象王を恥じ入らせ、ハンサ鳥[34]をも嘲笑する、あんたのその美し
い歩どりは、若者の心をかき乱すわ。

五八 でも、腰の細い女よ、もしあんたが聞きたいのなら、〔じっくりと聞きなさい。私
が智慧をはたらかせて話してあげるわ。

五九 腿の美しい女よ、もしあんたが莫大な富を獲得したいなら、まず第一に、しっかり
力をいれて、王様に仕えるバッタさんの息子をものにしなさい。」

三、遣手女、マーラティーに誘惑の相手として、役人の道楽息子チンターマニの行状を語る

近くの村に、父親がいつも王様の軍隊に駐留しているので、余儀なく自分が留守　六〇
を守っている、バッタさんの息子のチンターマニという男がいるわ、娘よ。[35]

愛らしく笑う女よ、聞きなさい。彼の服装や振舞を〔知り〕、[36]そして〔いかに〕速　六一
かにカーマの矢の注ぐ範囲に陥るかが〔わかるように。〕

〔彼は〕、五指[37]の巾に毛髪を厚く束ねて髷とし、鋸〔の歯の形〕に作られた象牙の　六二
耳環を垂らし、

指には指環をはめ、首を黄金の鎖で飾り、蕃紅花[38]を塗った肢体には、薄く[39]黄褐色　六三
に染めた衣服を纏い。

首に懸けた花環の首飾りの下は光る黄金に輝き、[40]〔足には〕内側に蜜蠟を塗った、[41]　六四
トルコ産[42]の薄い鉄板など〔で底を張った〕靴を穿き、

色とりどり〔の糸を〕編み合わせ、厚い縁をつけた紐で長い髪を束ね、一方の耳　六五
には〔周りを葉で囲んだ形の〕円い環[43]を、他方の耳には鉛[44]〔の薄片〕を丸く巻い
た〔魔除けの〕耳飾りを垂らし、

たくさんの金糸を刺繡し、サフランで黄褐色に染めた衣服を身に纏い、そして　六六
〔背後に〕厚い硝子〔玉〕で作った環を首にまいて、

千日紅[45]で爪を〔赤く〕染め、手首に貝殻の腕環をはめ、ターンブーラ[46]の小筥を捧　六七
げた、最初の青春をたのしむ〔若者〕を控えさせ、

大勢の長者、商人、遊び人、博奕打ちを主だった人とする舞台の真中に、〔彼は〕　六八
娼婦たちの主人によって〔前に〕引き出され、腿をゆったりと組んで長椅子に腰
かけ、

剣を膝にのせ、酔払って埒（らち）もない言葉をはく、惑乱した五・六人の従者たちに取 六九
り囲まれ、

気の利いた召使いたちに背後から上半身を支えさせ、〔口に含んだ〕ターンブー 七〇
ラによって膨らんだ頰に指(47)をそえ、

周りの様子を顧みず、彼は眉をあげて、繰り返し、上機嫌で、うろ覚えの詩節（シュローカ）か 七一
ら成る歌（ガーター）(48)を朗誦するわ。

怪訝（けげん）そうに頭を振り動かし、感情に駆られた〔様子で〕、傍にいる人々を打ち、『お 七二
お、すばらしい、いいぞ』と、他の人にうまいことをいうと聞こえるような言葉
で、間に割ってはいるのよ。

『それは父が怒って内密に王様に申し上げたことで、王様も父にいわれたのだ』 七三
といって、王様の父親に対する愛情と信頼を吹聴したりするのよ。

葉の裁断(49)〔の技能（わざ）〕を知っているのか知らないのか、〔彼は〕技芸（カラー）の範囲に通じ 七四
ていることを誇示して、人々の集まっている時、いつも鋏（はさみ）を携えているのよ。

〔召使いたちが口を揃えて〕(50) 七五
『梵天（ブラフマー）が宣示した演劇法(51)において、歌唱において、また太鼓等の楽器において、
バッタの子息（チンターマニ）さんの巧みなことは、〔楽匠〕ナーラダ仙(52)たちをも凌（しの）
ぐものがあります。』

『各種の格闘技(53)、布陣の法、〔円盤などの〕飛道具、剣術、短刀術の〔全般〕にお 七六
いて、この方の前にはブリグの後裔パラシュラーマ(54)も常に顔色なしです。』

『この方は、性愛の道に関しては(55)、ヴァーツヤーヤナを無智とし、ダッタカ師を 七七
はるかな門外漢と見なし、ラージャプトラをも獣（けもの）に均しいと考えているのです。』

『〔勇士〕カルナが(56)、〔インドラに〕請われたにしても、無理をして〔身に著けた〕 七八
甲冑を与えるという、その無思慮な宝の本体を棄てた徳を、この方は一笑に附す

るのです。』
『ひたすら遁走に専念する羚羊(かもしか)に、奮迅の歩(あし)をのばす獅子も、バッタの子息の勇 七九
気には恥じ入るのです。』
『狩猟にも興味をもち、動く目標にも打ち勝つのですが、しかし〔父親〕バッタ 八〇
への怖れから、バッタの子息はそれを明白には示さないのです。』
このように、自分の取り巻き連中の語る嬉しがらせの言葉によってすっかり満足 八一
し、心中喜んだ彼は、『これは痛みいる』というのです。
『誰が、どんな動機で始めるのか。[57]そしてどんな美しい踊り子が、遊び人たちの 八二
手拍子に合わせて、コーハラ[58]やバラタの述べた〔演劇の〕作法に従って踊るの
か。』
『あなたはどんな〔舞踊の表現法の〕道と、デーヌカ[59]の定めたどんな拍子(ターラカ)が得意 八三

なのか』などと、一幕劇や舞踊の規則について、彼は知ったか振りをしてこのよ
うに尋ねるのよ。
彼は親しみをこめて、首から美しい花環をとって踊り子に与え、檳榔子(ターンブーラ)と共に、 八四
場違いな褒(ほ)め言葉をいうのよ。
『彼女は腕をなびかせて優雅に肢体(からだ)を脇にくねらせ、それによって清純な姿と魅 八五
力のある美しさを示す。』
『さまざまの情緒(バーヴァ)と情趣(ラサ)[60]〔の表現〕により、また若々しい仕草により、さらに驚 八六
くばかりの〔舞いの〕歩(あし)どりによって、彼女は〔天女〕ランバー[61]をもはるかに凌
ぐ。ましてや〔天女ならぬ〕人間[62]の踊り子たちの世界〔を凌ぐの〕は、いうまで
もない。』
こんな風に、〔踊りに〕凝った彼は、とめ度なく絶間なしに、首を上にのばして、 八七
〔他の人が〕示したこんな言葉だけで、踊り子たちをおだてるのよ。

美しい女よ、バッタさんの息子は、いつもこんな服装と態度でいるのだよ。あん 八八
たが彼を恋の罠の中に陥れようとするのなら、妾（わたし）がそれを話してあげよう。』

四、チンターマニ誘惑のため、気の利いた使いの女を派遣する

「抜け目がなく、大胆で、他人の心を読みとる賢さを具え、まやかし言葉[63]で飾ら 八九
れた使いの女を、何とかして彼のところへやりなさい。
美しい女よ、折を見て、その女を彼に近づかせ、ターンブーラや花を贈り、恋の 九〇
焔を燃えたたせるような言葉で、このようにその女に話させるのよ。
『千回[64]も重ねた私の〔前〕生の功徳が、今こそ実を結びましたわ。見る眼を喜ば 九一
せるお方さま、あなた様が眼の前においでになるのですもの。』
お世辞の羅列、恋著、愛や怒り、別離によって生ずる傷心の悩みを、遊女は、教 九二
えられた通りに演技する女優の如くに披露するのです。

苦行者と遊女とは、老人にも若者にも、身分の低いものにも出生の正しいものに 九三
も、病人にも強健なものにも、同じ心をもつのです。

〔以前に〕十分に面倒をみてくれたのに、〔今は、自分のために〕財産を蕩尽した 九四
男の〔着ている上等の〕衣服にさえも、遊女は欲ばって目をつけるのです。

こんなことを堅く信じている遊女たちにとって、男たちの前で、カーマの矢に貫 九五
かれて悩んでいる人のことを語るなんてふさわしくないかも知れません、

しかし、そんなことを無思慮だとして無視し、堅固な心の飾りをかなぐり棄てて 九六
空しい期待に心を痛めている友達がいて[65]、私に語らせるのです。では、お話しい
たしましょう。

花の弓と矢をもつ〔愛神カーマ〕に、マーラティーの心が捉えられ〔恋心を覚え 九七
た〕のが始まりで、魅力の恋人よ、彼女はついにあなたを見初めてしまったので

す。

〔彼女は〕一瞬首を抬げて〔憧憬の〕態を〔示すかと思えば〕、一瞬はげしい熱の 九八
苦痛におかされ、また一瞬震えを生じ、一瞬汗に身体を濡らすのです。

くり返してわけもなく笑ったり[66]、しばしばしっかりした思慮を失ったり、声高く 九九
泣きわめいたり、さらにまた歌を唄ったり[67]、また黙りこくってしまうのです。

幾度となく長椅子に倒れ、くり返し召使いの膝に、地面に、嫩草で編んだ寝床 一〇〇
に、また水中に身を投げ、絶えず恋の熱に苦しむのです。

水牛のように泥にまみれ[68]、牝白鳥のように蓮根の繊維の腕環を巻きつけ、魅力に 一〇一
充ちたお方よ、彼女は牝孔雀のように蛇の敵となるのです[69]。

[70]芭蕉も、白檀膏油も、蓮華も、水も、真珠の首飾りも、樟脳も、月光石も、美貌 一〇二
のお方よ、彼女の恋の火を鎮める役にはたたないのです。

『樟脳なんか棄てなさい、真珠の首飾りも遠くへ放ってちょうだい、蓮華がなん 一〇三
の役に立つものですか、あなた、蓮根の繊維も棄てなさい、棄ててよ』。昼も夜も
若い彼女は〔私に〕こんなことをいうのです。

〔彼女の〕意図によってあなたを近くに導いたら、やがて〔彼女は〕気分が弾んで〔あな 一〇四
たを〕しっかりと抱きしめますが、〔今までになく〕自分の両腕を圧しつ
けていることを恥ずかしく思うのです。

花の芳香を含む風、郭公のささやき、蜜蜂の群のうなり声、とりどりのものから 一〇五
成るこれだけの〔恋情を誘う〕すべてのものも、実に運命によって彼女の破滅の
ためにあるのです。

怪魚マカラの旗印をもつ〔愛神カーマ〕の力によって、こんな状態に導かれたか 一〇六
弱い女を守ってあげてください。[71]不幸に陥った〔女〕を救い上げてください。明
るい生命に生れ変るのですから。

目的をもった人々の語る言葉は、一般にその目的通りには捉えられ難いもので 一〇七
す。それはそうですが、まあ聞いてください。私はマーラティーの特徴を少しば
かり、思い切ってお話しいたします。

たしかに、美しい手足をもった彼女〔マーラティー〕は、創造主が、カーマ[72]の引い 一〇八
た弓に振りかけた花粉を集めて、それによって作られたものに違いありません。

〔彼女は〕その常に身に著けた〔美しさ〕によって、〔ヒマーラヤ〕山の娘[73]〔パー 一〇九
ルヴァティー〕の美しさを嘲笑うので、蛇王に飾られた〔シヴァ天〕の半身[74]〔パー
ルヴァティー〕も、心が穏やかにならないのです。

月の輪の半分に食い入ったラーフ[75]の口の〔黒い〕影のように、〔彼女の〕蜂の群の 一一〇
ように黒く捲いた髪の線が前額の上に垂れています。

蓮華のうつろい易い美しさと、月の輪の揺がない美しさと、心にいとしい方よ、 一一一

マーラティーの顔はどちらと一致するでしょう。[76]

二二 蜂は〔蓮華のような〕彼女の両眼の上を飛びまわってから、耳に著けた〔真物の〕蓮華にとまって、芳香の〔有るか無いかの〕差違を語ります。しかし〔芳香という〕特質はなくても、彼女はやはり美しいのです。

二三 パンドゥジーヴァ[77]花の美しさにもまさる、生来の紅い色をもった唇に、紅い樹脂を塗るのは、彼女の化粧の娯しみなのです。

二四 彼女の〔三條の〕襞に[78]蔽われたお腹が細いのは、これは不思議なことです。でも、運命によって作られた細さは、大きいということの値打ちも失くしはしないのです。

二五 他の殿方は先ずおやめなさい。愛神スマラの住む彼女の広い腰が目にいれば、カピラ仙[79]さえ瞑想を弛めるのですから。

二六 天女ランバーの美しさをもつ彼女の、ランバー樹[80]〔の白い幹〕にも均しい両腿を見れば、マカラの旗をもつ[81]〔愛神カーマ〕も、忽ち自分の矢の標的にいたします。

二七 臀の重味でゆっくりと歩む彼女を見さえしなければ、魅力のある方よ、芦の間に生まれた〔カールッティケーヤ[82]〕も、それによって梵行に留まることができるのです。

二八 もしも、マドゥ鬼の殺戮者（ヴィシュヌ）が、偶然にも奇数[83]の矢をもつ〔愛神カーマ〕のすべてである彼女を見ることがあったなら、胸に抱いている神妃ラクシュミーも価値のない重荷と思うでしょう。

二九 もしも、彼女が偶然にもハラ（シヴァ）の視界に入ったなら、必ずや〔彼女はシヴァの〕右半身の部分[84]を占めて、三界を不幸にするでしょう。

三〇 このような、すべての婦女のさまざまな美しさを抽出して、造物主が〔彼女を〕

作りあげたとしたら、それは全く偶然[85]だと私は思います。

一二一 生まれつきの魅力を備えた彼女の美しさを見ないのなら、天界の主（インドラ）の千の眼[86]も不要だと、私は思います。

一二二 愛神カーマは花の弓を弛(ゆる)めて下さい。矢を矢筒に挿(さ)して下さい。マーラティーが輪廻(サンサーラ)の世の精髄として大地に遊んでいる間は。

一二三 ヴァーツヤーヤナ[87]、マダノーダヤ、ダッタカ、ヴィタプトラ、ラージャプトラなどによって何なりと語られたことは、彼女の心の中に留めてあるのです。

一二四 バラタ[88]、ヴィシャーキラ、ダンティラ〔の書〕、植物の栽培法、絵画、裁縫、葉の裁断法、陶芸、彫刻、料理法に、

一二五 また楽器の演奏法、舞踊、唱歌に、彼女が通暁していることを、蛇たちの王も千の口を以て語ることができるでしょうか。

一二六 マーラティーは、心中ひそかに愛欲を熱望しつつも、微(かす)かに震(ふる)える衣服をずらして、性急に徳のない人の胸に〔身を〕沈めたりはしません。

一二七 愛欲の喜びに激しく打ち合って揺れ動く腕輪の音と混りあった、その時に発する彼女のよがる声も、寡(か)福な人の耳には届きません。』

一二八 美しい腰をもつ女よ、このように話しても、彼が無関心だったら、使いの女に怒った振りをして、こんな風にいわせるのよ。

一二九 『一体これはあなたの美しさによる自惚(うぬぼ)れなのですか、若気の戯(たわむ)れらしい高慢なのですか。天性の愛情を与えられたマーラティカー[89]さんを軽んじるなんて。

一三〇 生まれのよい人も、お金持も、教養のある人も、頭をさげてくる人も無視する彼女が、あなたのために悄(しお)れているのですよ。

ほんとに、あなたは趣味のよくない方ですわ。

鋭い光〔の太陽神スールヤ〕への蓮池[90]〔のあこがれ〕、灰に塗(まみ)れたシャンブ（シヴ 一三一
ァ神）の頭への半月〔のあこがれ〕[91]、獣(けもの)同然に〔彼女を〕見なしているあなたへ
の彼女〔の想い〕、〔みんな〕それに熱中するのだから、私は痩(や)せてしまいます。

ひねくれた、汁気のない、堅くて摑(つか)みにくく、油気のないカディラ樹[92]に縋(すが)るマー 一三二
ラティカーが、非難の道に近づくとは、不思議ではありませんか。

しかし、鴉が勝手に振舞えるからといって、比(くら)べようもない〔美しさ〕に惑乱し 一三三
て、潤(うるお)いのある蓮華をすてるのが、それが一体悪徳なのでしょうか[93]。

私の申し上げた、きびしい言葉によって気をおとさないで下さい。魅力のある方 一三四
よ、何故なら、恋する女の友達が口にした荒々しい言葉は、若者たちにとって飾
りなのですから。

月の光と月との〔結びつきの〕如く、森の花の華鬘(けまん)とクリシュナ[94]との〔結びつき 一三五
の〕如く、花の矢の蔓と愛神カーマ[95]との〔結びつきの〕如く、

酩酊の気分と斧をもつ〔バララーマ〕[96]との如く、真珠の蔓〔のような首飾り〕と 一三六
双つの乳房との〔結びつきの〕如く、彼女とあなたが結びつけば、四肢(てあし)の美しい
彼女は〔今でも〕可愛らしいが、更に愛らしくなるでしょう。

これ以上申し上げることはありません。もしあなたが若い女の上に足をおくこと 一三七
を望むなら、それならすぐに、愛の火に燃えて美しい宝石〔のような彼女〕を抱
擁なさい。』

五、チンターマニのもてなし方

「さて、〔使いの女の〕この言葉を聞いて、バッタさんの息子（チンターマニ）に 一三八
愛情が生じて、あんたの自宅に彼がやって来たら、美しい女よ、あんたはこんな
風に奉仕するのよ。

遠くから、彼に向かって立ち上り、敬礼して自分の席を譲り、〔衣服〕の縁で彼の 一三九
両足を拭きなさい。

腋窩やお腹や肩や両方の乳房を、それとなく、ちらとのぞかせてから、あんたは 一四〇
すばやく、お客の視界から去るのよ。

それから〔あんたは〕、寝台を備えつけ、灯火を燃やし、花の香りと薫香の香りに 一四一

充ち、拡げられた天蓋に被われた、快い寝室に〔彼を〕導くのよ。

臀の重い女よ、あんたはお母さんに、恭しくお辞儀などをした上、努めてこん 一四二
なとっておきの言葉で、彼を歓迎させるのよ。

『今日こそ念願が叶いました。今日は守り神様もご満足ですわ。幸運の荘厳がこ 一四三
の家を飾って下さったのですから。

今日こそ、ほんとうに、似合いの二人を一緒にさせる、花の矢を持つ〔カーマ神 一四四
の〕弓引きの努力が、やっと実を結びましたわ。

すべての遊女の頭上に足を置くような幸運な娘は、今こそ幸運の旗を掲げなさ 一四五
い。

まったく、娘こそ讃えられるべきです。 一四六
それなのに、世間が男の子の誕生を喜ぶとは、なんてことでしょう。男は女の子

と結ばれれば、あなたのように、婿になれるのですもの。
あなたのような、人々から尊敬される方が、忍耐を重ねて徳を知得なさったとし 一四七
ても、心を喜ばせる方よ、私は娘への愛情から〔一言〕申しあげます。
自然な愛情からあなたに〔心を〕委せたマーラティーが、あなたに嫌われて悲し 一四八
みに陥り、惨めなものにならないようになさってください。』
すんなりとした女よ、あんたは柔らかい、さっぱりとした、香を焚きしめた衣服 一四九
と、優雅な飾りを身に著け、薫香を〔からだに〕よく滲みこませて、情人の近く
に立つのよ。
〔そして〕情愛をこめ、恥らいながら、怖ごわと、しかも熱望にみちて、じっ 一五〇
と瞶め、肉体を少しちらつかせつつ、ちょっとにっこりとして、巧みに話すの
よ。

お母さんが出ていって、寝室に介添えが居なくなり、情人が近づいてきたら、あ 一五一
んたは一瞬、内気に振舞うのよ。
彼が情交のための欲望に駆られて、性急に迫ってきたら、あんたは拒絶する[97]ふり 一五二
をしてからだを少し縮めるのよ。
性の享楽の行為が始まったら、娘よ、あんたはその次には欲情に烈しく興奮し 一五三
て、恐れることなく、率直に肢体を投げかけるのよ。
彼があんたの肢体を叩いたり、見たり、〔爪を立て〕たりしようとしたら、あん 一五四
たは〔一応〕烈しく押しのけ、それから彼を引き寄せるのよ。
噛まれたら、痛みにフンと声をたて[98]、圧しつけられたら、さまざまに喉を鳴ら 一五五
し、爪で傷つけられたら、シーッと声をあげ[99]、打たれたら、はげしく呻き、
疲れたら短く喘ぎ、からだ中の毛は逆立ち、全身に汗をかいて、あんたは男の欲 一五六

情をかきたてるのよ。

一五七 郭公や、鶉や、白鳥や、鳩や、馬の、内心から発するよい啼声を、柔しい声の女よ、あんたはふさわしい時に、喜悦に充ちて、〔嬌〕声を出して真似するのよ。

一五八 『そんなにひどく、あたしを〔圧しつけ〕ないでよ。ちょっと離してちょうだい、意地悪、あたし、もうたまらないわ』と、吃りながら、言葉を切れ切れに、情人にいうのよ。

一五九 情人の状態をはっきりと知ったら、あんたは享楽の間に、愛著、従順、冷淡、傲慢、薄弱〔の態度〕を示すのよ。

一六〇 悦楽の勢いが増大に近づいたら、あんたは、淫らな、不作法な、堅固な心をかなぐり捨てた、慎しみのない態度の流れによって行動しなさい。

一六一 爪の搔傷も気にせず、目を閉じ、力を抜いて、情人の行為が果てたら、あんたは肢体をぐったりと弛めるのよ。

一六二 惑乱が終ったら、あんたはすぐにお臀をかくし、肢体をだらりとして、微笑み、そして恥ずかしそうに、疲れた目付きで瞶めるのよ。

一六三 快楽のつとめが終ったら、離れた場所に行って水で口を漱ぎ、手足を洗い、しばらく坐って髪を束ね、

一六四 口の薫りを整え(100)てから、寝台に上って愛情を示し、情人の首にしっかりと強く抱きついて、このように話しなさい。

一六五 『バッタの若様。あなたの奥様は、ほんとうに、〔彼女に〕ぞっこんご執心のあなたに愛されておいでなのね。だから他の女との抱擁はあなたに十分な満足を生まないのね。

一六六 彼女は生まれた甲斐のある方なのですね。ほんとうに、彼女はすべての女たちの

羨望(せんぼう)の的(まと)ですね。彼女はガウリー女神のみを信仰し、幸福を生む苦行を修めてい
るのですね。
彼女は実に美徳の宿であり、彼女の子孫はいつも称讃されます。彼女はあなたに 一六七
手を取られ〔結婚して〕、百の幸福を享受しているのです。
彼女は幸運の持主で、二つの家系(101)の飾りであり、腰美(うるわ)しく、〔神妃〕ラクシュミ 一六八
ーがナラカの敵(102)(ヴィシュヌ)の心から離れないように、あなたの心から離れな
いでしょう。
美しいあなた、あなたが好奇心だけから、青蓮にも似た眼を投げかけても、女た 一六九
ちは喜悦(よろこび)を昂(たか)ぶらせて、我(103)を忘れるのよ。
たとい(104)お客への愛情が濃くなくっても、心が軽くなった女は、大概お喋(しゃべ)りになる 一七〇
のよ。そこであたしは、自分の利益に向けられた心から、あなたにお願いがある
の。

若さから発する強い愛情によって、あるいは移り気や好意や同情によって、ある 一七一
いは私の幸福の達成のため、あるいは使いの女の巧みさや天性によって〔したこ
とは〕
私たちの生きる方便なのに、あなたがほんの少しの愛情も示してくださらないの 一七二
は、遊女(ガニカー)たちの本性を悪いものと思っているからで、あなたにはなんの苦痛も齎(もたら)
さないのですね。
愛情、怒り、奸計、親切、誠実、羞恥、これらは彼女たちにおいても、生きる法 一七三
として認められているのです。
明らかに生じた激しい愛情に克服され、愛する人との別離に耐えられない心の遊 一七四
女たちにとって、生命は枯草に均しいのです。
まあ、聞いてください。今も榕樹(ヴァタ)(105)にまつわる奇(めずら)しいこととして伝わっている。驚 一七五

くべき事件の話をいたしましょう。」

――マーラティーの語るスンダラセーナと遊女ハーララターの悲恋物語――

六、花の都パータリプトラ

「大地の〔前額(ひたい)の〕粧点(ティラカ)(106)であり、サラスヴァティー女神の高貴な家(107)であり、城塞(プラン)の破壊者(ダラ)(108)（インドラ）の住処にもまさる、パータリプトラという大きな町がありました。 一一六

〔その町は〕、あたかもヴィシュヴァカルマン（造一切神）が、ヴィリンチャ（ブラフマー神）の質問に答えて、三界の大城を完成する腕前を持っている、自分の技術を示すために作られたようなものです。 一一七

〔その町は〕悲運によって挫(くじ)けることもなく、屈辱の痛手に屈することもなく、 一六八
不幸に支配されることもなく、末世(カリ)(109)の汚穢に舐(な)められることもないのです。

〔またその町は〕、逸楽(たのしみ)(110)〔蛇〕によって〔蛇の棲む〕地獄の底に〔比せられ〕、さま 一六九
ざまの宝石の堆積(やま)によって大海に、賢者たちによって神の住居に、富の集積によ
って富の神クベーラの都（アラカー）に〔比せられ、〕

美しい女たちによってアスラの洞窟(111)に、楽師(ガンダルヴァ)たちによってヒマーラヤの谷に(112)、 一七〇
供犠(くぎ)の祭柱(ユーパ)によってインドラの都(113)（アマラーヴァティー）に、静寂の展開によって
聖者(ムニ)の住居に〔比せられるのです。〕

バラモンたちは、すべての経書(シャーストラ)を見ることによって得た穢れのない理性に安住 一七一
し、女たちも、そこでは正邪を判別する試金石の地位を占めるでしょう。

祭犠の火の煙が毛布によって覆われるように、そこでは〔徳(ダルマ)が〕末世(カリ)に生じた恐 一七二
怖によって覆われていようとも、正義(ダルマ)の行為によってそれは消滅されるのです。

そこでは、夜に、月が自分の斑点を蔽(おお)うために〔光の〕手をのばすように、顔の 一七三
宝(114)から、女の美しさを奪うのです。

そこでは、暗黒の幕をなす黒い衣服を排して、逢引きに急ぐ女たちの群のからだ 一七四
の、生まれつきの輝きが拡がって、愛人との結合の妨げ(115)となるのです。

そこでは、腰の麗しい女たちの、動く目尻の鋭い矢によって傷つけられて、さす 一七五
らいの旅人は、自分の妻との媾合(まじわり)の渇望(のぞみ)をやわらげるのです。

また、そこでは高貴な婦人たちに〔このようなことがあるのです〕。慎ましい言葉 一七六
と繊細な手足、心の清純と動く大きな目、

堅い乳房と締(しま)った腰、濃い髪束、生命(いのち)の主（夫）への自然の愛情、家神への信心 一七七
の行事としての供物(バリ)の荘厳、腹部の美しい皺(バリ)(116)、

そして根性の深さと、愛の神（カーマ）の箙（えびら）にも似た深い臍、巾広い臂と尊者に捧げる尊敬の念、があるのです。 一六八

そこでは、羚羊（かもしか）の目のような切れ長の目をもつ女たちが目立たぬ化粧をしていますが、[117]〔内臓などの故障があるのではありません〕。武器の鞘（さや）を引き抜くことはあっても、〔他人の財宝を奪うことはありません〕。垂髪の列の縺（もつ）れはあっても、〔紛糾はありませんし〕、少女たちの〔無邪気な〕恋の遊びはあっても、〔成人たちの恣（ほしいまま）な愛情の行為はないのです。〕 一六九

そこでは、感覚器官が抑制されていて〔罪を犯すことはなく〕、暗黒の惑星（グラハ）が太陽を侵蝕することがあっても、〔主人に反抗することはありません〕。ターラ樹はしっかりと直立していて、〔無定見に抵抗する行動はなく〕、真中に宝石をもつ蔓状の真珠の頸飾りがあっても〔そこでは誰も動揺しないのです。〕 一七〇

蛇共は他の穴（ランドラ）を窺いますが、〔誰も放逸な心から他の行いの正しい女の割れ目（ランドラ）を狙ったりはしません〕。そこでは、美しい女の唇は[118]〔愛戯において〕噛まれますが、〔誰も拒絶されることはありません〕。スーチーの踊りを演じると、針（スーチー）で刺された痛みを感じるものですが、〔誰にもそんな苦痛はありません。〕 一七一

女は身を俯（うつむ）けていても、〔心は〕きちんと立っていますし、歩（あし）どりはのろくても、〔ナルマダー河の急流のように〕悦楽（ナルマ）を与えます。[119]師匠の教訓（おしえ）を好みながら、本性は優（やさ）しいのです。 一七二

七、婆羅門プランダラと息子スンダラセーナのこと

その町に、多くの人に帰依される[120]〔インドラ神〕の如くに、百の祭儀によって尊 一二三
敬され、知識の住居であるブリハスパティ[121]神の如き、再生族[122]の中でも最もすぐれ
た、プランダラという名のバラモンが住んでいました。

彼は、正義（ダルマ）の子ユディシュティラの真実[123]をも、シヴァ[124]天の愛神カーマに打ち克っ 一二四
たことをも、ブラフマー[125]神の五感の制御をも、常に〔虚名だとして〕嘲（あざ）笑ってい
ました[126]。

彼はまた、シヴァ[127]天に対しては、牡牛を蔑視したとして、ヴィシュヌ[128]天に対して 一二五
は、物乞いをしたとして、カピラ仙[129]に対しては、王子たちを痛（いた）めたとして、尊敬
を払いませんでした。

彼は生物（いきもの）の体の破滅に面（おもて）をそむけながら、〔鹿の〕跡を追う狩人〔の如くに、正 一二六
しい道を追求し〕、他の女を顧みないのに、師匠の喜びを願う〔如くに女の喜びを
願いました[130]。〕

すべての生物が自分の住居とする海にも均しく、正しい行いをするものの生地で 一二七
もある、彼の高貴な家柄において、〔末世〕カリの世の汚れの流れが阻まれる〔彼
の家においては[131]、〕

祖霊（ピトリ）への供養の際に、威仮威（こけおど）しに剣[132]〔犀角の器〕を帯びるようなことはなく、若 一二八
い婆羅門が腰帯を千切るのも、愛欲のいさかいからではないのです。

聖典の〔解釈の〕不一致における争論は、遺産の分配に関する憤（いか）りによって促さ 一二九
れるのではなく、火中の熱はひたすら心〔の平和〕を娯（たの）しむ婆羅門たちによって
生ずるものではないのです。

二〇〇 躓(つまづ)くのは老いのためのみであり、唇を振わすのは祈禱の読誦のみであり、祭木を
好むのは祭儀を行う人のみであり、黒色とのつながりは羚羊(レーナ)の皮のみです(133)、〔とい
うけれどそれだけではないのです。〕
二〇一 すべての技芸(カラー)によって両面を明らかにした彼に(134)、言葉の王〔ブリハスパティ〕の息
子カチャにも均しい、スンダラセーナという一人の息子がいました。
二〇二 〔その息子は〕獣主〔シヴァ天〕の目から〔放たれた〕火によって灰となった美
しい〔少年カーマ〕のことを知って、造物主が快楽を楽しむために(135)、第二の〔花
の矢をもつ〕カーマを造ったかのようでした。
二〇三 大聖者〔ヴァシシュタ仙〕の〔貞淑な〕妻〔アルンダティー〕さえ、辛うじて徳行を
守ったのですから、彼の美しさを見て、他の良家の女たちは兎に角黙って我慢す
るのです。
二〇四 磨かれた金の楯のような輝きをもつ、彼の幅広い胸を見れば、やがてラクシュミ

ーも、ハリ〔ヴィシュヌ〕の胸にいても快いと思わなくなります(136)。
二〇五 『もし彼がこのように〔美しく〕作られなかったら、どうだっただろう(137)。月の断片(かけら)
によって作られたのなら、どうして苦痛(くるしみ)を生むのだろう。』このように〔思って〕
彼を見ながら、隊商の群の愛する女たちは決断に達しませんでした。
二〇六 彼は〔雪の如く輝く〕月から清らかな姿を、山岳から堅固さを、雲から気(け)高さ
を、海から深さを得たのです。
二〇七 彼は戒行の住居であり、聡明の隠れ家であり、堅実の座であり、美辞の故郷であ
り、正しい行いをする人の家であります。
二〇八 彼は恋する女たちの愛神(マダナ)であり、美しい白蓮華(クムダ)の月であり、徳の試金石であり、
旅人の街路樹なのです。
二〇九 正しい人との対話を喜び、詩や物語の試金石となり、彼を愛する人の如意樹であ

り、ラクシュミー（吉祥天）の娯楽の地なのです。

八、スンダラセーナ、友人ダナパーラに旅行の相談をし、友人は旅の苦労を説いて思い止まらせようとするが、二人は旅に出て、アルブダ山に登る

彼には、月と海の如く〔に愛し合い〕、盛衰を共にし、あらゆる〔道徳的〕試練に 二三〇
潔白な、グナパーリタという友達がおりました。

ある時、彼がその友と、たまたま二人きりでいた時に、思いがけず、誰かがアー 二三一
リヤー調の詩を歌っているのが聞こえました。

『他の国々の、服装や特性や言葉を知らず、また徳ある人を敬わぬものは、角な 二三二
き牡牛である。』

この言葉を聞いて、スンダラ〔セーナ〕は最高の友にいいました。「グナパーリタ 二三三
よ、この賢者によって〔歌われた〕歌はすばらしい。

二四 善人の行い、悪人の所業、世の人々のさまざまな願い、悧巧な人々によって作ら
れた冗談、みだらな女の曖昧な話、

二五 師匠の秘密の教えの本質、遊び人の行動、狡猾な輩の騙る方法〔これらのすべて
を〕、堀割の〔形で〕海に〔取り囲まれた〕大地を踏破した人間は知るのです。

二六 だから、家に住まっている僅かの親しい人をすてて、さまざまの利益を齎すため
に、友よ、私と心を共にして、出発のため立ち上りなさい。」

二七 このように語って、友達の答えを得ようと片唾をのんでいるスンダラセーナに向
かって、友達は恥しそうに、このようにいいました。

二八 「まことに〔水をさすような〕お願いなので、私のようなものも恥しさを覚える
のですが、しかし、まあ聞いて下さい。旅する人々の困苦をお話ししますから。

二九 身は襤褸に蔽われ、長旅の疲れに力尽き、砂埃の堆積で灰色になり、〔旅人は〕
日暮れに宿を求めるのです。

三〇 『お母さん、姉さん、助けて下さい。どうかつれなくしないで下さい。兄さんや
息子さんたちは、あなたのためにも、仕事によって家から出ているのですね。

三一 私たちは〔今夜〕お宅にご厄介になって、明朝出立いたしますが、それでよろし
いでしょうか。そうすれば、旅人が休息できるのですから、お宅も本来の家らし
くなるでしょう。

三二 さて、私たちは〔今〕夜あなたの家のどこかで過ごしたいのです。お母さん。太
陽も没しました。さあ、どこに行ったらよいかいって下さい。』

三三 このように、各々の戸口に立って、何度も哀れな言葉を重ねても、惨めな男は、
主婦たちによって、こんな言葉で嘲けられるのです。

『宅の人は留守なのよ。何をわやわや喚いているの。お寺へ行きなさい。そんな 一三四
ことをいわれても、〔宅の人は〕出てはいかないわよ。人間の頑固さを見るがい
いわ。』
でも、もしどこか他の家の主人が、何度も何度も頼まれた結果、蔑みながら『そ 一三五
こで眠りなさい』と、朽ちた家の隅を指し示しでもしたら、
内儀さんは『なんで、お前さんは見知らぬ男に宿を貸したりするのよ。』と、一 一三六
晩中、亭主と喧嘩をするのです。
『お宅のご主人はそんな気高い心を持っておいでなのね、姉さん、あなたは何も 一三七
しないでいいのよ。[138]あなたはじっと家にいなさい、悪い奴もこんな風にうろつく
ものなのよ。』
食器などを[139]〔貸してくれと〕求められた頼みに応じて、近くの家から集まってき 一三八
た女たちは、友情をこめて、そんな風に彼女にいうのです。

百余りの家を歩き回った末、飢えに苦しむ旅人は、乞食して得たカラマ（米）、ク 一三九
ラッタ[140]（豆）、アヌ（米）、チャナ（碗豆）、マユーラ（黍）などを食べるのです。
食物を他人に仰ぎ、大地を寝床とし、寺を住所とし、煉瓦の欠片を枕とするの 一四〇
が、旅人の運命なのです。』
このように語られて、スンダラセーナが返事をする番になった時に、誰かが会話 一四一
に関連したこの詩[141]を歌いました。
『望む目的にひたすら心を向ける人々は、寺を自らの住所とし、大地を最も快い 一四二
寝床とし、不味い食物を甘露とする。』
その歌を聞いて、プランダラの息子（スンダラセーナ）は、すっかり満足し、友達 一四三
にいいました。『私の心に過ぎったことを、この歌は明かしてくれた。さあ、一緒
に出かけよう。』

そこで、スンダラセーナは仲間を連れて、苦労の海に降る決心をし、父親に知ら 二三四
せずに、華の都[142]（パータリプトラ）を出発しました。

賢い人々の集会から学び、様々の武器に習熟し、経書の意義を研究し、多くの奇 二三五
異なことを観察し、

木の葉の裁断[143]、絵画、歌を伴う舞踊、弦楽器や太鼓等の楽器を習得し、 二三六

詐欺師のひねくれた話し方、遊び人や浮気な女の戯言を覚えつつ、スンダラセー 二三七
ナは友達と共に、国々を隈なく遍歴しました。

かくて、あらゆる知識を知り悉くし、すべての人々の行動を見聞した彼は、自分 二三八
の家に帰ろうと思って、アルブダ山[144]に着きました。

九、アルブダ山の描写

グナパーリタは、スンダラセーナがその山の背を見たいと思っていることを知っ 二三九
て、「山の王を見物しましょう」といいました。

「流れ下る、冷たく、清らかな水を生ずるこの山岳（ヒマーラヤ山）の息子[145]（アル 二四〇
ブダ山）は、あたかも世間への同情から、雪の山（ヒマーラヤ）によって、荒れた
大地におろされたかのようです。

涼気[146]を齎す月を美しい頭飾りとし、谷間に漂う風を食とし、（蛇を腕環とし）、洞穴 二四一
をもち（スカンダ神を伴い）ヴィディヤーダラに守られ、この山はシヴァ天の美し
さを保持しています。

二二 『ここでは、木々の梢(こずえ)に花が著いている』と、驚きを以て思うのですが、〔同じように〕無邪気な少女たちは、夜になると、星を摘(つか)もうと望むのです。

二三 この〔高山の〕近くに七聖仙(サプタ・リシ)も住(とど)まっている（大熊星座の七星がある）、とは不思議なことです。しかし偉大なもの〔山〕の高さを、誰にも引き寄せることはできません。[147]

二四 この山は、太陽の馬たちの[148]、支えのない大空の道を支え、造物主によって作られた休息所になっているように思われます。

二五 この〔高い〕山の薬草は、〔月に〕庇護を求めるので[149]、月の近くに達するのです。人は概(おおむ)ね慈悲深いものの力によって、支配者に近づくものですから。

二六 大地を支えるのに疲れた方象に[150]、水を灌(そそ)いでやるためであるかのように、この山は滝の奔(ほん)流を注ぐのです。同じ仕事をするものの間には、友情が生ずるものですから。[151]

二七 この山は、聖者の住処と一致するのです。[152]鳩（ハーリタ仙）が美しさを与え、鸚鵡（シュカ仙）が喜び、美しく拡がり（ヴィヤーサ仙）、雲雀(ひばり)（バラドヴァージャ仙）の休息所だからです。

二八 この世への執着を棄てながら、他の世界（天）に到達する方法を作ろうと努め、風を喰(くら)いながら〔蛇も〕[153]殺生をせず、果実を食べながら〔猿も〕[154]跳ばず、

二九 浄業に専念しながら、六種の職業に従い[155]、感官を制御しながら、自由に振舞い、静寂を愛しながら、不快な暴悪を行う、この山には、このような鎮静を喜ぶ人々が住んでいるのです。

三〇 〔山麓の地は〕月の姿のように羚羊(かもしか)をもち[156]、七葉樹(サプタ・パットラ)（太陽の七頭の馬）によって美しさを作り、〔太陽の〕道のように激しく光り輝き、魔女のように肉を啖(く)う[157]（葉が繁る）のです。

待ち焦がれているかのように欲情にみち(158)（マダナ草が生え）、寝室に用意を整えた 二五一
女のように、粧点(159)をつけて美しく（ティラカ樹の美しさをもち）、王様の城門の装飾
のように、沢山の馬（または猿）と象によって守られ（ピール樹に占められ）
(160)アルジュナの矢の群によって、クルの軍隊が被われるように（アルジュナ樹とバー 二五二
ナ樹によって被われ）、千の星(161)にみたされた天空の美しさのように（熊〈又は猿〉にみ
ち）
悪魔の軍隊のように、〔指揮者〕ミシュタカ(162)によって統率され（風味のある檬果樹 二五三
にみち）、夜の如く(163)に畢宿の星は昇り、（薬草胡蓮が育っていて）この山の麓は美し
く輝いています。」
このように友達が山を示し、スンダラセーナも喜んで眺めていると、その時に適 二五四
わしく、誰かによってこんな歌が導かれてきました。
『蒼空の背にも優る、アルブダ山の背を見ぬ人には、多くの国々を遍歴しても、 二五五

苦痛のみがあると思われる。』
それを聞くと、彼はいいました。『この大徳はうまいことを歌っている。友よ、美 二五六
しい山に登って頂上を見ようではないか。』
こうして彼は、至高の山に登り、さまざまな神殿や池や園林や沼や川を見て、驚 二五七
き徘徊しました。

十、山上でスンダラセーナは美しい遊女を見て恋心を抱き、女も愛情を覚える

〔その時〕、雲のない稲妻のような、白蓮華〔の友〕[164]のいない月〔光〕のような、
愛神マンマタと離れたラティー妃のような、[165]ハリの胸に沈んだシュリー妃のよう 二五八
な、
創造主の手の傑作であり、すべての生物の粋であり、美しいものの極致であり、 二五九
愛（神）の勝利の武器であり、
満開の春の花であり、愛の喜びの流れ〔に浮かぶ〕一羽の白鳥であり、戯れ絡ん 二六〇
だ若芽の列であり、聖者の祈念から放たれた矢である〔と思われる〕
一人の美しい女が、友達とともに遊び戯れているのを、彼は花園や四阿の花の群 二六一

によって美しい山の背を徘徊しながら、見つけました。
彼女を見るや、愛神の矢の的になって、大きな驚きをずっと増しつつあった彼の 二六二
心に、このような想いが生じました。
『造物主は一体どこで、こんないとも不思議な巧妙さを生み出したのだろうか。 二六三
相反するものさえも一所に合体されて、このようにこの女は造られているのだか
ら。
〔彼女は〕非の打ちどころのない愛らしい姿で、光り輝く星のように美しく、汚 二六四
れのない蓮華の顔、琵琶の音にも勝る声をもち、
肢体の形をあらわにし（戦いの継続を告示し）、すぐれた美しさから成る関節の結合 二六五
（平和の締結）を示し、豊かな乳房（黒雲）は高く盛り上り、そして秋の月のよう
に白く輝いている。[166]

二六六 歩(あし)どりも楽しく進んで立ち止まることを望みながら（仏教徒の止住を望みながら）[167]、
しかも両足の運びを娯しみ（ヴェーダの二学派の変成を喜び）、広すぎる腰まわりを
もちながら、しかも愛神カーマによって与えられた魅力をもっている。』

二六七 彼（スンダラセーナ）に愛著を覚えた、羚羊(かもしか)の眼をもつ彼女も、〔彼に〕目を向ける
と忽ち花の矢をもつ愛神の手中に陥ってしまいました。

二六八 すべての他の仕事を忘れて、立木に凭(もた)れていた彼女の蔓草のような肉体(からだ)に、突
如、愛の情緒が芽生えました。

二六九 森の林園さえも、その瞬間に茂みを増して、愛神の支配するところとなり、彼女
を悩ましはじめました。実に、支配者の力はすべてのものを動かすものですか
ら。

二七〇 内に愛の焔を燃やしている、彼女の手足や血管や関節から、汗の水が流れ出まし
た。

二七一 花の矢をもつ〔愛神の〕網に捕えられた、細身の彼女は、繰り返しからだをうね
らせながら、じっと瞬(まばた)きもせずに彼を見つめ、女魚(めざかな)の真似をしているようでし
た[168]。

二七二 奇数の矢をもつ〔愛神カーマ〕は、彼女の肢体(からだ)を硬直させ、震えを伴い、〔喜悦(よろこび)に〕
身体の毛を逆立て、汗をかき、溜息をつく状態にしました。悪者は特異のことを
見出した時に悪戯(いたずら)をするものですから。

二七三 溜息によって両つの乳房はふくれ、欲望によって嬌(なま)めかしさを増し、愛情によって
両眼は美しくうるおい、

二七四 愛著によって顔は輝き、言葉も歩(あし)どりも怯(おび)えて躓(つまづ)く彼女を、愛神は麗(うるわ)しさの限界
にまで導きました。

二七五 親友が側にいるのにも拘わらず、愛神カーマの矢の雨に打たれながらも、彼女は
愛の挫折を怖れるあまり、心に思うことを口にすることもできませんでした。

十一、遊女ハーララターの友達シャシプラバーは、遊女に純愛は適わしくないと諫めるが、耳を藉さない。友達はスンダラセーナの許に行って、ハーララターの慕情を訴える

すると、彼女の心の動きを知り、最愛の男にじっと目を据え、愛欲に燃えている 二七六
彼女に、女友達が明るく笑っていいました。

『あのねえ、ハーララターさん、ハラ（シヴァ神）の〔怒った〕フンという声に 二七七
よって肢体（からだ）を焼かれた〔カーマの〕神様による興奮などはすてなさい。純情から生まれる慕情は、お金で買われる遊女たちには、ふさわしくないのだから。

お金のない人は無視しなさい。お金持の男を大事にしなさい。魅力のあるあな 二七八
た、妾（あたし）たちの容姿は、お金を儲（もう）けるために美しく作られているのだからね。

快楽に執着して心を傾け、もろもろの利得を無視したりしたら、腰の美しいあな 二七九
た、あなたは賢い遊女たちの笑いものになるわよ。

誇るに足る青春に面（おもて）を向けた人たち、運命が訪れた人たち、善行が実を結んだ人 二八〇
たち、生命（いのち）の幸福の目的を達した人たち、

そういう男たちも、愛神の矢に貫かれれば、必ず自分からあなたに執着してくる 二八一
わ。細腰のあなた、蜜蜂はマンゴーの花房の方から求められたりはしないものだからよ。[169]』

このように語る朋輩女（ともだち）に向かって、カーマの矢の雨に全身を傷つけられたハーラ 二八二
ラターは、不明瞭な吃（ども）った言葉で、辛うじていいました。

『お姐（ねえ）さん、兎に角〔この〕激しい痛苦（いたみ）を何とかうまく療（なお）してください。不運に 二八三
抱きこまれたものは、教訓をうけるのに値しないのですから。

自分の意の儘（まま）にならない恋人、柔しい風、春の〔楽しい〕月々[170]、遊園、このよう 二八四

な〔望ましい〕ものも、みなひとしく、〔恋人と離れたものにとっては〕、実に生命を絶つものなのです。』

朋輩女の体が、恋という毒蛇の毒の作用[171]にかき乱されているのだと思うと、〔友達 二六五
の〕シャシプラバーは、プランダラの息子（スンダラセーナ）に近づき、お辞儀をしていいました。

『遊女の立場から生まれる当惑からは、言葉にも出せないのですけれども、それ 二六六
でも申し上げねばなりません。親しい友が不幸な時には、それを妥当だときめられないものですから。

このような偉大な輪廻の世においては、実に善良な人たちのことが考慮されるの 二六七
です。そういう人たちの見解では、不幸な人を救済するために乱された心が奮いたつのです。

あなたが私の友達の視界に入ったその瞬間から[172]、彼女は〔身を〕焼かれた愛神に 二六八
支配されてしまったのです。

身の毛が逆立って〔鎧で〕武装したような外面を破って、肉体の内部を馳せ回 二六九
り、彼女の心にある弓から放たれた矢が、彼女を貫きました。

哀れな女に何がいえるでしょう。何処で元気を回復するでしょう。誰に助けを求 二七〇
められるでしょう。さわやかな柔しい南から来る風にもたえず激しく痛められているのですから[173]。

沈黙の誓戒をすてて、声を吃らせながらも、郭公たちは、今や喜んで、囀り声に 二七一
よって女友達（ハーラター）を痛めつける番になりました[174]。

華奢な肢体の〔彼女の〕歩どりが、よろめいてしっかりしないので、白鳥は漸く 二七二
このことで機会をつかみ、疲れも顧みず、満足してあちらこちらとよろめき歩いています。

〔彼女の〕身近で、熱い溜息に灼かれながらも、蜜蜂[175]は彼女の髪の花から離れま 二九三
せん、苦悩（くるしみ）の時にも欲望の快楽（たのしみ）は棄て難いものですから。
『今、私を庇（かば）うのをやめてください』と、蜜蜂はいっているようです。衰弱した 二九四
美しい彼女の耳飾りの花に近づいて唸（うな）りながら。
彼女のだらりと弛（ゆる）んだ、細い蔓草のような腕から、黄金の腕環がずり落ちて地面 二九五
に達したのは、たしかに彼女の手が垂れ下がっていたのが原因なのです。
腰帯が〔唯の〕一歩で彼女の腰から落ちるなんてふしぎですわ。でも、重い腰[176]の 二九六
上に止まっても、落下するのは必至なのですものね。
呪われた真珠の頸飾りは、愛情を認めて、胸元でそんなに弄（もてあそ）ばれながらも、そ 二九七
の瞬間に女友達を灼（や）くのです。内心に叛（そむ）かれて、どうして平安がありましょう。
彼女の白い汗は、〔眼膏で〕黒く汚れた涙の水と混（まざ）って、乳房の岸に落ち、プラ 二九八

ヤーガ[177]で合流する〔ガンガー河とヤムナー河〕の水に似ています。
郭公の声、マラヤの山の〔薫〕風、花、愛、蜜蜂の〔五〕火が集まって、あなた 二九九
の抱擁の喜びを切望する乙女には、五火[178]〔の苦しみ〕になっています。
魅力のあるあなた、哀れな女が愛欲の十番目の状態[179]（死）に落ちないうちに救って 三〇〇
ください。庇護を求めてきたものを守るのは、立派な人の義務（つとめ）ですから。」

十二、スンダラセーナが心を傾けるのを見、友達のグナパーリタは遊女の手練手管を語って忠告するが、彼は耳を藉さない

すると、彼女の言葉に友達が愛情を増したと考えて、心に不快〔を与えること〕を恐れつつも、グナパーリタは友達にいいました。 三〇一

「若い年頃のものにとって、愛情の増大する流れは抑え難いものだが、分別のある人は若い女の愛情の結末を考えるべきです。 三〇二

遊女[180]たちの媚態、愛情、親切、執着、愛の苦悩は、〔客の〕財産と友情の増減に係わる、といわれています。 三〇三

生まれのよい男が、どうして彼女らと交わるでしょうか。一目見ただけで、どうして愛情をもつでしょうか。いくら愛情が増しても、どうして彼女らのこよなき 三〇四

存在となるでしょうか。

遊女たちにとって〔美しい〕プラディユムナ[181]はプラディユムナであり、実に醜いものは常に醜いものなのです。優しいものは優しく、粗暴なものは粗暴なのです。 三〇五

彼女たちが陰部を蔽うのは、相手〔の男〕の色情を唆るためで、差恥のためではなく、美しく輝く衣裳を着けるのは、惚れた男たちを惹きつけるためで、習慣からではないのです。 三〇六

肉汁を食べるのは、男の打擲や圧迫に対するためであって、〔食〕欲のためではなく、絵画などの趣味は、聡明さの現われではなく、気晴らしのためなのです。 三〇七

唇の紅い色[182]は、内心の情熱ではなく、蔓草のような腕は真直だが、本性はそうではないのです。重い乳房が隆起するのは、修行において正しい人たちに喜ばれる 三〇八
到達ではないのです。

もり上がったお臀の重さは、[183]〔彼女が〕お金を搾りとった良家の男への重さ（畏 三〇九
敬）のためではありません。歩どりが鈍いのは、男を欺す努力のための懈怠では
ないのです。

化粧に特別な色の配慮をしていますが、それは愛欲への執着ではありません。唇 三一〇
についた酒は、[184]すぐれた男への愛著ではないのです。

〔遊女は〕、小供にも愛情をもち、老人にも愛の力を与え、苦悩の人にも愛の目を 三一一
向けて長く病床にある人にも希望をもつのです。

〔彼女らは〕、汗の水滴に被われているが、しかし心は自分の持前の濡い（優し 三一二
さ）をもっていないのです。震えを示しているが、金剛石の堅さのように無情な
のです。

〔彼女らは〕、[185]腰を振る品の悪い〔淫らな〕女たちで、他人の世話になり、眼を赤 三一三
く粧い、全身を投げ与えることに巧みですが、心の内は〔他人に〕委せないので

す。

良家の生まれではないが[186]〔黄鼠として生まれながら〕、しかも情人（蛇）に噛まれる 三一四
苦痛を知っており、愛の燈火として灼かれながら、しかも愛（油）への執著から離
れないのです。

強壮な男[187]との結合を避けながらも、情事の際には特別の男を選ばないのです。 三一五
〔不吉な〕黒[188]（クリシュナ）のみを喜びながら、黄金や食物や衣服（ヒラニヤカシプ）
を好むのです。

彼女たちの腰は、メール山の辺りの如くに、千人のキムプルシャ[189]（醜悪な男たち） 三一六
によって侍かれ、王の統治法[190]の如くに、不利益な〔金のない〕者との結びつきを
すべて放棄するのです。

太陽の沢山の光によって綻びる蓮華の如くに、〔彼女らは〕、多くの友の手で〔情 三一七
事の際に〕引き掻かれて好運を得るのです。[191]また〔鬼女〕ダーキニー[192]の如くに、

愛に染著した〔男たち〕を惹きつける（赤い血を吸う）巧みさを備えているのです。
各人（プルシャ）[193]に近づき、奉仕につとめ、様々の手段を用いて、多くの富を摑む 二二八
が、遊女は、本性（プラクリティ）の如くに捉えがたいのです。
長い間、注意深くひきよせてから、蜂[194]は花の束に、遊女はすぐれた男に接吻しま 二二九
す。両方ともすっかり吸いつくすのが巧みなのです。
真実は堅いけれども、磁石と美しさに生きる〔遊〕女とは、届く範囲にある鉄と 二三〇
〔近寄る〕男を引き寄せるのです。
常に男たちに跨がられ、造りものの愛と情熱によって愛らしく振舞う遊女たち 二三一
と、〔飾りものによって美しく飾られた〕象は、臀を打たれているのです。
僅かな黄金でも、前以て〔秤皿に〕置かれていれば、適当な紐（利点）によっ 二三二
てもち上げられただけで、秤はすぐに、遊女と同じように先端（面）を下げるの
です。

外は美しく飾り、内は空虚、本性は堅く〔無情で〕、遊女は機械の操作によって 二三三
鳴る[195]小筥の如くに、快く語るのです。
運命に見離され、遊女たちに愛著で結ばれた男たちは、間違いなく、両手を前に 二三四
のばして（布施を求めて）出てくるのです。」
友達がこのように訓え、スンダラセーナが〔なおも〕恋に悩んでいた時に、折よ 二三五
く誰かから三つの歌が聞こえてきました。
『愛の神（カーマ）に征服された、愛らしい姿に育った若い女を棄てるような、 二三六
そんな愚かなものは、疑いもなく水牛（愚者）の筆頭だ。
なぜなら、美しい腰の女と結ばれる喜びによって、若い女の許に行くことこそ生 二三七
き甲斐で、それだけが男冥利なのだから。

〔愛神の〕花の矢によって燃える焰のすじに全身を灼かれて、強い愛情に傾いた 三二八
女たちは、少なからぬ〔前世の〕功徳を備えた男に憬れるのだ。』
このような言葉を聞くと、プランダラの息子（スンダラセーナ）は友達に向かって 三二九
いいました。「私の心から引き出されたように、この歌はこの善人によって歌わ
れた。
それ故、カーマの矢に傷ついた、羚羊の仔のように動く眼のハーララターを慰め 三三〇
るために、われらは行こう。グナパーリタよ、なんでぐずぐずすることがあろう
か。」

十三、アルブダ山麓の遊里の情景が、遊女、遣手女、遊び人たちによって語られる

するとその時、一人の遊女が、お金は捲き上げたが馴染みであることを無視して、 三三一
その男が嫉妬のふりをして、女の家に入ろうとするのを押し止めました。
ある詐欺師がくれた、丸まった着古しの着物を見て、一人の遊女は悋気ました。 三三二
夜も終りになって稼業が儲からないから。
たまたま巡りあわせで、給金を横取りした一人の遊び人が目にはいったので、怒 三三三
りに燃えた召使女は、急いで追駆けて捉まえました。
屋内に恋人がいる家の戸口に来た、別の文無しになった男に、遣手女はいいまし 三三四
た。[196]『波のよう〔に透明〕な美しい服を身に纏った旦那さん、帰りなさい。』

二三五 歯と爪の傷痕を示して、王子[197]との愛の戦いのことを語って、別の遊女は朋輩の前に、幸運を吹聴しました。

二三六 情人との〔愛の〕戦いで稼ぎを増やした好きもの[198]の姐さんは、遊女たちの中で〔自分の〕幸せを得意になって誇りました。

二三七 一人の遊女との情事〔をはさんで〕の怨恨から、武器を用意した二人の色男のところへ、遣手女は駈けつけて、諍いを止めました。

二三八 『あの人は、大勢からお金を儲けて、ある一人と一緒に娯しんでいるのよ』といって、ある遊女は金持の色男に心を傾けました。

二三九 ドゥヴィパーディカー調[199]のマートラー[200]による歌を、ある遊び人は、種々に変化させて巧みに歌いながら、遊女の前をぶらつくのです。

二四〇 無一物になった色男は、ある遊女が金持の他の男と結ばれたので安心しました。

二四一 『お前に惚れたばっかりに、私は家を棄ててしまい、今やお前は他人みたいになった』と、〔男は〕近づくことができなくなって、ある遊女を非難しました。

二四二 他の男と一夜を過ごしたある遊女を、年老いた遊び人たちの前で〔訴訟で〕負かして、情人は〔罰金として〕玉代[201]の二倍を払わせました。

二四三 『シャシプラバーの両腕の、私が遣ったとわかる特徴のある腕環が、お前に見られたからには、さあ、彼女がどの位たっぷりと船賃を私から受取ったかいえ、いいなさい。[202]』

二四四 『今日は、私が彼女に絹の着物[203]を一対遣ってから四日目だ。それなのに彼女はつれない言葉をきくのだ。マダナカよ、一体私はどうしたらいいのかいってくれ。』

二四五 『ケーリーは私の最愛の女だ。カラハンサよ、だが、彼女の母ときたら鬼婆[204]で、百年たってもあの悪女は私のものにすることはできないよ。』

『快(こころよ)い[205]クンクマの着物を用意しなさい、何をぼんやり立っているのだ。キンジャルカカよ、今日はお前の恋人[206]の踊りの機会じゃないか。』 二二六

『たとい彼女がお前の少し許(ばか)りの金を目当てにして、五日の間お前に愛情を示したとしても、本当は愛情なんかないんだよ。カンダルパカよ、好い気になっても無駄だよ。』 二二七

『ヴィラーサカよ、生きてる間はハリセーナーを遠ざけなさい。愚か者。役人の息子の大悪党(わる)があの遊女とくっついているんだ。』 二二八

『祭礼のためにケーサラーから贈ってもらった衣裳を身に纏い、首を締めつけられてよろめくカーミジャーラの尊大振りを、チャンドローダヤよ、見なさい。』 二二九

『マダナセーナーと乳繰り合っている時に、カウマーラカを私は殺してやりたい。だが、彼女の母親はひどく遠目がきくからな。』 二三〇

『ヴィブラマよ、お前はどんな苦行の功徳で、酔払いのマダナセーナーが自分の手で差し出した酒の残りを味わえたのか。』 二三一

『リーローダヤよ、お前はどうして今、クヴァラヤマーラーの家を棄てたのだ。兄弟よ[207]、女に払う金もなしで、われわれはそこで、どうしたらいいんだ。』 二三二

『ムンジーラカよ、お金を残らず奪われたインディーラカに、ティラカマンジャリーの脚を擦(さす)ってやった夜が今明けた[208]。』 二三三

『マカランダカよ、バーリカーはまだ少女から抜け出していないのに、すべての成人(おとな)の遊女たちは尻目にかけられている。』 二三四

『クプジャよ[209]、あの厳格な踊りの師匠のところへ行って、お前はいうのだ。ハーラーはとてもしなやかなからだをしています。それをあなたは、どうして擦(す)り減らそうとなさるのですか、と。』 二三五

三五六 『スラタデーヴィーよ、鸚鵡の雛に〔覚えさせた言葉を〕暗誦させようと努力しても無駄だよ。あんたの恋人は戸外にやってきて、立って待っているよ。』

三五七 『琵琶を弾くのに疲れて、〔男は〕寝室の長椅子に倒れてのびているよ。マッタ(210)さんがやってきたから、〔お前は〕急いで情事の遊戯をやりなさい。』

三五八 『マーダヴィーよ、あたしがお前に度々いっているしきたり通りに、ヴィグラハラージャさんの息子がくれた装身具を着けないで、装っていいと思っているの。』

三五九 『お内儀さん、インドゥレーカーのこんな取り乱した態度を、私たちはどうしたらいいんだ。酒飲み遊戯(211)に夢中になって、黄金の耳環の落ちたのも気がつかないんだから。(212)』

三六〇 『"黄鼠は牛乳を飲まされないわ"と、怒ったひねくれもののこのカーマセーナーは、いくらすすめられても、ほんとに何も食べないわよ。(213)』

三六一 『シュリーバラの息子が飼っている緬羊を、彼女は手なずけることができるだろうか。ムクラーは不足のない状態を離れて、昼も夜も牡羊の飼育に没頭している。』

三六二 『ラリターよ、お前の掌は赤く腫れてしまってるじゃないの。二度とそんなに長い間、毬遊びに熱中してはいけないよ。(214)』

三六三 『アビラーマよ、まずこの黄金の遊び代を握ることが第一なのだ。そして欲望が起こったら、お前はクスマデーヴィーの生命をも支配するのだ。』

三六四 『もしチャンドラレーカーに気があるなら、兎に角あたしに委せなさい。仕事が成就したら、適当と思われるだけ、少しばかりあたしにおくれよ。(215)』

三六五 『(216)阿母さん、ヴァースデーヴァバッタさんのこの息子は、吝嗇で、恥知らずで、詐偽師で、いくら拒まれても、

三六六 いつもスラタセーナーの着物を、力づくですっかり引き裂き、一片の小羊の毛も
与えぬばかりか、綿布を食べさえするのよ。』
三六七 『お姐さん、あのパタラージャさんの息子は、他の人の〔はいってくる〕機会を
阻んで、[217] 一瞬も家を出ないのよ。沐浴場は裸身の占用ですものね。』

十四、スンダラセーナ、ハーララターの家に入り、二人は熱烈に愛し合う

三六八 このように聞こえてくる、遊び人や遣手女たちのやりとりする言葉を聞き、遊廓
に目をやりながら、彼（スンダラセーナ）は若い遊女（ハーララター）の家に入り
ました。

三六九 〔彼女の〕恋情に引きよせられたかのように、柔しい眼ざしの流れに浴したかの
ように、近づいてきた彼に、ハーララターはいとも〔厚く〕敬意を表わしまし
た。

三七〇 スンダラセーナがそれにふさわしく応じて、深く敬礼した時に、すっかり落ちつ
いた状態で、彼女の友達が頭を下げお辞儀をして、このようにいいました。

「美男のあなた、愛情にさいなまれているものに、悲しい言葉を列ねて何の役に 三七一
立ちましょう。ハーララターがここにいるのです。この女(ひと)の生命(いのち)はあなたに頼っ
ているのですよ。
拘束されない愛の戯れに輝き、自然な愛の結果によって魅せられ、仕事の間の障 三七二
害に妨げられることなく、あなた方二人は青春に向かって進みなさい。
容赦なく烈(はげ)しく、願望の成就を息(やす)まず願い、羞恥を忘れ、衣服をはだけ、愛欲を 三七三
募らせつつ、絶えずあなた方の情欲を増しなさい。」
附添い〔の友達〕[218]が、このように祝福を与えて戸外に去ると、彼ら〔両人〕の肢体(からだ) 三七四
には、明らかな欲情に励まされて、愛欲の悦びが増しました。
十分に愛情というものを嗜(たしな)み、その通りの愛欲にふさわしく、若さを楽しみ、生 三七五
涯の実りとして、

実に粗野が飾りであり、実に不作法な行動が評価され、実に無造作が美点であ 三七六
り、不安定が価値を生じ、
毛髪を摑(つか)むことが好意であり、打擲(ちょうちゃく)が奉仕であり、歯〔嚙み〕が喜びであり、 三七七
爪で搔くことが好運であり、堅く肢体(からだ)を圧(お)しつけることが最高であって、
切実な接吻を嚥(の)み下しつつ、肢体を圧しつけて、強い圧迫を熱望し[219]、〔相手の〕内 三七八
部に入れて〔合体する〕欲望を持ちつつ烈しく抱擁し、
あたかも愛情によって生ずるかの如く、あたかも情熱によって光り輝くかの如 三七九
く、あたかも愛によって躓(つまず)くかの如く、あたかも愛欲によって開展するかの如く、
自信の喪失は不幸であるが、確信も悪行であり、決断も打撃であるが、当惑も不 三八〇
徳であるという、そういうものの中にある悦楽(よろこび)が、彼ら〔両人〕によって賞讃さ
れるのです。

実に最初から、突如として愛欲が燃え立っている限り、その特別な状態は、それ 二八一
が増大した時に、言葉に現わすことはできないのです。
『自然に生じた情熱によって感覚を失う』と、若い両人には、愛経によって定め 二八二
られているのです。〔そして〕様々の実行を重ねることによって、魅惑が〔愛経
の〕知識に達するのです。
性愛の享楽に圧倒され始めた時、彼ら両人には、語ることも、告げることも、考 二八三
えることも、隠すことも、堪えることもありませんでした。
度々繰り返される性愛行為に伴う甘い言葉の連繋も、自然な欲情の激しさによっ 二八四
て切り離され、中断されます。
性愛の行動範囲に没入している両人について、師たる愛神の教示する、愛欲に燃 二八五
える行為の真の状態を、誰が正しく述べることができましょう。

柔かい蔓草のような肢体の若い女は、がっしりした男が彼女のからだを押えこむ 二八六
と、苦痛を感じるだけでなく、歓喜に達するのです。本当に愛の力は強いので
す。
愛する男が愛する女の中に没入しているのか、それとも彼女が、男の中に〔没入 二八七
しているのか〕、私たちには判りません。しかし、自分の肢体の確認は、その時
両人にとっても、全く明らかでないのです。
彼女が目を閉じ、肢体を弛緩してぐったりしているのは、快楽の果てに生命の存 二八八
在を証す〔性的〕悦楽[220]の標識なのです。
汗の水滴に被われ、行為の記憶を想い返して羞恥を生じた彼女は、髪飾りをすっ 二八九
かり乱し、様子を変えて〔男のように振舞い[221]〕、美しく輝くのです。
二人がひたすら〔互いに〕体を委せ、この喜悦のみを考えているうちに、欲望は 二九〇
絶えることもなく、夜が過ぎていきました。

惑乱にうち挫がれて疲れ、欠伸をしながら、よろよろと、眠たさに目を紅くした 二二一
ハーラターは、ゆっくりとした歩どりで、寝室から出て行きました。』

十五、遊女たちの内緒話

(222)『あたしは懇意になった〔お客の〕ところに行って、彼と一緒に飲んだり食べたりして、いろいろと話し合い、少しばかり情事をして、夜を明かしたのよ。』 二二二

『経験のない、がっしり鍛えた、女には縁のない、若い、間の抜けたバラモンが、恋人をよそおって、〔彼が〕急死したと、私のところへ、今夜やってきたのよ。(223)』 二二三

『瞬時も欲情を棄てず、しかも精力はないのにひたすら情事に努める老人のため、あたしは今日たっぷり悩まされたわ。』 二二四

『お酒の勢いに攻められ、死んだようになって、寝台の端に沈み、ぐっすり眠り 二二五

こけて、快くあたしの夜が過ぎたわ。』
『ねえ、あんた、しっくりと濡れ合い、気の利いた言葉やひねった冗談で嬉しが
らせるあの人が、楽しさにひかれて、あたしのところに来たのよ。』 三九六
『寝台の真中に横たわり、顔をそ向け、そっと吐息をつき、汗の水に濡れて欲情
の熱を鎮めたあたしのきつい頼みで、 三九七
すっかり欲望を冷まし、眠気もなくなって、夜も終り近くまで放ったらかされた
村の住人が、今夜あたしのところにいたのよ、あんた。』 三九八
『ちょっと、あんた、聞いてよ。田舎もののお客が、今日おかしなことをしたの
よ。あたしが情事で、好い気持になって目を瞑っていたら、死んだと思い怖くな 三九九
って、あたしを放って逃げだしたのよ。』
『土地柄も知らず、詐偽心をもち、悪賢い王族の息子が[224]、みんなと同じようにや 四〇〇
ってきて、あたしのことを商品扱いに[226]〔嘲弄〕したのよ。』
『ねえ、あんた、世間の人の見ている前で、町のお偉方が、あたしを無理矢理力
づくで連れだしたの。でも、そんなことをしても、規則は決して二倍の罰金を取 四〇一
り立てないのよ[227]。』
『臂を引いて歩き、爪で胡麻粒〔のように小さく〕引掻かれているのを見ると[228]、
ケーラリーよ[229]、どうやらあんたは、誰か南方生まれの男に抱かれたんだね。 四〇二
唇には滴〔点〕、頸には宝石飾り、両方の乳房には兎の跳躍[230]〔の傷痕がついてい
るわ』。ケーラリーよ[231]、あんたの恋人は、花の矢をもつカーマ神の経書〔愛経〕の 四〇三
達人なんだね。』

十六、一年半の愛欲生活を続けたある日、スンダラセーナの父プランダラからの飛脚が到着

このような夜の骨折りを終えた遊女たちの話を聞きながら、明方になって、彼 四四
（スンダラセーナ）もしなければならぬことをするために、仕事に出かけて行きました。

愛欲をつみ重ねて十分に味わい、思うままに〔満ち足りた〕心で、彼女と共に青
春の幸福を享受した彼に、一年半の歳月が過ぎました。 四五

ある時、スンダラセーナが、遊苑の小亭(あづまや)の後を、友達と手と手をつないで、心お 四六
きなく話しながら歩いていると、

強くて堅い糸で繋いだ木綿のような衣服(232)で身を包み、棒の先端に扇と油壺と瓢箪 四七
の水筒と帯を縛りつけ、

破れた革靴〔を穿(は)き〕、裂けて油を塗った両足、汚れたからだの飛脚が足早にや 四八
ってくるのが、遠くから認められました。

プランダラの息子（スンダラセーナ）が、漸く近づいてくる者を認めると、意味深 四九
長にいいました。『おい君、ハヌマーン(233)がやってきたぞ。』

その男は頭を地につけて敬礼し、手紙を地面に置きました。スンダラセーナはす 四一〇
ぐに手紙を取り上げて読みました。

十七、父親の詰問の手紙

『吉慶[234]めでたき花の都（パータリプトラ）より、〔父〕プランダラ、〔汝〕スンダ　四二一
ラセーナに告ぐ。こは心中に生じたる悲痛に苛まれし、定かならぬ類いの言葉なり。

〔汝は〕汚れなき家柄を考慮せず、四姓の長たる婆羅門に適わしきことを無視　四二二
し、忌むべきことを顧みず、悪人の仕える道に堕せり。

真直なる道を歩み、二枚舌の悪徳より離れ、他人の破滅を喜ばざる家系に生まれ　四二三
ながら、何故、汝は迂曲する蛇〔の性〕なるか。

問糾す、いかで、供物の祭餅によりて浄化せられ、ヴェーダの聖句の発声を胎む　四二四
汝の口が、酒の香匂う遊女の口の享受に適わしきか。

問糾す、いかで、吉祥草を摘みて、[235]突如生じて驚く疼痛が、遊女との愛の結合の　四二五
喜悦における、愛人による酷き爪の傷に適わしきか。

問糾す、いかで、三聖火[236]の煙にかき擾されし涙の流るるその顔が、遊女の酷き非　四二六
難による悲しみの重荷より出づる涙の水に適わしきか。

問糾す、いかで、〃ヴァシャット〃[237]という詞の響き、耳を満足せしむるバラモン　四二七
の飾り[238]〔の音〕が、遊女[239]の情事〔の際に発する〕不明瞭なる声による耳の歓びに適わしきか。

問糾す、いかで、師匠の細き枝（笞）の打擲に対する畏怖より生ずる震えが、　四二八
怒れる遊女の酷き足蹴に対する辛抱に適わしきか。

問糾す、いかで、記伝の経書に示されし掟に則る羚羊の皮の外被[240]が、遊女の肌身　四二九

に触れし衣服を纏う好意に適わしきか。

汝は少年時より[241]焼木の切断のみを繰り返したるに、詐りの〔遊〕女の唇を噛む巧 四二〇
妙を何処より得しか。

汝は常に、汚れなき心もて、師に対する恭順のみに専念せり。〔しかるに〕、いかに 四二一
して心邪なる遊女が、汝により巧みに獲得せられしか。

汝が聖典の暗誦において、言葉を明瞭に〔発音〕することに卓れたるは、よく知 四二二
られたり。怒れる遊女を宥める巧妙なる言葉を汝は何処で覚えしか。

されど、何をかなさん。この汚れなき清浄なる家系に生まれながら、汝は前世に 四二三
積みし悪業により、賢者たちの称讃するところとならず。

家事を汝に委ねたる後、余は彼岸の幸福への到達に専念すべし。汝はこの言を日 四二四
日拳々服膺すべし。』

十八、友人グナパーリタ、高貴な婆羅門の家柄に生まれた者の義務を語り、また良家の妻の在り方を述べて、遊女との別離を迫る

このようにスンダラセーナが手紙の内容を知り、決断に迷っている時に、その場 四二五
に適わしく、他の〔誰かが〕、節をつけてアーリヤー調〔の詩〕を唱いました。

『官能の闇に眼を蔽われ、窖に落ちて道を見失える人々にとり、事物の本質を明 四二六
かす長上の言は、細棒〔の先端〕につけた、救いの眼膏[242]である。

現在は厭わしくとも、やがて幸福が成就する。苛酷な義務を述べる長上の言葉 四二七
は、薬草の適用に外ならぬ。』

そこに居合わせた友達（グナパーリタ）は、その言葉を聞いて、プランダラの息 四二八
子（スンダラセーナ）にいいました。『実に、善人は、親しい人の言葉によって圧

迫されないものだが、 四三九
友達の〔忠〕言を顧みず、悪徳の大海に肉体を塗らせた君にとって、立腹された
父君の〔手紙の〕言葉は、最上の支持ではないか。
ご自身の家系の燈火であり、善行によって飾られた、高邁な人物である〔君の〕
父君は、スンダラよ、今や正に、愚かな息子の悪徳に触れて〔汚され〕たのだ。 四四〇
良家の父に生まれた不肖の子に勝る子の存在はない。正しい人の〔善〕行の話に 四四一
接することによって、彼の内心は激しく燃えるのだ。
この世の日常生活においては、通常幸福によって徳は導かれない。[243] だが、息子が 四四二
悪人であれば、母親は子を生まなかった方が賞讃される。
経典の知識も効果がない。師匠の家での奉仕も報恩とはならない。愛欲に耽る心 四四三
は、[244] 正しい道を踏み外す。

人々が互いに顔を見合せ、口を歪めて〔嫌悪を示し〕、遠くから指差して〔指弾 四四四
する〕ような〔悪〕人は、生きていても死んだも同然です。
欲情を鎮めることはできない、とは真実です。しかし賢慮〔の人〕は、非難を意 四四五
味する言葉によって表現されるような〔運命には〕陥らない。
師への奉仕、高貴の家柄出身の妻、光輝ある親族との親近、婆羅門の〔神聖な〕 四四六
仕事、これらは、賢い人において、二つの世界の達成[245]に繋がるものです。
その人にとって幸運が得易く、その徳ある行いがこの世に広く拡がり、善人がそ 四四七
の人を重んじ、親族が常に愛情をもつような、
そういう唯一の人は、正しい人が仕える道からよろめき逸脱することはなく、彼 四四八
は家系を称讃し、すべての幸福が彼に宿るのです。

四三九 道理と不合理とを判別し、古老の教訓の言葉が常に耳の中に充ちている人は、礼儀作法を正しく護持するのです。

四四〇 男が卑しい女に執着するのは、前世の行為の応報なのです。そして輪廻の中における幸運の座は、高貴の生まれの妻なのです。

四四一 彼の機嫌が悪ければ、彼女も機嫌が悪く、彼が欣べば、彼女も欣び、彼が困惑すれば、彼女も困惑します。愛する女は鏡と同じだが、ただ彼が怒った時だけは、彼女は〔怒らないで〕怖れるのです。

四四二 愛欲の闘いに耐えて、望まれている間はからだを離さず、(246) 男の心に順う賢い女は、貞淑な妻となるのです。

四四三 素性の良い妻女の真実の愛の欣びは、連ねた腕環の鳴る音が〔聞こえはしないかと〕ひそかに怯えつつ、からだを投げだし、目を閉じて〔夫の〕愛〔撫〕を希うことなのです。(247)

四四四 『どうして、ハーハーという〔悩ましい〕声を立てるのだ。〔それは〕恥を知らないものが聞かせるものだよ。でも、近くにいる召使いも、愛欲に痛むお前のことは忘れてしまうよ。』

四四五 このような、フンという声とともに、苦労を示す意味の〔夫の〕言葉によって、素姓のよい妻女は、夫の動作に惑乱を二倍にするのです。』

十九、スンダラセーナ、別離の決心を告げ、ハーララターも納得して、二人の間に哀別の言葉が交わされる

このようにいわれて、プランダラの息子（スンダラセーナ）は、差し迫った、生命 四四六
と均しく〔いとしい〕女との別離を怖れて、震える言葉を友達に向かっていいま
した。
「父の教訓に背かず、ハーララターと別れる烈しい火〔の苦しみ〕には、運命の 四四七
力に従って死ぬほかに、我らはそれに代るなすべきことを知らない。
財宝の獲得を無視し、一途に愛欲に縛られた心をもつ愛する女を、運命に引きず 四四八
られた〔男〕は、たとえ堅く結ばれていようとも、鉄や金剛石の粒〔に均しい堅
固な意志〕によって、放棄するのだ。」

このように決意を述べて、可愛しい恋人を納得させ、彼女もまた悲歎にくれつ 四四九
つ、事情を説明する彼〔の言葉〕に従うのでした。
榕樹[248]の下に立ち止まり、涙の滴を目尻に湛え、足の動きを止めて、彼はハーララ 四五〇
ターにいいました。
「愛する女よ、旅立つ愛しい人を見送るのは、乳木樹までか、あるいは水〔辺〕 四五一
まで、という言葉がある。[249]あなたはそれに従って、ここから戻りなさい。
運命に見離されたものに、何ができよう。〔運命は〕彼らの痩身を酷しく支配する 四五二
のです。愛の結び目が切れ、師の教え〔という〕矢が防げないものは、
財宝の獲得に到達することなく、一事に専注する知識もなく、快い〔言葉の〕有 四五三
難[250]さもなく、長上の指導もなく、表面の誘惑もなく、また賞讃もないのです。
われわれの間での、あなたの行動が原因なのか、それとも宿命の力からなのか、 四五四

どうしてこのような癒すことのできない〔別離という〕不幸な結果になったのだろうか。

愛情〔のもつれ〕から怒ったり、戯れて疑ったりして、〔私が〕荒々しくあなた 四四五
にひどい言葉を放ったのを、歯の美しい女よ、あなたは気にかけないでください。

〔私の〕この心は、あなたの心の中にしまわれている。担保の保持は厳しいもの 四四六
だから、努めて大切にして、それを失わないようにしてください。」

こうして〔彼が〕涙混じりの声で繋いだ言葉を止めると、ハーララターは声を詰 四四七
まらせながら、辛うじていいました。

「穢れた家に育ち、肉体を与えて生業とし、詐偽の行為を振舞い、美貌を売り物 四四八
にするこの私と、立派な素姓を徳とするあなたとが、どうしてつり合いましょう。

あなたは、地方（快楽）(251)を求めて此処に来て、こんなに長い間おちついてしまいま 四四九
した。これはきっと私の前生の善行の果報なのですわ。

執着をもって見合い、知り合ったものに関心をいだいても、誰が、尊者への奉仕 四五〇
や親族や故郷での居住や従順な妻を見棄てるでしょうか。

若者の浮気というのは、あなたがた〔殿方〕が私のようなものに興味をもつこと 四五一
です。でも、完全に幸せな地位は、〔やはり〕ご自分の奥様なのですわ。

甘い戯れや、いい加減な言葉や、好ましい情況などは、あなたが平穏を願うな 四五二
ら、心の中で秘かにでも、思ってはいけません。

無思慮から、あるいは大きな愛情から、私があなたに叛いて与えた不快なこと 四五三
を、あなた、私は今頭上で合掌して〔お詫び〕いたします。

道は行くことも叶わず、遠く離れて住み、〔私の〕心は落ちつくこともありませ 四六四
ん。だから、グナパーリタさん、あなたのお友達は取りみだすことなどありませ
んよ。」

二〇、スンダラセーナは別れを告げて出発し、残された彼女は悲歎のあまり榕樹の下で死ぬ

二つの心が一つになって、若い二人が共に別離の苦しみをうければ、お互いの間 四六五
に均しく〔幸せを齎す言葉の〕[252]道が読みとられるのです。
「互いの堅い真心から成る、愛情の絆（きずな）が断たれた人たちには、死かあるいは賢者 四六六
の正しい判決があるのみです。」
このようにいい聞かせた後、「可愛（いと）しいあなた、達者でね、私は行くよ」といっ 四六七
て首を回らせ、ゆっくりと立ち去りました。
〔ハーララターは〕榕樹の枝に腕を支え、溜息をつき、熱い息吹で唇を乾かし、 四六八
心乱れて、じっと瞬きもせず、その路を見送りました。

揺れ動く髪の毛が優れた首飾りを横切り、涙の水が萎(しお)れた力のない蔓草のような 四六九
肢体(からだ)に滴り落ち、

砕かれた心を支えるかの如く、両方の乳房を他の手によって抑え、生きる世の仕 四七〇
事を失いながらも、魅力を残しているのです。

悲運に打ち挫(ひし)がれ、激しい苦悩の想いに打ちのめされ、心空(むな)しきハーララターは 四七一
痛ましくもいいました。

「どうか、この惨酷(みじめ)な〔私の身が〕森の叢(くさむら)によって隠されない間は、一瞬だけ 四七二
でも過ぎないでください」といって、彼女は息が絶えました。

二一、旅人からハーララターの死を知らされたスンダラセーナは、榕樹の下に引き返し悲歎にくれて彼女を偲び神に訴える

それから暫くして、プランダラの息子（スンダラセーナ）は、追いついて来た旅人 四七三
に尋ねました。「あなたは、悲歎にくれて帰って行く美しい女に会いませんでし
たか。」

彼は答えました。「榕樹の下の地面に、身動きもしないで女が倒れていたが、そ 四七四
のほかに我々の目には入らなかったよ。」

その矢で貫かれたような[253]言葉を聞いた彼は、肉体の苦痛から地上に倒れました 四七五
が、友達に助け起こされ、悲しみに傷ついてこのようにいいました。

「目的を達して、父とあんたも、良き友よ、これで今満足だろう。それと同時 四七六

に、ハーラーターは、私との不幸な過ちと生命から解放されたのだ。
噫、噫、お前のあの媚態[254]は消えてしまった。戯れ[255]も失われた。あの喜び[256]はどうし 四七七
たの。装飾[257]も落ちてしまった。慌てた化粧のつけ違い[258]もなくなり、お前は十方
〔の支持〕から見棄てられてしまった。
興奮[259]は森に去れ。〔無言の〕愛の表現[260]は無防備にまかせて隠すな。偽りの怒り[261]は 四七八
出家の態度をとれ。無関心[262]なふりは地面の裂け目に入れ。
よりかかる優雅な姿態[263]も頼る人を失い、口もきけない恥じらい[264]はどこにも見られ 四七九
ない。月の面の光は曇り、末期の死が〔彼女〕に訪れたのだ。
私は戻ろう。私と別れて生命を捨てた愛しい女〔の遺骸〕を焼くために。それが 四八〇
哀れな女の、火の神に捧げる唯一つの奉仕であろう。」
こういって彼は、彼女が死んだ場所に行き、号泣して地面を転がり、友達に身体 四八一

を支えられました。
「私たちはここに戻ってきたのだ。怒りを棄てなさい。怒り易いお前、何かいっ 四八二
ておくれ。立ち上りなさい。どうしてお前は体を塵に被われて〔横たわって〕い
るのだ。
眉目麗しい女よ、眼を閉じて、どうして返事をしてくれないのか。お前の妨げら 四八三
れることのない行動の仕方を犯してしまったのだから、最早私はお前と快楽を共
にすることはできない。
お前が天界に赴いたら、天空の王（インドラ）の都（アマラーヴァティー）の女たち 四八四
（天女アプサラスたち）も顔色なしだ。たとえ五本の矢があっても、今や愛神（カー
マ）は武装しないだろう。
『遊女には実がない』と、人々の間でいい触らされている誹謗は、愛する女よ、 四八五
お前が生命を捨てたことによって、全く打ち消された。

シヴァ天の唯一の忠実な息子マハーセーナ[265]は称讃に値する。彼の心は美しい目を 四八六
もつ女の愛情にも、少しも動かされない。

私は思う。ハリ（ヴィシュヌ）が〔神妃〕ラクシュミーを胸の上に〔抱き〕、ガウリ 四八七
ー〔妃〕がハラ（シヴァ）によって、半身を分ち合っているのは、愛するものとの別離は一瞬も堪えられないからなのだと。

嗚（ああ）、世界の守護神よ、[266]『彼女は地上の装飾（かざり）であり、彼女なくしてすべては空虚で 四八八
す』何故あなたは、その美しい女をあなたの国に連れ去る時に、そのことを考慮してくださらなかったのですか。

尊き火の神よ、どうか美の海の精粋を取り上げて、創造主の作り上げたこの世界 四八九
の装飾（かざり）を焼かないでください。」

二二、友達グナパーリタがハーララターの亡骸に火を点じた時、スンダラセーナはその火中に身を投げようとするが、その時賢者の声があり、スンダラセーナはその言葉に従い、友人と共に苦行林に入る

このように、幾度も歎き悲しむプランダラの子（スンダラセーナ）に構うことな 四九〇
く、友達は薪を集めて、かの遊女〔の亡骸〕を焼きました。

悲歎のあまり惑乱した彼が、火中に身を投げようとした時に、誰かが心を揺がす 四九一
ようなアーリヤー調の詩を歌いました。

『夫の死を追うて殉死[267]する女の義務（つとめ）の決意を、いかなる良識ある男が、輪廻を解 四九二
脱する方法として、杖を携えて[268]〔遊行する〕戒行を棄てて、行うであろうか。』

スンダラセーナはそれを聞いて、失意を棄て友達にいいました。「この賢者の適 四九三
切な教示によって、私の心は目覚めた。

たちまち現われ、たちまち消える、愛する人の生老病死を包含する、流転輪廻の
世に、いかなる賢者が執着するであろうか。　四九四
君はクスマプラ（パータリプトラ）へ帰り給え。われらは最後の住期の隠遁(アーシュラマ)生活[269]に　四九五
入り、無明捨離の成就を決意した。」
かの賢者はいいました。「幼い時から、私はお前から離れたことはない。今や遊　四九六
行者となる覚悟をきめたお前は、何故欲心を棄てた友達を棄てるのか。」
「正にその通りです。」といって、不動の誓戒を守る苦行林に入るために、スン　四九七
ダラセーナはグナパーリタとともに、森に入りました。[270]」

二三、遺手女ヴィカラーラーは、マーラティーに忠言を続ける

こんな風に遊女というものは、自分の利益のために動くもので、真実の愛情なん　四九八
かもつものではないのだよ。たとい望ましい情事が成就しなくても、お前さんた
ちに何の損になるものか。
真実を求める心労は、愛人の心に従って巧妙に振舞い、六十四芸に通じた遊女た　四九九
ちの打挫がれた心を動揺させないのだよ。
馬は、駆者の愛情に左右されなくても、曲ったり跳(は)ねたり、いろいろの歩き方や　五〇〇
止まり方を理解し、命令に従うことによって、駆者の心を捉えるものだよ。
郭公や鴿や家鳩には、ほんの少しでも、どこからか、愛情が（涌いて）くるのか　五〇一

ね。かれらは、それでも、その若さから様々の囀り声によって、愛の神[271]のために
燃えるのよ。
俳優は、〔心に〕情緒がなくても、教えられた通りの適切[272]な扮装で、正しくすべ 五〇二
ての演技を成就することによって、観客を喜ばせるのよ。
しかし、お金銭を失って情気ながら、艶めかしい〔遊〕女の抱擁に目をやるよう 五〇三
な愚か者に、あんた方は訊ねるがいい。「正妻さんたちは、衣食のためにお金銭
を使わないのですか」とね[273]。
でも、男たちはお金儲けのためにだけ仕事をするのではないのよ。愛欲などのこ 五〇四
とも、愛経[274]の作者たちによって語られているのだもの。
スンダラセーナからお金を捲きあげた上で、別離の斧に打ちひしがれ、半時にし 五〇五
て生命を捨てた憐れな彼女（ハーララター）のような、そんな女が一体いるのかし
ら。

いとも若やいだ気分をもち、〔喜びに〕毛をそば立てるなど、他[275]のからだの 五〇六
魅力を露わにし、〔男の〕情熱を喚起こす持前の態度を示す愛情を、誰が抑えら
れるものですか。
長上の人に仕えるのは窮屈でも、不貞な女たちのいたずらな心はうらはらで、眉 五〇七
をひそめ、目尻から柔しい流し目〔を放つこと〕に恵念することを知っているの
だよ。
ほかにも、夫の家を棄て、家族の汚点も、他人の非難も意に介せず、愛欲への執著 五〇八
心から、〔恋する〕男を求めて、地の涯まで行く女もあるのだよ。
夫に蔑まれ、長上や従者に厳しく扱われ、家に居ても苦しい立場にあれば、貞節 五〇九
を守らぬ女たちは、強い愛欲〔に燃えて〕他の男に執著するものだよ。
よろめいた振舞いもせず、ひたすら夫の足許に仕える女も、ただ習慣だけから、 五一〇

愛欲を離れた状態を続けるだけなのさ。
それ故、どんな男も、〔女と〕交わるいろいろの動機があれば、それを抑えるこ 五二一
とができないのさ。そして〔結局〕、自分の妻、他人の妻、売女たちの愛に頼り
思いを遂げるのさ。
このような類い〔ハーラターの話〕の証拠と結びついた話によって(276)、またその 五二二
他の甘言によって、いい寄ってくる男の心を靡かせ、
あんたは、うまく眠りから覚めた振りをして、少しばかり疲れを示し、欠伸をし 五二三
て、夜が明けると、しっかりと〔男を〕抱きしめ、
閉じた目を開いて擦り(277)、遙かな蒼空の方を見て、長い溜息をつき、こんな風にい 五二四
うのだよ。『意地悪な夜、あなたはなぜ明るくなるの?(278)
か弱い女が、どうして強い力をもった男の愛の享楽への動勢に耐えられるでしょ 五二五

うか。もしも〔女に〕力が与えられなかったら、愛情を生じた満足は果されませ
ん。
幸せな〔雌の〕鴛鴦(279)が、最愛〔の雄鳥〕と結ばれる時〔昼間〕が来たのに、 五二六
白蓮華よ(280)、どうしてお前は、月によって〔私たちを〕別れさせて、悦楽を裂くの
ですか。
咲き出で、香り高く、心を楽しませて立っている新鮮な花に近づけぬ蜜蜂が、 五二七
〔蜜の〕味を味わえないのと同様に、〔花も蜜蜂と〕離れたことを悩みません。
それ故、〔お月様〕、私はあなたに対し、頭上で合掌し、お辞儀をしてお願いしま 五二八
す。どうぞお恵みによって従者たちの中にいれてください。
こうして〔男の〕心を燃えたたせる情熱や、〔損〕得を忘れさせるような嬌態を重 五二九
ねたり、優しさや、心の愛情を尽くすことによって〔男を〕信頼させたら、〔こ
んな風にいうのだよ(281)。〕

註

1 シヴァは前額に半月を頂き、体には灰が塗られ、首には蛇がまきつき、家畜の主といわれる。

2 vindhyadharādharabhūriva 異本 K・D divyadharādharabhūriva.

3 満月までの月の前半を白月、後半を黒月という。

4 sasāla 異本 saśāla.

5 śūlabhṛro dhyānasthāḥ 異本 K vyālasthāḥ.

6 錬金術師は欺瞞者といわれる。

7 発情期の雄象の顳顬から滲出する液をマダという。

8 pragṛhya-exceptions. 連声法 saṁdhi において、名詞・動詞の両数語尾および代名詞 adas の男性、複数、体格 amī の末尾の音はいかなる母音とも結合しない。cf. Pāṇini I, 1, 11-19; VI, 1, 125.

9 短音節 laghu の記号は直線、長音節 guru の記号∫は彎曲している。

10 viṇāyāṁ parivādo 意味不明、ヴィーナーの音は不協和だという誹謗がある、という意味かもしれない。トリパーティーの註によれば、na tu kasyacit parivādaḥ nindā śrūyate （しかし〔ここでは〕何人に対しても誹謗は聞かれない）。ヴィーナーは七絃の楽器

11 同じく註によれば、aprasannatvaṁ nāsti, prasannā surā yeṣu teṣāṁ bhāvaḥ, na tu keṣucidaprasannatvaṁ duḥkhitvamityarthaḥ （しかし〔この町では〕どこにも不快なことはない）という意味だという。

12 tamāla-pattra 多摩羅樹葉、暗黒色の葉をもつ。婦人は顔にタマーラの葉の形の tilaka を描く。註106参照。

13 Nandanavana 難陀園、歓喜園、インドラ天の楽園。

14 nākavāhinī 天空から降下した女、ガンガー女神のこと。ガンガー女神は天界からシヴァ神の頭上に降下した。

15 Amarāvatī 神々の都、インドラ天の住処。

16 prāleyanagādhirājatanayā パールヴァティー女神のこと。

17 mandaradharaṇibhṛt マンダラ山、神話の山の名、乳海攪拌の時、軸棒として使われたという高い山。

18 andhāsuragātralekheva 阿修羅 Andhaka は千の臂と頭をもち二千の眼と足を持つという巨大な体軀で、シヴァの神妃パールヴァティーを掠奪しようとしてシヴァに殺された。

19 詩句二七—三〇までは連結してヴィカラーラーの様子を述べている。

20 vidadhāsi harimakaustubhamahariṁ harimagajanāthamamarendram……kaustubha ヴィシュヌ神の胸飾りの宝石。太陽神スーリヤは七頭の馬の牽く車にのって天空を走る。インドラ神はアイラーバタという象にのっている。クヴェーラ神は財宝の神でヴァイシュラヴァナ（毘舎門天）ともいう。これらのものは何れもここに挙げた神々になくてはならぬものである。

21 サットラ祭は長期にわたって行われる祭で、その際には食事の布施を行う。

22 pādapīṭhatva 足をのせる台の役。詩句三五—三九はヴィカラーラーの思惑の結果、遊女と結ばれた男たちの話である。

23 原文 vadanakānti 異本 K・D daśanakānti（歯の美しさ）。マイヤーの使用したテクストは、この daśa-

nakāntī であるが、彼は darśana（目の美しさ）の誤りで、śrutipathamapyupayātā を「耳のところまで達する」と読み、切れ長の目を形容する常套的な言葉であるから、darśana（目）の方がよく、歯については次の句に daśanapaṅktī（歯の列）という言葉があるから、ここは目の方がよいという。しかし darśana では韻律に合わぬから、むしろ nayana- の方がよかろうといっている。トリパーティーの註 śrutamātr a'pi によりこのように訳した。

24 parabhṛta「他のものによって養われるもの」、kokila インド郭公のこと。

25 bhogavatī 妖艶な女。とぐろをもつ女（女の蛇）の意もあり、美しい竜女は色欲の道に達しているといわれる。

26 makaraketananiketana マカラ魚を旗標とするもの、愛神カーマのこと。

27 daśamīm prāpayati manmathāvasthām 恋愛の十番目の状態に到達させる。daśamī は人生の最後にあたる十番目の段階、即ち九十歳以上の状態。

28 saṁkalpaja 欲望から生じたもの、愛神カーマの別名。

29 romarāji インド詩人の称讃する美女の特徴。女の乳房の間から臍の上まで縦に走る黒いうぶ毛の条、romarāji, romāli, romāvalī ともいう。Viśveśvarapaṇḍita（十八世紀の作家）はこの女の魅力を称讃して 'Romāvaliśatakam'（生毛の条の百頌）という小品を残している（Kāvya Mālā 8, 1891）。愛神カーマの矢に射られると、男も女も恋心を募らせる。カーマの弓弦は黒い蜜蜂の列に喩えられる。

30 taruṇavaśīkaraṇam 若者を（魔力で）征服する。異本K・D taruṇi vaśīkaraṇam 若い女よ、お前のお臂は（男を）束縛する。

31 Kalpataru 天界にあって望みのものを出すという神話的の樹、如意樹。

32 dāḍima 学名 Punica granatum. 柘榴の実は紅い。

33 sihala-kamālinī 学名 Hibiscus mutabilis. 陸に生える蓮で、その紅い花は女の紅く塗った足に比せられる。詩句七参照。

34 象の歩み、ハンサ鳥の歩みは美しいとされる。

35 putri 娘よ。異本K・D にはこの語がない。

36 nipatati tathā ca tūrṇam priyasurabhiśarāsanaprasare, 異本K・D nipatati sa yathā tūrṇam priyasurabhi kusumaśarāsanaprasare. priyasurabhi いとしい春、愛神カーマのこと。

37 aṅgula 拇指の巾。詩句六二―六七はチンターマニの服装や態度を述べている。

38 kuṅkuma サフランの一種、Crocus sativus.

39 kiñcitpiñjaritavasanasaṁvitaḥ 少し黄褐色に染められた衣服。異本K・D kiñcit piñjaritasarvāṅgaḥ 全身を軽く摩擦して肢体にサフランを塗り。

40 pravilambikusumadāmakagalamaṇḍanajātarūpakṛtaśobhaḥ 意味不明。前の句に黄金の鎖とあるのでこのように訳してみた。A. M. Shastri も 'a vague allusion to neck-ornaments of gold' といっている (India as seen in the Kuṭṭani-mata of Dāmodaragupta, Delhi, Varanasi, Patna, 1975, p. 141)。

41 恐らく靴下をはかないので、足の擦れないためであろう。

42 トリパーティーの註には、トルコ産の燻香をたきしめた靴とも解されるといっている。マイヤーは seine Fussbekleidung ist ein Türkenstiefel... と訳している (Meyer, S. 11)。

43 dalavīṭaka. トリパーティーの註によれば、これは葉で包んだベテル（檳榔樹の実）のことで、ここではそれに似た耳飾りのことだという。耳飾りの種類 dalapīṭaka, sīsapatra, dantapaṅkti に関してはシャーストリが詳しく説明し（Shastri, op. cit., pp. 139–141）、図示している（Pl. XIII）。右と左に形も材料も異なる耳環をつけることが流行したらしい。詩句六二に鋸歯状の象牙の耳飾りをつけているとあり、種々の耳環を取り替えてつけているということだろう。シャーストリは三つの耳飾りを同時につけていると解している（Shastri, op. cit, p. 167）。（一八七頁の插図参照）

44 sīsapatra 鉛片を丸く巻いた耳飾り。鉛は貴金属ではないが魔除けの力があるので飾りに使用された（Meyer, S. 11, 脚註7参照）。

45 vṛścika. トリパーティの註によれば kurabaka 又は raktopunarnavā の赤い葉と花のことだという。クラバカは学名 Gomphraena globosa, crimson Amaranth とあるので、漢訳に従い千日紅と訳した。マニキュアとして用いられた。

46 tāmbūla 檳榔樹の実は口中を爽快にするので、貴人は侍者にその実をいれた小筥や皿、盆などを捧持させる。

47 karaparṇa 異本 D karṇaparṇa（耳飾り）。

48 サンスクリット語の śloka をプラークリット語の gāthā で誦唱する。

49 patraccheda, bhūrja（樺）などの木の葉を種々の形に切る技芸、切り絵の類であろう。ヴァーツヤーヤナの『カーマ・スートラ』（一・三・一六）に挙げられている六十四芸（kalā）の第五、viśeṣakacchedya にあたる。viśeṣaka（額飾）と patraccheda に関しては、松山俊太郎氏の詳細な研究がある（『化粧文化』

ポーラ文化研究所、一〇、八—一三頁、一九八四・五）。

50 詩句七五—八〇はチンターマニの召使たちが主人を称讃する言葉である。

51 Nāṭyaśāstra 天界において梵天が創唱した演劇法をバラタ仙が地上に伝えたという。

52 Nārada 仙は弦楽器ヴィーナーの発明者といわれ、音楽の巨匠といわれている。

53 vasunandacitradaṇḍakamuktāyudhakhaṅgadhenubandheṣu. ここに列挙されているのは、武芸の術語で vasu, nanda, citra はトリパーティーの註によれば cāribheda（格闘技、レスリング）の技法、daṇḍaka は yuddha vyūhaviśeṣaḥ（戦闘における戦陣の一種）、muktāyudha は cakrādini（円盤等の飛道具）、khaṅga（刀剣）とdhenu（短刀）は amuktāyudha（投擲などしない武器）。シャーストリは daṇḍaka もレスリングの技法と解している。マイヤーは意味不明として前半を翻訳していない。

54 Bhārgavatāṁ Paraśurāmo'pi パラシュラーマはヴィシュヌ神の権化の一人で比類のない射手であり武芸の達人といわれる。

55 manmatha-tantra 愛神の経典、性愛文献、kāma-śāstra と同じ。ヴァーツヤーヤナ（Vātsyāyana）は『カーマ・スートラ』（愛経）の作者として有名（四世紀頃）。Dattakācārya. はヴァーツヤーヤナが先輩として挙げている色道の達人。Rājaputra も愛経文献の作者。

56 異本K・Dはともにこの詩句を欠く。Karṇa. 原文 Rādhāsuta.（ラーダーの子）、『マハーバーラタ』に活躍するパーンダヴァ五王子の母クンティー夫人は、パーンドゥ王と結婚する前に太陽神スーリヤとの間に一子を儲けたが、非難をおそれ、その子を箱にいれてヤムナー河に流した。河畔に住んでいた騎士アーディラタの妻ラーダーは子供がなかったので、その子を育てた。これが後のカルナである。Rādhāsuta は養母ラー

ダーの子という意味である。カルナは生まれながらにして甲冑を身に着け、耳環をしていたので耳(カルナ)とよばれ、これらを着けている限り不死身といわれた。インドラはそれを知っていたので、自分の子アルジュナをカルナに勝たせるため、自らバラモンの姿になって、カルナに甲冑と耳飾りをくれと請うた。寛容なカルナは請われるままにそれらを与え、代りにインドラは武器を与えた。カルナはパーンダヴァの敵カウラヴァ軍につき、しばしばアルジュナと闘ったが、ついにアルジュナに殺された。

57 katamat katamallagnaṁ prasthānaṁ 意味不明。マイヤーもこの詩句と次の詩句はテクスト不良のため訳せないといって除いている。

58 Kohala と Bharata は演劇法 Nāṭya-śāstra の達人で、コーハラはバラタの百人の子の一人で、特に舞踊・演劇・楽器に通じ、音楽に関する Kohala-rahasya の作者とされている。

59 Dhenuka 作曲家。

60 bhāva は観客の心に潜在する基本的感情、rasa は演技によってよびさまされたバーヴァが喚起する情調。ラサは通常、śṛṅgāra (恋情)、raudra (憤怒)、vīra (勇武)、bībhatsa (憎悪)、hāsya (滑稽)、karuṇa (悲愴)、adbhuta (奇異)、bhayānaka (驚愕) の八種で、後には śānta (静寂) も加えられた。

61 Rambhā は有名な天界の踊り子 (アプサラス)。

62 kimutetaramartyanartakīlokam. 異本K・D とも martya を欠く。

63 vakrokti 修辞学において、二重の意味をもつ言葉。地口。

64 詩句九一—一二六は、使い女 dūtī の語る言葉である。

65 友達として黙っていられない、という意味。

66 異本D dūravibhāvitakārśyā 遠くから彼女の痩せたのが認められ。

67 同 gāyati hṛṣyati muhyati ca stambhanī bhavati 歌ったり、喜んだり、また惑乱したり麻痺状態に陥る。

68 苦悩のため化粧をしない女は汚れたといわれる。

69 孔雀は蛇の敵といわれる。

70 ここに挙げられたものは、すべて清涼感を与えるものである。kadalī 芭蕉の白い幹は婦人の腿に譬えられ暑熱を医すといわれる (Knmārasaṁbhava I, 36)。śaśadharakānta 月光石は candrakānta ともいわれ、月光に照らされると冷たく潤うといわれる。異本D kadalī campakacandana paṅkeruha nīlaghanasār-ām. 異本 nīla (サファイア) よりは原文 nīra (水) の方が適当であろう。

71 異本D、āpadyabaloddhṛtaye (不幸なか弱い女を)。

72 atanu 手足のないもの。カーマはシヴァの前額の目から出た火によって焼かれたので肢体のないものといわれる。anaṅga と同じ。

73 girisutā 山の娘、シヴァの神妃パールヴァティーはヒマーラヤ山神の娘である。

74 bhogīndravibhūṣaṇa シヴァは首に蛇を捲きつけている。神妃パールヴァティーと半身を分けあっている。

75 Saiṁhikeya. Siṁhikā の子、阿修羅 Rāhu のこと。日蝕、月蝕は太陽と月に恨みをもつラーフによって起こるといわれる。

76 マーラティーの変らぬ美しさを称えている。

77 bandhujīva 学名 Pentapetes phoenicea. 美しい赤い花を真昼に咲かせ翌朝日の出とともに凋む。

78 balipariġṛhītamadhyah. bali, bali=vali, vali（皺、襞）で trivali のこと。若い女の臍の上部にある三条の襞は美女の特徴とされている。拙稿「トリ・ヴァリーについて」（『酔花集』春秋社、昭四九、一八二―一八七頁）参照。

79 サーンクヤ哲学派の開祖といわれる大聖者。

80 芭蕉の一種、学名 Musa sapientum. 幹の白さは女の腿に譬えられる。

81 註26参照。

82 śarajanman「芦の中に生まれた」神の意。śaravanodbhava（シャラ・ヴァナに生まれたもの）ともいわれる。軍神 Kārttikeya のことで、スカンダあるいはスブラフマニヤともよばれる。シヴァ神と神妃パールヴァティー（またはウマー）の子とせられる。シヴァ神がウマーと性交を絶ったため、精液が大地に溢れたので、火神アグニがその中に入って焼いたが、溢れた精液はウダヤナ山のシャラ・ヴァナ（シャラという一種の芦の森）となり、カールッティケーヤはそこで生まれたという神話に基づく。仏教の韋駄天。カールッティケーヤは阿修羅ターラカを退治してから母のパールヴァティーに寵愛され、図にのって乱行を恣にしたので、女神たちから不平が続出して母によびつけられ、叱責されて以来梵行（禁欲）に服したという。

83 愛神カーマは五本の花の矢をもつ。

84 神妃パールヴァティーはシヴァ神の右半身を分っているから、彼女がその地位を占めたら三界は神妃の怒りによって破滅するという意。

85 kākatālīya 鴉が棗椰子の樹にとまった瞬間に棗の実が落ちるというような全くの偶然。

86 インドラは千眼 sahasrākṣa, sahasranetra をもつといわれる。

87 いずれも愛経文献の作者。このうち Vātsyāyana, Dattaka, Rājaputra の名は詩句七七に挙げられているが、Manodaya と Vitaputra（又は Viṭavṛtta）については作品も伝わらず明らかでない。

88 この詩句は次の句と連結する。ここにあげられている婦人のたしなみ（カラー）の中には『カーマ・スートラ』の六十四芸に含まれているものもある。バラタは演劇書の作者、ヴィシャーキラとダンティラは音楽・演劇に関する書の作者、Vṛkṣāyurveda（樹木の医書）は六十四芸の第四十一にもあり、植物の栽培法、citra は絵画、sūtra はトリパーティーの註によれば裁縫（sivyam）又は糸あるいは紐の遊戯（sūtrakrīḍā 六十四芸の第二十六）。patraccheda（葉の裁断法）については註49参照。bhrama karman は明かでない。トリパーティーの註は aindrajālika（手品、幻術、六十四芸の第二〇）または yānavidhi（車の駆法？）としているが、この場合適当と思われない。マイヤーは疑問を残しながら Drehwerk と訳しているが bhrama には轆轤の意味があるから、陶芸かと思われる。pusta は粘土または木材を用いる細工、彫刻、sūdaśāstra は料理法。

89 Mālatikā 指小辞（Diminutive）を用いている。「マーラティーちゃん」。詩句一三七まで続く。

90 Kamalavanī カマラは昼間咲く蓮華、蓮華の池を女に譬えている。

91 シヴァ神の前額には半月が飾られている。

92 khadira 学名 Acasia catechu, 檜木。堅い木。mālatī 学名 Jasminum grandiflorum. 夕方白い花を咲かすジャスミンの一種。蔓草のジャスミンの名をとったマーラティーがカディラ樹のようなつれないあなたにすがって詰られるのは、という意。カディラの形容詞は二重の意味をもっている。

93 無情なチンターマニを鴉に、か弱いマーラティーを蓮華に喩えている。
94 Kaṁsāsuravairin 阿修羅カンサの敵、クリシュナのこと。クリシュナは牛飼いとして青春をヴリンダーヴァナの森で過ごし、花の華鬘で頭を飾った。
95 Kusumākaravallabha 春の愛人、愛神カーマのこと。蔓草をつけたカーマの花の矢は恋人の心を射る。
96 Halin 犂をもつ者、クリシュナの兄バララーマのこと。彼は Madhu-priya 又は Priya-madhu ともいわれ、酒を好むといわれる。詩句一三五と一三六は連結、使いの女の言葉はここで終わる。
97 kuṭṭamitam ācaranti 男の情熱に対し、内心は喜びながら怒って拒絶するふりをする (Sāhityadarpaṇa. 142; Daśarūpa II, 49, 66)。
98 huṁkṛti フンという声を立てる。
99 sitkṛti シートという声をあげる。これらのポルノ的記述はヴァーツヤーヤナの『カーマ・スートラ』を始め愛経文献に依拠している。
100 upayuktavadanavāsā ターンブーラ等で口の薫りをよくする。異本 -radanavāsā 歯の薫り。
101 vaṁśadvayabhūṣaṇa 父方の家系と母方の家系の飾り。
102 Narakavairiṇa ナラカは兇暴なアスラでヴィシュヌの権化クリシュナに殺された。従って「ナラカの敵」はクリシュナのことであるが、ここではラクシュミーの夫ヴィシュヌを指す。
103 na mānti gātreṣu 肢体の中におさまらなくなる。
104 nātha praṇaya 主人（又は夫）への愛情。あるいは nātha を呼格にとって、「お客さん（又は旦那さん）、たとい愛情が薄くても……」。

105 vaṭa バニヤン樹、学名 Ficus indica 又は Ficus Bengalensia, nyagrodha ともいう。
106 tilaka 前額に描く標識。松山俊太郎「古代インド人のよそおい」二―五（『化粧文化』ポーラ文化研究所、四―七頁、一九八一・二）に「額飾」と訳され、詳細な研究がある。
107 sarasvatikulagṛha 智恵、学問の女神サラスヴァティー（弁才天）の高貴な家柄の家。
108 Purandara インドラ神の別名。Purandarasthāna は Amarāvatī と呼ばれる。
109 kalikāla. 古代インドでは宇宙の周期を Kṛta, Treta, Dvāpara, Kali という四つの yuga（年紀）に分ける。カリ・ユガは末法の世で現代はこれに属する。
110 bhogin「逸楽にふける」意と「とぐろをまくもの、蛇」の意とあり、二つの意味をかけて、逸楽に富むパータリプトラを蛇の住むという Pātālatala 地獄の底に比している。
111 asura-vivara 地下にある悪魔アスラの洞穴（世界）は美女に富むといわれている。
112 天界の楽師ガンダルヴァはヒマーラヤ山の北ヘーマクータ（黄金の峯）に住むといわれる。
113 Harinagara ハリの町。ハリはヴィシュヌ・クリシュナの別名として汎く知られているが、ここではインドラの別名である。インドラは śatakratu（百の供犠〔又は力〕をもつもの）といわれる。
114 vadanakośebhyaḥ 顔を形成する諸宝から。
115 vihitaye 遂行のためになる。異本 vihataye 妨げに役立つ、を採る。黒衣を脱して愛人との逢引きに急ぐ女たちの肉体の生来の美しさが輝いて闇を排するので愛人との結合の妨げとなる。
116 baliśobhā. バリには「供物」と「皺」の意味がある。tribali は臍の上部に横に列ぶ三本の皺で、美女の特徴とされている。前掲拙稿「トリ・ヴァリーについて」（『酔花集』一八二頁）参照。

117 この詩句と次の詩句とは連結しており、括孤内の句は註釈に基づいて補足したものである。

118 sūcī は舞踊の術語としてバラタの演劇論に挙げられている肢体の表現（āṅgikābhinaya）の一種で、このポーズをとると、足に針で刺されたような痛みを覚えるという。

119 narmadā「悦楽を与える」という意味の名をもつ中部インドのナルマダー河は流れが速いことで知られている。緩と速との二重の意味をもたせている。パータリプトラの町の描写はここで終わる（詩句一七七—一九二）。

120 puruhūta「多くの人々によって祀られる」神。インドラ神の別名。

121 gururiva vidyāvasatiḥ 知識の住処なるグルの如く。グルは神々の師（グル）Bṛhaspati のこと。

122 dvijanma 再生族、古代のカースト（四姓）制度において。上流三階級は、upanayana（入門式）の施行によって再生すると考えられたので、再生族とよばれた。しかし dvija はバラモン階級の意味にも用いられる。

123 Dharmātmajasya satyaṁ: Dharmātmaja, Dharmaputra は Yudhiṣṭhira の別名。大叙事詩『マハーバーラタ』に活躍するパーンダヴァ族の長子ユディシュティラは、正義の神「ダルマの子」といわれ、常に真実を語るといわれていたが、大戦争の際に、敵の老将ドローナに対し、アシュヴァッターマンという象を殺して、同名のドローナの子が死んだと嘘をついた。

124 Tripuraripor vijitakusumacāpatvam. Tripuraripu（三城の敵）はシヴァ神の別名。シヴァは阿修羅の金・銀・鉄の三つの城を破ったのでこの名がある。kusumacāpa（花の矢をもつ）は愛神カーマの別名。カーマは瞑想しているシヴァを誘惑しようとしてシヴァの怒りに触れ、その前額にある第三の目から発せられた火によって焼かれた。愛欲を斥けたそのシヴァが神妃パールヴァティーと半身を分っている。

125 Harināb hipaṅkajabhuvo niyatendriyatāṁ（ハリ〔ヴィシュヌ〕の臍から生じた蓮華から生まれた）ブラフマー神は五感を制御しているといわれながら、神妃サラスヴァティーと共に蓮華の上に坐している。

126 異本K・D（詩句一九三）ともに、この詩句を含んでいるが、何故かマイヤーの訳はこれを脱落させている。トリパーティーの註によれば、プランダラというこのバラモンは、ユディシュティラやシヴァやブラフマーに比敵する徳を備えていたので、この三者の虚名を嘲笑したのだ、という意である。

127 nyakṛtavṛṣa iti śarve シャルヴァ（シヴァ天）は牡牛ナンディンを蔑視して乗輿としている。vṛṣa には牡牛と正義・徳行の両義があり、両方の意味にかけている。

128 yācaka iti kaustubhābharaṇe カウストゥバという胸飾りをつけた（ヴィシュヌ天）を乞食だとした。ヴィシュヌは第五の権化（アヴァターラ）として矮人となり、阿修羅バリに三歩の土地を与えてくれと乞い、許しを得ると元の姿に戻って、三歩で天・空・地の三界を確保した。註20参照。

129 「ガンガーの降下」の伝説において、サガラ王の王子たちは馬を探して地下の世界に行き、カピラ仙の傍に馬がいるのを見て奪い返そうとしたので、カピラ仙は怒って眼光の火を放って王子たちを灰にしたが、後にガンガーの水に浄められて天界に昇った。プランダラというバラモンは、このように軽蔑したり、物乞いをしたり、苦しみを与えたりはしなかった、という意。

130 相反するものを対比させる修辞法 virodhopamā.

131 以下の三詩句（一九八—二〇〇）は連結してバラモンの家柄について述べている。

132 khaḍga 剱と犀角の両義がある。祖霊祭の時には犀角の器を用いるので、両方の意味に用いている。

133 reṇājina バラモンは入門式（ウパナヤナ）の際に、黒い羚羊の皮を身に著ける。

肯定文であるが反語の否定的意味をもたせている。

134 pakṣadvayasya 父方・母方の両家系を理解した kalā（カラー）。カラーはまた月面の十六分の一を意味し、一ヶ月を白分と黒分の両面に分つ区切りとなるので、この二つの意味をもたせている。他の写本 pakṣadvayaśca によれば、この形容は息子にかかる。

Kaca はブリハスパティの長子で、美少年で神々に愛された。

以下の九詩句（二〇一―二〇九）は息子スンダラセーナのことを述べている。

135 ratiratayeあるいは「カーマ神の妻 Rati の悦びのために」、とも解される。

136 ラクシュミー（吉祥天）はハリ（ヴィシュヌ天）の愛妻。

137 異本D kathamārdratā dinakṛtaḥ（もし彼が太陽なら、どうして優しさがあるのだろうか）。

138 kiṁ kuruṣe 異本K・D kiṁ kurmo 私たちはどうしたらよいのか。

139 他の写本 bhojanādi に従えば、「食物などを求められた」。

140 kulatha 学名 Dolichos uniflorus 秦豆、卑豆、大豆。aṇu 註に vrīhiviśeṣa とあり、穀物（米）の一種。

141 giti 韻律の名。

142 Kusumapura 華氏城。pāṭala 樹の花で有名なのでパータリプトラとよばれた。現在のパトナーの付近。この都の名称とその由来に関しては『大唐西域記』（巻八）と『カターサリットサーガラ』（一・三）に異なる説が伝えられている。水谷真成訳『大唐西域記』（平凡社「中国古典文学大系」22、二四二―三頁）、田中於菟彌訳「華氏城縁起」（『インド説話集』ピタカ、一九七八、一七〇頁以下）参照。

143 註49参照。

144 Arbuda 山は中部インドの西端アラワーリー丘陵の南端に位置し、深い谷と岩山に囲まれた山。現在はアーブー山（Mt. Abu）とよばれ、ジャイナ教の聖地となっているが、グプタ王朝の末期から十一世紀初頃まではヒンドゥー教、特にシヴァ派の聖地であった。ヒマーラヤ山の息子といわれ、生物・植物に富んでいたことは以下、詩句二四〇―二五三に詳しく描写されている。

145 sutaḥ sānumataḥ アルブダ山はヒマーラヤ山の息子と古くから伝えられている。『マハーバーラタ』三・八二・五五。

146 アルブダ山の美しさを、二重の意味をもたせてシヴァの威容に譬えている。śiśirakara 月のことで、シヴァは前額に半月の頭飾りをつけている。kaṭaka 谷間・傾斜の意と腕環の意がある。pavanabhojana 風を食うもの、蛇のこと。guha 洞穴の意と ṣaḍānana（六面をもつ）シヴァの子スカンダ神のことを指す。Vidyādhara ヒマーラヤ山に住むというシヴァに仕える半神の一族。

147 七聖仙（マリーチ、ラトリ、プラハ、プラスティヤ、クラトゥ、アンギラス、ヴァシシュタ）の偉大さと大熊星座の七星の高さとを並べて、この山が崇高で近づき難いことを述べている。七聖仙と七星とはしばしば同一視されている。

148 太陽神スーリヤは七頭の馬によって牽かれた車に乗って天空を走る。

149 月は oṣadhīśa（薬草の主）とよばれる。

150 āśākarin 空の四方あるいは八方に立って大地を支える方角の象。āśāgaja, diggaja ともいう。

151 山岳は大地を支えるといわれるので、方角の象と同じ仕事をしている、という意。

152 聖者の名と鳥の名と二重の意味をもたせている。

153 gandhavahabhojana 香気を漂わす風を喰うもの。蛇は風を喰うものといわれるので、両方の意味にかけている。

154 plavaga 跳びはねるもの、猿の意がある。

155 sadkarmaṇi 婆羅門に許される六種の職能。即ちヴェーダの学習と伝授、自分および他人のための供犠、布施を行い布施を受けること。

156 hariṇavati 月の中に羚羊がいるという。saptapattra 七葉をもつ樹（学名 Alstonia scholaris）と七頭の馬が牽く（太陽の）車との意がある。詩句一五六―一六三は山麓の美しさを描写している。

157 palāśini 葉 palāśa をもつ、あるいはパラーシャ樹の生えていると、pala-āśini（肉を喰う女）の二重の意がある。

158 愛人を待つ女の姿に譬えて山に生えている植物を二重の意味で描写している。madana は dhattūra ともよばれ毒をもつ植物（朝鮮朝顔）。

159 tilaka 註106参照。

160 arjunabāṇavrātaiḥ アルジュナは『マハーバーラタ』において活躍するパーンドゥ族の勇士で弓の名手でアルジュナ樹にかけ、bāṇa 弓の意をバーナ樹にかけている。クル族はパーンドゥ族の敵。

161 ṛkṣa 星、月宿と熊又は猿の意がある。

162 miṣṭaka 意味不明であるが、シャーストリはダーナヴァの軍隊の指揮者とする（op. cit., p. 83）。トリパー

ティーの註によれば、miṣṭa（風味のある）ことから āmra マンゴー樹と解している。異本K mṛṣṭaka、異本Dは疑問符を付し、マイヤーは訳していない。

163 rohiṇi 星宿と薬草の両義にかけている。

164 kumuda 月の昇る時に咲く白い睡蓮で、月の友といわれる。詩句二五八―二六〇は美しい女の形容である。

165 ハリはここではヴィシュヌ神のことで、シュリーは神妃ラクシュミーのことである。

166 女の美しさを描きつつ、詩句二六三で述べた相反するものの合体を二重の意味で表わしている。黒い雨雲と白く清らかな月光の対比。

167 前句と同じく、相容れぬ仏教とバラモン教の教義を挙げて両者の共存を女の挙止によって示している。sugatāvasthiti 仏教徒の安住、caraṇayugalaracanā ヴェーダの二学派 śākhā の合成、リグ・ヴェーダとサーマ・ヴェーダ、リグ・ヴェーダとヤジュル・ヴェーダの合成により新しい学派が生まれる。vidhvastaśarira シヴァ天によって肢体を焼失したもの、カーマ神のこと。

168 愛神カーマは漁夫にたとえられる。その愛神の網にかかった彼女は、瞬きをしないといわれる魚の雌を真似しているようだ。

169 男の方が惚れてくるものだから、女が惚れてはいけない。

170 surabhimāsa 快い春の月、チャイトラ月（三月―四月）。

171 蛇毒による症状については、演劇書『バラタのナーティヤ・シャーストラ』（七・八七―八八）に八種が挙げられている。一、憔悴 二、震え 三、高熱 四、吃逆（しゃっくり） 五、口から泡 六、肩の挫折 七、麻痺 八、死。

172 異本K・D yasminneva muhūrte yadavadhi dṛṣṭo 'si me sakhyā (私の友達によってあなたが見られた
その瞬間から)。
173 風は火勢を煽るので元来火の友であるが、彼女の愛情の火は南の涼風にもかきたてられて苦しむ。
174 ハーララターの声が美しいので、以前は郭公も恥入って黙していたが、今やハーララターが沈黙しているの
で勝利を喜んでいる。pika はインド郭公 kokila と同じ。
175 蜜蜂は花の恋人といわれる。
176 niṣevaṇaṁ gurukalatrasya「師匠の妻との悦楽の結果の転落」という二重の意味にかけている。
177 Prayāga 現在の Allahābād (アラハーバード)。ガンジス河の清流とジャムナー河の濁流とが合流する地点
で、インド第一の巡礼地 (tīrtharāja) といわれる。
178 pañcatapas これらの五つは恋に悩む人を苦しめる火である。五火とは苦行者が四方に火を焚き、さらに太
陽の炎熱に身をさらすことをいう (『マヌ法典』六・二三)。
179 恋愛による十の段階 (smaradaśā) は、目の喜び、物思い、思慕、不眠、憔悴、世間への無関心、羞恥心の放
棄、狂気、気絶、死である。上村勝彦訳『屍鬼二十五話』(東洋文庫三二三)、一四七頁参照。Haas, George
C. O, The Daśarūpa, New York, 1965, pp. 132-3 参照。
180 vāra-strī 順番 (に買われる) 女、遊女。
181 Pradyumna 愛神カーマの生まれ替りで、美しく魅力があるといわれる。
182 rāga 赤色と情熱の二義がある。
183 gauravam. guru (重い) の抽象名詞。「重さ」のほか、師に対する「尊敬」の意がある。

184 madanāsaṅga. madanā(酒)-āsaṅga (染著) と madana(愛情)-āsaṅga とを懸けている。
185 jaghanacapalā 腰を振って歩く淫女の意であるが、韻律の名でもある。anāryā は高貴でないという意味で
あるが、アーリヤー調でないとの意味をもち、二つの韻律を対比させている。
186 na kulasamutpannā api bhujaṅgadaśanakṛtavedanābhijñāḥ. bhujaṅga には(娼婦の)情人の意と蛇の意
とがあり、nakula (大黄鼠・マングース) は蛇の仇敵である。読み方によって二つの意味をもたせている。
異本D bhujaṅgadarśanasuvedanābhijñāḥ 情人 (蛇) を見ただけで、よく知ることをわきまえている。
sneha には愛情と油の両義がある。
187 vṛṣa 徳行の男、強壮な男と牡牛の二義がある。ヴァーツヤーヤナの『カーマ・スートラ』によれば、男根
の大きさにより男をシャシャ (兎)、ヴリシャ (牡牛)、アシュヴァ (馬) の三種に分ける。
188 kṛṣṇa (不吉な) 黒色の意とヴィシュヌ・クリシュナ神の二つの意にとる。ヴィシュヌは第四の権化でナラ
シンハ (人獅子) の姿となって、不死身の悪魔ヒラニヤカシプを殺す。
hiraṇyakaśipu 黄金の衣服又は褥の意であるが、註によりこのように訳した。
189 kimpuruṣa メール山の山地や森林に棲む矮人の一種。kiṁnara ともよばれる。
190 カウティリヤ『実利論』九・七参照。
191 一語のもつ二つの意味を比喩に用いる修辞法 śleṣopamā。cf. Kāvyādarśa II, 28.
192 ḍākinī カーリー女神に仕える鬼女。人肉を喰うといわれ、通力により人の死を六ケ月前に知り、その心臓
を食うといわれる。荼枳尼。
193 puruṣa (純粋精神) と prakṛti (根本物質) はサーンクヤ哲学の二元論を成す哲学用語である。『インド思

想史』東京大学出版会一九八二、一〇九頁参照。
194 kṣudrā 蜂と遊女の二義がある。
vikaraṇa には変化（のある手段）、変形の意と「感官を離れた」の意がある。
195 samudgī(ga)kā 外側を美しく飾り、中は空洞で堅く丸い小筥で機械の操作によって（yantraprayogeṇa）鳴る玩具の一種らしい。手動のオルゴールのようなものであろう。辞書には見当らない。
196 kallolākalpa 波の美服（ākalpa）。kallola（波）には、喜びとか幸福の意もあり、-akalpa（不適当）と読めば「喜びに適しない」からだとも解される。
197 rājaputra 王子の意であるが、ここでは武士とか身分のある人位の意味であろう。
198 samutsukā caṇḍī 切望する女、caṇḍī は親しみをこめた女のこと。
199 dvipādikā 韻律の名。二つのパダから成る韻律。パダは韻律の単位で四半偈。
200 mātrā 短母音を発音するのに要する時間の単位（mora）。
201 カウティリヤ『実利論』（二・二七・二〇、上村訳二〇一頁）に、これに類する二倍の科料を払う罰則が見られる。
202 各異本とも第二行に差違があって意味がよく判らぬが、異本Dによって訳した。以下三六七句までは女をめぐっての対話で、遊び人（viṭa）や遊女の名が続出する。
203 cināmbarayugalakā 支那の（絹の）衣服一対。
204 rākṣasī 羅刹女。
205 sumanaḥ kuṅkumavāsā「花とクンクマの衣服」とも解されるが、クンクマは蕃紅花、サフラン（学名 Crocus sativus）の花であるからこのように訳した。
206 dayitikā. トリパーティーは遊女の名としている。
207 dāsyā vinā mūlyam. dāsī は召使女であるが註により遊女 veśyā の意に解した。三三九句も同じ。
208 意訳「彼奴は昨夜、一晩中女の脚を擦っていたが、今朝になったら金を残らず搾り取られてしまった」。
209 Kubja 傴僂。個有名詞と解したが、あるいは背の低い男を揶揄した呼称かもしれない。
210 matta は「酔いどれ」の意味だが、註に従い（情人の）名前とし、女に対する母の言葉として訳した。次の句も同じ。
211 pānakrīḍa きつね拳や野球拳などのようなもので、酒を飲む遊戯であろう。
212 異本K kanakanādi は kanakatāḍi の誤り。この詩句は遊客が遊女の母に対していう言葉。
213 註によれば、これは遊女が母に向かって、客に聞こえるようにいって、客が遊女をなだめるように仕向ける言葉だという。
214 遊女の母が孫娘にいう言葉。毬遊びについては、拙稿「毬戯術について」（前掲『酔花集』一八八—一九六頁）参照。
215 遊客に対する遣手女の言葉。
216 三六五—六の二句は、遊女が母に告げ口をする言葉。
217 bhagnānyaṇarāvasaro 異本D bhagnānyatarāsaṅgo「他人が入ろうとする執着を阻んで」。
paṭarāja は「布の王」を意味するから、これを個有名詞と解さなければ、「呉服屋のボス」即ち金持ちの商人を意味し、これに対し「裸身者」は貧乏人を意味する。富者が貧者を疎外する意味を暗示している。

218 parijanā は召使い女、従者の意であるが、三七〇句に sakhī 女友達とあるからこのように訳した。
219 異本K nigaraṇalolaṁ cumbanamavayavaniṣpeṣanaspṛho mardaḥ 及び他の写本 -niṣpeṣasaspṛho によって訳した。原文 vigalallolaṁ……niḥspṛhoは不適当と思われる。
220 liṅgamanaṅgacchāyā「愛神アナンガ（カーマ）の影」とは神妃ラティーのことで性的悦楽を意味する。異本D jivitasattānumānena, 原文 -anumānasya.
221 viparītā（反対の、逆の行動をする）。トリパーティーの註に viparītā puruṣayitā とあり、『アナンガランガ』（一〇・三一）「夫が疲れたのを見て、妻がなお不満の時、情熱に燃えて、夫を喜ばすために男の役割をする」を引用している。
222 以下詩句四〇三までは遊女たちの内緒な打明け話。
223 恋人が死んだといいながら、その男のふりをしてきた、というコミカルな話で、滑稽な話として詞華集にも引用されている。
224 rājasuta「王の子」は rājaputra と同じく王族の上流のものの意（註197参照）。
225 asmābhiḥ（われわれによって）。トリパーティーの註に gṛhasthitābhiḥ sarvābhiḥ とあり、われわれ家庭生活をしているすべての庶民階級に学んで（anubhūta）の意か。
226 bhaṇḍaviḍambana 註に bhaṇḍa は 'bhāṁḍa'（商品）という嘲弄した言葉だという。この句の後半は意味がよく解らぬが、異本D によって意訳してみた。
227 nyāya 法規、規則、異本D anyāya 非法にも、異本K evaṁ vañcakadāturdviguṇārthaprārthane kṛto 'anyāyaḥ。カウティリヤ『実利論』巻二、十二・十四参照。

228 『カーマ・スートラ』（二・五・一二）には bindusiddhi（点のしるし）とあるだけで「胡麻粒の大きさ」は Jayamaṅgalā の註に見られ、下唇に歯で嚙痕をつける場合である。次の句参照。原文「爪によって」とあるのは、作者が間違ったのではなかろうか。
229 keraī 南インドのケーララ出身の女の呼び名であろうか。南方生まれの人は爪や歯で傷つけるのを好む（nakhadantatoṣiṇya）といわれる。『カーマ・スートラ』二・四・一〇参照。
230 爪と歯による傷痕の名称。『カーマ・スートラ』二・四・五参照。
231 ketakī は keralī の誤りであろう。
232 原文 tonitatulāmbarā 不明。異本D tolita（均しき）？ 異本K tānitanānāmbarā.
233 ハヌマーンは『ラーマーヤナ』において活躍する猿の将軍。風神の子で快足であり、しばしば情報を迅速に伝えた。
234 svasti 吉祥を祈る手紙の冒頭の常用語。「拝啓」にあたる。
235 kuśavipāṭana クシャ草は祭式の際に使用する神聖な草で、葉の先端が鋭く尖っているので手で摘んで用いる。その時の傷の疼痛。
236 tretānala 祭式における三種の神聖な火、gārhapatyā(-agni) 家長の（西方の）火、dakṣiṇā(-agni) 南方の火、āhavaniya(-agni) 供物の（東方の）火。『マヌ法典』二・二三一参照。
237 vaṣaṭ 祭官が供物を火に投ずる際に唱える感歎詞。
238 ṣaṭkarman 六種の行為に従事する者、婆羅門階級。六種とはヴェーダの学習と教授、自分及び他のための供犠、自ら布施をなし、他から布施を受けること。『マヌ法典』一〇・七五参照。

異本D satkarmavibhūṣaṇa（正しき行為をなすものの飾り）

239 sādhāraṇavanitā 男が共通に求愛する女。遊女のこと。

240 入門式（ウパナヤナ）の際、バラモンは黒い羚羊の皮、クシャトリヤは鹿皮、ヴァイシャは山羊の皮を著ける。註133参照。

241 samidha 焼灌（ホーマ）の火中に投ずる plakṣa 等の聖木。

242 añjana 眼膏、眼瞼を細い棒につけ黒く塗るアイシャドー。

243 遊女と交わることは本人にとって幸福だが、世間の日常生活の慣習に反するから悪徳である。子を持つのは母の幸せだが、その子が悪人ならば母は徳を失うから不妊の方が賞讃される。

244 異本D niyativaśikṛtamanaso「運命に従う心」。

245 死後の天界における幸福と、その幸福を齎す現世の徳行の達成。

246 原文は aviruddhasaṁbhāṣā（会話をやめない）であるが、異本K・D -saṁparkā、別本 -saṁyogā により、「結合をやめない」の意味にとった。

247 異本D（Kāvya Malā 本）の詩句四四二は不完全で意味不明、四四二bは異本K四五三b、トリパーティー本四五四bに当り、この間十一句が欠落して意味上断絶があり、D四四三はK四五四T四五五に当る。Meyerの訳はD本に拠っているから四四二以下の訳を欠き、四四三には、T四五五に当る訳が突然現われている。マイヤー訳六六頁註2参照。

248 vaṭa インドいちじく、Ficus Bengalensis. バニヤン樹、榕樹 nyagrodha ともいう（註105、249参照）。

249 Kṣiravṛkṣa 乳状の汁を出す樹木。四種あるいは五種の樹木（Nyagrodha, Udumbara, Aśvattha, Madhū-

ka）が挙げられている。

250 カーリダーサの戯曲『シャクンタラー』第四幕において、シャクンタラーとともに旅立つカンヴァ仙の弟子シャールンガラヴァが師匠に向かっていう言葉で、水辺のクシーラ・ヴリクシャの下で別れを告げる。

251 na cāṭuguṇaḥ 註の priyavacanāni による。異本K、na ca dviguṇaḥ.

252 viṣaya 国、領土、地方の意と、性的快楽、五感の対象の両義がある。

pathyate pathyā トリパーティーの註によれば「道」pathyā とは言葉の力により幸せを齎す表現の意という。マイヤーの訳(四五三、四五四)は、ハーララターの言葉としているが、トリパーティーの註により、彼女の言葉は四六四（マイヤー訳四五二）で終り、四六五はこの挿話の語り手の言葉で、四六六はスンダラセーナの言葉として訳した。

253 異本D tadvacanāstrahito による。原文 tadvacanāsmato.

254 hāva 演劇書『ダシャルーパ』は、ヒロインの天性の美点として二十種を挙げ (Daśarūpa, II, 48, 49)、『サーヒティヤ・ダルパナ』は二十八種を挙げている。以下の三句はそれらの中の術語をあげて彼女から美点の失われたことを歎いている。ハーヴァは目や眉を動かす愛情の媚態（DR. II, 51）である。

255 līlā 恋人の服装・態度などを真似する戯れ(DR. II, 60)。

256 vilāsa 恋人に会った時に、突然に変る外見や行動の喜び(DR. II, 61)。

257 vicchitti 愛らしさを増すための軽い装身(DR. II, 62)。

258 vibhrama 慌てて化粧や装身具を間違ったところにつける狼狽(DR. II, 63)。

259 kilakiñcita 恋人に会った時の怒り、嗚咽、喜悦、恐怖などのヒステリックな興奮(DR. II, 64)。

260 moṭṭāyitam 恋人の言葉などを聞いて彼の気持に吸い込まれる愛の表現(DR. II, 65)。

261 kuṭṭamita 恋人が髪や唇に触れると、女は心中に悦びながら怒ったふりをする(DR. II, 66)。

262 bibboka 高慢のため、愛する人に対しても無関心を装う(DR. II, 67)。

263 lalita しなだれかかる優雅な恣態(DR. II, 68)。

264 vihṛta 機会があっても、気後れのため口も利けない恥じらい(DR. II, 69)。

265 Mahāsena はシヴァ神の子(Tripurāntakanandana)で、Skanda又はKārttikeya（仏教の韋駄天）の名で知られ、シヴァ神軍の長として軍神と仰がれるが、女人を嫌いクマーラ（青年）またはSanatkumāra（永遠の青年）とよばれる。註82参照。

266 Lokapāla（世界の守護者）は通常八神（あるいは四神）を挙げるが、トリパーティーの註は十神（インドラ、アグニ、ヤマ、ニルリティ、ヴァルナ、ヴァーユ、クベーラ、イーシャーナ、ブラフマー、シェーシャ）の名を挙げている。マイヤーの註はこの守護者を東方の守護神インドラとしているが、トリパーティーの註の如く、死者の住む世界の主として南方の守護神ヤマ（閻摩）とする方が適当であろう。

267 anumaraṇa 夫の死骸を焼く火中に妻が身を投ずる習慣で、satī（貞女）の意味から「寡婦焚死」の意味として用いられ、女の義務 stridhama とされた。殉死、後追い死の意。

268 daṇḍagrahaṇa 携杖者。苦行者、巡礼者、遊行者（sannyāsin）ともよばれ、法典の規定する四住期（āśrama, 学生期、家住期、林住期、遊行期）の最後の段階をいう。

269 註268参照。

270 遣手女ヴィカラーラーが、若い遊女マーラティーに、お人好しの客をいかにして騙すかの例として語る「スンダラセーナとハーララターの物語」は以上で終る。

ヴィカラーラーは、このような話をして遊女にも純愛があると客を信用させて金を捲き上げ、そして金のなくなった客には愛想づかしをし、別の男を捉える様々の方法を教えるのである。要するにここまでの前半は専ら遊女が客を誘惑し獲得する方法を教え、以下の後半ではいかにして客を騙し、次の客に近づき金を儲けるかを教えるのである。

271 asameṣu 奇数（五本）の矢を持つ神、愛神カーマのこと。

272 異本K āhitayuktāhārya による。āhārya は演劇法の定める四種の abhinaya（表現）の一で、衣裳化粧等をいう、原文 āhitamuktāhārya.

273 貧乏者は遊女などに近づいてはいけない、という意味。

274 Vaiśikaśāstra, 売淫に関する経書。カーマ・シャーストラ類のこと、その作者たちとはヴァーツヤーヤナ、ダッタカ、ヴィシャーキラ等。註55参照。

異本D(492, b) bāṇādayo' pi tāsāṁ vaiśeṣikaśāstra…. は意味不明。

275 異本K pulakādikasūcitānyatanuśaktiḥ による。原文-anyataraśaktiḥ.

276 異本K・D upapattiyutaistathedṛśairvākyaiḥ による。原文 utpattiyutastaithedṛśair… は誤植であろう。

277 異本K vighaṭitapuṭamudradṛśā による。原文及び異本D vighaṭitavinimudradṛśā 意味不明。

278 異本Kはこの引用句をここで終らせているが、トリパーティーは五一八句までとしているのでそれに従った。マイヤーの訳も（五〇六句）までとしている。

279 cakravāka 水禽の一種、この鳥の夫婦は仲がよいが、夜間は別れるといわれる。

280 Kumudinī, Kumuda の女性形、白い蓮華で、夜咲く。

281 以下の七句は遣手女のヴィカラーラーが若いマーラティーに言わせる嫌味の言葉である。

解題

題名

『クッタニー・マタ』(Kuṭṭanīmata) という題名は、ひろく使用されているが写本の中にはクッタニーと同義語を用いた『シャンバリー・マタ』(Śambhalīmata) とよんでいるものもある。

作者

ダーモーダラグプタの伝記、年代は明確でないが、カシュミール王統記として有名な、カルハナの『ラージャタランギニー』(四・四九六)に、「カシュミールのカルコータ・ナーガ(王朝)の王ジャヤーピーダ・ヴィナヤーディティヤ王は、クッタニー・マタの作者たる詩人ダーモーダラグプタを宰相(dhī-saciva) に任命した。」と述べているのが唯一の記録である。このことは本書の巻末に iti śrīkāśmiramahāmaṇḍalamahimaṇḍanarāja Jayāpīḍamantripravara Dāmodaraguptakaviviracitaṁ Kuṭṭanīmataṁ samāptaṁ と記されているのと符号する。

ジャヤーピーダ王の治世は、西紀七五一―七八二年の三十一年間であるとされ、これには異説もあるが、おおよそ八世紀中葉から九世紀初頭と推定され、従ってダーモーダラグプタの年代もこの頃と

思われる。本書の末尾に、ハルシャ王（戒日王、治世六〇六—六四八）作の戯曲『ラトナーヴァリー』の上演の描写があることは、約一世紀を経たダーモーダラグプタの時代に、この劇がかなり普及していたことを物語っている。

ハルシャ王（七世紀）は、北インドに一大統一国家を成立させた英主であったが、王の没後北インドは群小専制国家が乱立し、乱世の様相を呈していた。中部のマガダには、グプタ王家の後裔（マガダのグプタ王朝、あるいは後期グプタ王朝とよばれる）が残存していたが、東部アッサムのカーマルーパ国やハルシャ王家などの勢力に圧迫され、ついにカニヤークブジャ王国のヤショーヴァルマン王（在位七三〇—七四〇頃）に亡ぼされてしまった。最北部のカシュミール王国は、ハルシャ王に対しては従属的立場にあったが、六二五年頃ドゥルラバヴァルダナ王がカルコータ王朝を創設した。第二代の王は暴君の名の高い、プラターパーディティヤで、ジャヤーピーダ王はその子である。第五世ラリターディティヤ・ムクターピーダ王が即位するに及び、王は中国と通じてチベットを降し、カニヤークブジャのヤショーヴァルマンをも破り、東はベンガル、アッサムを伐ち、西はマールワーやグジャラート地方を席捲して、シンド地方のアラブ人を破り、パンジャーブ地方のトルコ人をも降し、その版図はマウリヤ帝国に次ぐ大国となり、カシュミール王国の最盛時を現出したが、王の没後、王国は次第に衰退し、八五五年、ウトパラ王朝がこれに代った。回教徒はこの頃すでにインドに侵入しており、本書第一〇句のヴァーラーナシーの描写の中に、トルコの軍隊のことが述べられているが、アラブ人

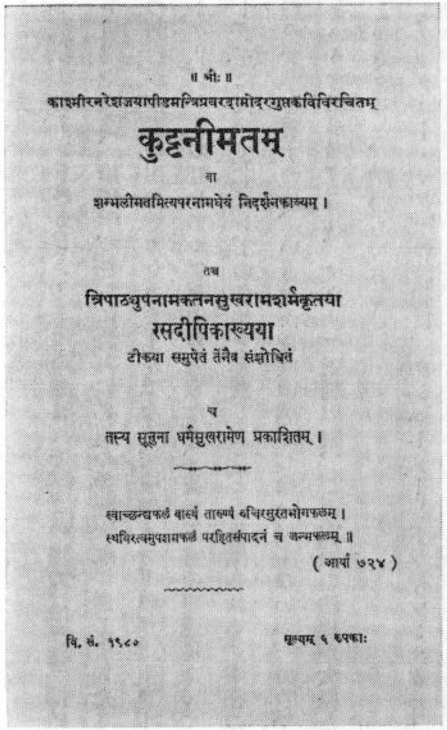
もこの地方まで来ていたと思われる。

作者は北インドのカシュミールの生まれで、この地方は古来学問の盛んなところであったから、彼が哲学や文法、修辞学、さらに詩人に必須の愛経文献に通じていたことは想像に難くない。この作品の舞台が作者の出生地カシュミールでなく、中部インドのヴァーラーナシーであること、あるいはパータリプトラの町やアルブダ山の描写など、彼が王宮の要職にあって、時にはパトロンのジャヤーピーダ王に従って北インドの各地を巡歴したことが想像される。宰相の地位にある高官が、このような好色文学を著すのは、いささか奇異の感がしないでもないが、カウティリヤの『実利論』に遊女長官という官職が挙げられ、マウリヤ王朝以来、この方面の法規が大臣たるものに必要な知識であったことを考えると、納得もできる。

『クッタニー・マタ』の詩句は、クシェーメーンドラやマンマタ（十一世紀）、ルッヤカ（十二世紀）等の詩論、修辞学書に引用され、また後世の詞華集（アンソロジー）にも引用されて、その詩的価値や特異の内容がかなり高く評価されていたことが知られる。

テクスト

Kuṭṭanīmatam or Śambhalimatam, edited by T. M. Tripāṭhi with his own Sanskrit commentary Rasadīpikā, Bombay 1924. (タイトルページは挿図　参照)



॥ श्रीः ॥

काश्मीरनरेशजयापीडमन्त्रिप्रवरदामोदरगुप्तकविविरचितम्

कुट्टनीमतम्

वा

शम्भलीमतमित्यपरनामधेयं निदर्शनकाव्यम् ।

तच्च

त्रिपाठ्युपनामकतनसुखरामशर्मकृतया

रसदीपिकाख्यया

टीकया समुपेतं तेनैव संशोधितं

च

तस्य सूनुना धर्मसुखरामेण प्रकाशितम् ।

स्वाच्छन्द्यफलं बाल्यं तारुण्यं रुचिरसुरतभोगफलम् ।
स्थविरत्वमुपशमफलं परहितसंपादनं च जन्मफलम् ॥
(आर्या ७२४)

वि. सं. १९८०　　मूल्यम् ६ रूप्यकाः

トリパーティー校訂本のタイトルページ

現存のすべての写本を照合校訂した最良のテクストで、校訂者自身の詳細なサンスクリット語の註釈がついている。トリパーティー（一八六七―一九二二）はグジャラートの出身であるが、父の代からボンベイ市に移り住み、彼はボンベイ大学BA課程終了後は上級課程に進まず、サンスクリット古典の研究に専念した。『クッタニー・マタ』の校訂出版は彼の最後の仕事であったが、発刊を待たずに世を去った。サンスクリットの註釈といえば、古いものだと考え勝ちであるが、二十世紀になって、大学教育をうけた彼がこのような古風にして詳細な註を書いたのは、斯学の伝統と彼の学識の深さを語るものといえよう。

詩句の数は一〇五九句で、なお若干疑問の点もあるが、現在では最も信用できる完本である。

Kuṭṭanīmatam kāvyam by Dāmodara Gupta, edited by Madhusudan Kaul, Bibliotheca Indica 266, Calcutta 1944.

『クッタニー・マタ』の諸写本、本刊本が着手以来幾多の迂余曲折を経て、十余年を要した事情、さらにカーヴィヤ・マーラー本、トリパーティー本の出版等に関しては、本書の序文に詳しい。詩句の数は一〇五八句で、トリパーティー本テクストの第七八句は欠けている。（本訳の註では異本Kと略称した。）

Śrīdāmodaragupta viracitam Kuṭṭanīmatam, edited by Durgāprasāda Mahāmahopādhyāya Paṇḍita of Jaipur, Kāvya Mālā Series, pt. 3, pp. 32-110, Bombay 1887.

このテクストは不完全で欠損誤謬も多い。詩句の数は九二六句で、第四四二句は欠陥があり以下十一句が欠損している。マイヤーのドイツ語訳はこのテクストを底本としている。(本訳では異本Dと略称した。)

Kuṭṭanī Matam athavā Śambhalīmata nāmaka kāvya, Anuvādak: Atrideva Vidyālaṁkāra, Vārāṇasī 1961.

Kuṭṭanīmatam Kāvyam, Anuvādak : Jagannāth Pāṭhak, Sampādak : Atrideva Vidyālaṁkāra, Allahābād 1961.

ヒンディー語訳を付した刊本も二冊出版されているが、シャーストリーによれば何れも誤謬にみちているといわれている。

翻訳

J. J. Meyer, Dāmodaragupta's Kuṭṭanīmatam (Lehren einer Kupplerin) ins Deutsche übertragen (Altindische Schelmenbücher 2), Lotus-Verlag Leipzig 1903.

ドゥルガープラサードのカーヴィヤ・マーラー本を底本としているが、底本の九二六句のうち、訳本は八五一句までで、残りの七五句は要旨のみである。第七六句の前半の訳を欠き、七八句は底本に欠けているから訳もなく、第一九四句は底本にはあるが訳本は脱落、第四四三句以下十一句の訳も脱落して行文も断絶している。底本が不完全であるから訳出にも苦労が多かったと思われるが訳文もやや晦渋で誤訳と思われるものもある。

Louis de Langle, Le brèviaire de la courtisane par Ksemendra (XIe siècle) ; Les Leçons de Intremetteuse par Damodaragupta (VIIIe siècle). Traduit en Français pour la première fois et précédés d'une Introduction (Le Livre d'Amour de l'Orient, Quatrième partie), Paris 1920.

マイヤーのドイツ語訳からの重訳で詩句の番号もなく、一般向きの興味本位の書き流し文で、省略が多い。

E. Powrys Mathers, Eastern Love, Vol. I, London 1927.

前掲のフランス語訳から英語に訳したと、明記してあるから、内容は推して知るべきものである。

参考書

Ajay Mitra Shastri, India as Seen in the Kuṭṭani-Mata of Dāmodaragupta, Motilal Banarsidass, Delhi 1975.

著者は一九三四年生まれの中堅学者で、ベナレス・サンスクリット・カレッジを終了後、ベナレス・ヒンドゥ大学に進み、ナーグプル大学で学位を取り、現在は同大学の講師で、数多くの業績を残している。本書は『クッタニー・マタ』のテキストを精細に研究し、七章から成り挿画も付せられている。（一、クッタニー・マタとその作者、二、政治理論と行政、三、宗教事情、四、社会生活、五、教育・学習・文学、六、経済状態、七、芸術、附録として地理的事情。）

訳者は本書の記述に負うところが多く、著者の如き学者が、正確な英訳を発表してくれることが望ましい。

翻訳に際し、参考にした文献は多いが、サンスクリット文学史の多くは、この本を教訓詩の中に含めている。何れの文学史も本書の概略を述べているが、キースの文学史（A. B. Keith, A History of Sanskrit Literature, Oxford 1928, pp. 236–7）はテクストと英訳を若干引用してやや詳しい。ウォーダーの文学史（A. K. Warder, Indian Kāvya Literature, Vol. IV, p. 568 f.）も訳例を引用してかなり

詳しい。

トリパーティーの註釈に引用されている文献は極めて多岐に互り、カーリダーサ以下カーヴィヤ文学の諸作品はもとより、『マヌ法典』、カウティリヤ『実利論』を始め、各種の修辞学書（アランカーラ文献）、演劇論書（バラタの『ナーティヤ・シャーストラ』、ダナンジャヤの『ダシャルーパ』等）、性愛文献（ヴァーツヤーヤナの『カーマ・スートラ』特に第六章「遊女篇」を始め、多くのカーマ・シャーストラ類）等に及んでいる。

訳者は上掲のシャーストリの研究書のほか、

R. Schmidt, Das Kāmasūtram des Vātsyāyana. Die indische Ars Amatoria nebst dem vollständigen Kommentare (Jayamangalā) des Yasodhara, aus dem Sanskrit übersetzt. 7te Auflage, Berlin 1922.

岩本裕訳著、完訳『カーマ・スートラ』、昭、二四、杜陵書院（特に第六篇、遊女）

H. Chakladar, Studies of Vātsyāyana ; Social Life in Ancient India Calcutta 1929.

R. Schnidt, Beiträge zur indischen Erotik, Leipzig 1902.

S. C. Banerji, Aspects of Ancient Indian Life-from Sanskrit sources, Calcutta 1972, pp. 47-53.

カウティリヤ『実利論』——古代インドの帝王学——。上村勝彦訳、上・下。（岩波文庫、一九八四。特に上巻、二・二七）

L. Sternbach, Gaṇikā-vṛtta-saṁgrahaḥ, or Texts on Courtezans in Classical Sanskrit, compiled and presented, Hoshiarpur 1933.

を参考にした。

登場人物

『クッタニー・マタ』は、遊里が舞台になっているから、そこに登場する人物像を述べてみる必要があろう。時代も風土も違い日本の花街との比較が難しいことはいうまでもない。日本でさえ江戸時代と現代とは大きな差違があり、また土地によっても違うのであるから。

クッタニー

kuṭṭanī 又はシャンバリー śambhalī、英語では bawd（女郎屋の主人、女衒）と訳している。媒介女、周旋女という方が当っているかも知れないが、遣手女の方が耳障りがよさそうなのでこのように訳した。クッタニーは通常遊女上がりの老練な女で、一家を構えて客と遊女の間を取り持ち、数人の遊女を抱えている場合もあり、その場合は日本の芸妓置家の女将に当る。クッタニーはジャナニー jananī 又はマートリカー mātṛkā（母の意）ともよばれるから、阿母さんともよばれた。遊女は実母と共に住んでいる場合もあるし、遣手女を母とよんで同居している場合もある。

辞書には遣手女という語はなく、遣手だけであるが、遣手婆ともよばれるので、中をとって遣手女とした。

ガニカー

gaṇikā 遊女と訳したが、これは高級娼婦で、花魁とか傾城、太夫とよばれるクラスで、更に溯れば平家物語などに見られる白拍子にあたるであろう。娼婦一般については veśyā（衣裳によって誘惑する女）が最も普通であるが、そのほか bandhakī（多くの男と関係をもつ女）、rūpājīvā（容色によって生活する女）、vārastrī, vārayuvati, vārayoṣit, vāravadhū, vāravanitā, vārasundarī（順番に買われる女）、paṇyastrī, paṇyavadhū（売られる女）、sādhāraṇavanitā（共通に求められる女）等で、ガニカーは gaṇa（すなわちグループ）に属する女の意味らしい。dāsī（奴隷女）という語も本書に見られ、召使女、婢女の意に使われているが、時には veśyā の意にも使われている。

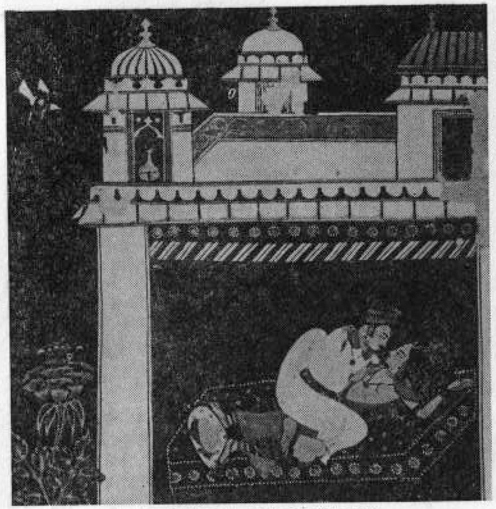


召使いにかしずかれ身繕いする女

ヴァーツヤーヤナの『カーマ・スートラ』（第六篇・五四）はガニカーを含め九種の娼婦を挙げている。『ク

ッタニー・マタ』に登場するマーラティーやハーララターもガニカーで、彼女らは一家を構え、母と同居し召使いを使い、客はその家で楽しむのが普通であった。彼女たちは『カーマ・スートラ』に挙げられている六十四芸(カラー)に通じ、王宮に入ることもあり、有識者の社交的集会(ゴーシュティー)などにも加わる識見をもっていた。ギリシャのheteira、あるいはフランスの都人士の集まるサロンに参加する椿姫の如き存在であったらしい。

ガニカーの性格は、時代的にかなり変遷したものと考えられるが、古い記録としては、カウティリヤの『実利論』(アルタ・シャーストラ)の記述が挙げられよう。『実利論』は、マウリヤ王朝のチャンドラグプタ王(前四世紀)の宰相カウティリヤ(別名チャーナキヤ)の作といわれているが、実際は西紀四世紀頃のものと考えられている。しかしここに述べられている統治法は、前四世紀頃から引続き施行せられたものと推測される。その中に(二・二七)遊女長官(ganikādhyakṣa)という官職があり、遊女(ガニカー)に関する諸法規が規定されていることは面白い。詳細は先に挙げた上村勝彦氏の邦訳(岩波文庫、上)に委ねるが、ガニカーが政府から一千パナの維持金を与えられていたことは、彼女らが公式に認められたもので、いわば公務員であることが知られる。しかしガニカーのほかに、ルーパージーヴィカー(容色によって生活する女)という遊女も存在し、彼女らは一ケ月に、一回の玉代の二倍の税金を納めることも規定されている。ガニカーは政府から維持金を受け、監督されているから、時には王宮に出入し、また王の命令に従って指定された男の相手をしなければならなかった。



細密画にみられる男女合歓の図

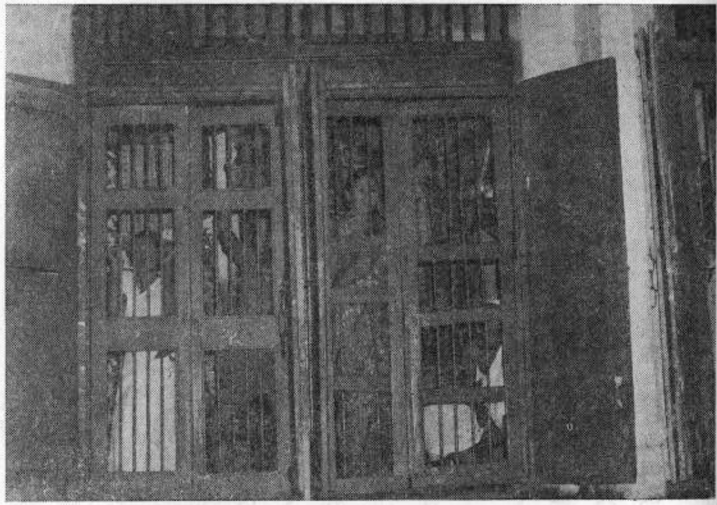
西暦紀元前後に行われていたと思われる『実利論』のこれらの規定が、八世紀頃のダーモーダラグプタの時代にまで続いていたとは考えられない。恐らく政府公認で維持金を給せられるようなガニカーはなくなり、専ら金銭のために働く商売女であったろう。すでにヴァーツヤーヤナ(四世紀頃)の『カーマ・スートラ』(第六篇、遊女篇)のかなり詳細な記述を見ても、その変遷は推測できる。遊女の収入源である玉代も、その容色、芸事等により上下の別があったことは当然であろう。パーリ語の仏典に見られる、有名なヴァイシャーリー市の遊女アンバパーリーは、一夜に五十金を得たといわれ、またラージャグリハ(王舎城)の一遊女は一夜に百金を得、一夜に千金を得たものもあったという(山崎元一「古代インドの都市とその生活」、『国学院雑誌』八五巻五号、昭和五九年五月、一〇頁参照)。

ガニカーたちの生活は、一人の旦那に囲われる女(eka-parigrahā)、多くの旦那をもつ女(aneka-parigrahā)、旦那は持たず、他の芸事などで生活する女(aparigrahā)などに区別されることもあった。

ガニカーは高級娼婦であったから社会的にも比較的高く評価されていたが、一般に娼婦は卑しいものと見做されていた。サンスクリット詩人は、遊女を評して詠っている。シュードラカ（四世紀頃）の『ムリッチャカティカー』（土の小車、第一幕）には、

娼家は若き男らが、遊びの場所ぞ、
浮かれ女の、そなたは路上に生えし草。
その身は金銭に購われ、好きも嫌いも、
へだてなく、仕える身なり、君こそは。（三一）

賢き婆羅門、愚かなる、卑しき者もみな共に、
一つの池に水を浴び、
花開きたる蔓草は、とまる孔雀に、烏にも、
均しく撓みうなだれて、
僧士農商、同舟に、河を渡るも変りなし。
この池、この草、この舟こそは、
男を悩ます君なれや。（三二）


ボンベイ市，フォークランド・ロードの鳥籠の女たち

とあり、また抒情詩人バルトリハリ（七世紀頃）も次のように詠じている（『シュリンガーラ・シャタカ』五九）。

いかに遊女の美なりとも、その唇を想う時、
こはこれ諜者、傭人、盗人、奴隷、役者、
はた浮かれ男が唾汁をうくる器ぞ、
生まれよき男のいかで口づけん。

遊女の中でも、特に歌舞音曲に秀でたものはその特技を発揮して客に接した。『クッタニー・マタ』の第二の挿話で芝居を演ずる踊り子マンジャリーも遊女であったと思われる。インドの伝統的な古典舞踊は寺院に仕えるデーヴァダーシー（神への奉仕女の意）によって伝えられてきたが、彼女らの中には寺院から出て売春をするものもあり、ノ

チ・ガール（nautch-girl）といわれて顰蹙（ひんしゅく）を買った。現在でも、ボンベイ市のタージマハル・ホテルのロビー辺りを、派手な姿で徘徊する高級な娼婦もあるが、同じ町のフォークランド・ロードには、鳥籠の女とよばれる売春婦の屯（たむろ）する一廓がある。

トロント大学のウォーダー教授は、ガニカーに対し「芸者」を当て、その文学史では、イタリック体で *geisha* と書いているが、果して芸者の実体をどの程度まで知っているのであろうか。COD では Japanese dancing girl としか書いていない。ガニカーは高級ではあっても娼婦である。江戸時代の吉原では、遊女と芸妓とは別個に扱われていた。

ガニカーの性格や生活を説明し、用例を各種の文献から引用した、上掲のスターンバックの『遊女行状集』（L. Sternbach, Ganikā-vṛtta-saṁgrahaḥ）は、各項を英語で説明して、それに適応するサンスクリットの詩句を引用しているが、『クッタニー・マタ』からの引用も多く有益である。

ヴィタ

vita　粋人、粋客。遊里に出入し、音曲に通じて一応の学識もあり、遊女との情事に詳しい。遊びの金には不自由しないが、遊蕩のため財産を失っているものもある。第十四章に、彼らの会話がユーモアを交えて語られている。嫖客という言葉に当るかもしれないが、遊び人（にん）と訳した。遊里を徘徊する地廻りとは少し違うようである。

遊里

あるいは遊廓。花街は、いずれの大都会にもあったに違いない。本書に描写されているヴァーラーナシーやアルブダ山の遊里は、当時有名であったらしい。遊客は遊女の家すなわち娼家（veśyā-vāsa）で遊ぶのが普通で、妓楼とか料亭あるいは待合、茶屋というようなものはあまり文献に見られない。後世になると、低級な売春宿とか女郎屋というようなものも出来、そういう家の集まった売春街、淫売街が遊里とよばれるようになったものと思われる。第四章における、蕩児チンターマニの大尽振りも、恐らく富豪の邸か、金持のガニカーの家で催されたゴーシュティー（社交的集会）での場面であろう。

註　veśyā-vāsa は直訳すれば「娼婦の家」である。私はかつてこれを揚屋（あげや）と訳したが（『土の小車』、一・三二）、江戸時代の揚屋は、高級な遊女が客によばれて置屋から出向く家であったから、今の待合、茶屋、貸座敷に当るわけで、揚屋と訳したのは不適当であったかも知れない。しかし前にも述べたように、複数のガニカーが、遣手女（クッタニー）などの家に、置屋の如く同居している場合には、揚屋のような家によばれたのかも知れない。

遊女の手ほどき

ダンディン（七世紀）の『ダシャクマーラ・チャリタ』（十王子物語、第二章）には、「遊女としての娘に対する母親の心構え」が、このように述べられている。



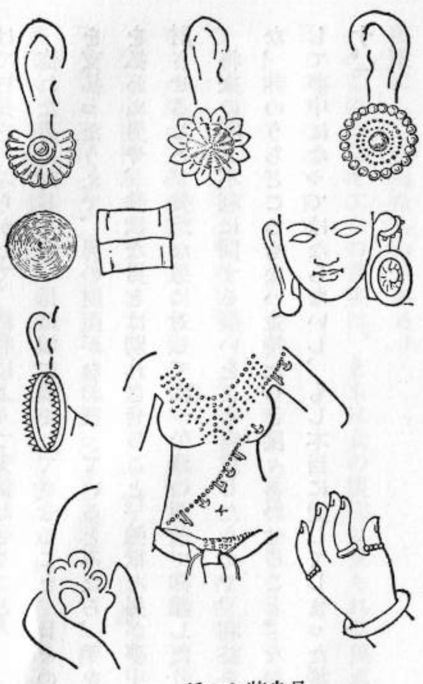
酒を飲む美女

「遊女の母のつとめは、かようなことでございます。

娘が生まれてからの子供の肢体の調整、健康、元気、色つや、智恵を増進して、身体の諸要素の均衡を正しく保持するような適当な食物による養育。五歳以後は、男には父親にさえあまり会わせないこと。誕生日や吉日のめでたい儀式を伴う祭典や、補助の科目も含めた恋愛の知識の伝授。踊り、歌、器楽、演劇、絵画、料理、香料、生花の各技芸や、あるいは書法、話法のたしなみについての正しい訓練。それに文法、論理、占星の教育。生計を立てていく職業の知識。遊戯の熟練。生物（闘鶏など）と無生物（賽ころや将棋など）にわたる博奕の手ほどき。

信頼し得る人々から房事の秘技を実習すること。祝祭の行列などの時に、盛装させた大勢のお供の衆を誇示すること。音楽などの催しの場合に、その時に応じて、かねて覚えたお世辞で男たちをうまく獲得すること。諸種の遊芸に通じている人たちによって、あらゆる方角にむかって名声をあげさせること。占星家たちによって彼女の吉相をいいふれさせること。居候や遊蕩児、道化役者や尼僧などを利用して、都の男たちの集まる場所で、彼女の容姿、徳行、遊芸、美貌、愛嬌を賞讃させること。

若い男の熱望の的となったら、できるだけ高い値段であてがうこと。自分の方から欲情に目が眩んだ男や、女の愛らしい容姿に酔った男や、素性がよく、姿がよく、若くて金持で、精力家で、純情で、気前がよく、女性にやさしく、よい技能をもち、性質のおとなしい一人前の男に彼女を与えること。



種々な装身具

また一人前でなくても、人柄がよく、教養のある男ならば、いろいろの口実を設けて、たとい安い値段でも提供すること。そしてその後で、未成年者が勝手にくっついたと言いがかりをつけて、その両親から弁償金をまきあげること。お金がとれない時は、色仕掛

けで村長をたぶらかして、裁判によって支払わせること。

惚れた男に対しては、母は娘に操をたてさせること。日々の、あるいは時折りの歓楽に対する代金を支払ったうえで、男の財産がなお残っているとみたら、手をかえ品をかえて捲きあげること。代金を払わぬ男や、強欲な男とは別れさせること。強欲な男が夢中になったら、娼家の主人がおだてて散財させること。貧乏な男に対しては、公衆の面前で非難したり、無視したりして追い払うこと。将来の利と不利に関する疑いをよく考慮したうえで、利益をもたらし、不利益を近づけないような、非のうちどころもない金持たちと度々あわせること。なおそのうえ、遊女は客に接するのに、決して夢中になってはならないし、もし本当に愛してしまった場合にも、母や祖母の意見に従うことです。」

余録

トリ・ヴァリー（三條の襞）とローマーヴァリー（生毛の條）

所変れば品変る、住む人の趣味嗜好も、土地が変れば異なるもので、インド詩人の美女に対する審美眼にも、奇異なものがある。

ここにあげた二つの言葉は、ともに女の腹部に見られる美点だそうで、美女の特徴として本書にも取りあげられている。

トリ・ヴァリー (tri-vali, -vali, -bali, -bali, vali-trayam) については、かつてやや詳しく発表したので、（拙著『酔花集』春秋社、一五二頁以下）ここでは簡略にその概要を述べるに止めるが、これは若い女の臍の上部に横に走る三條の襞で、本書第一一四句（註78）、第一八七句にも見られる。

伝奇小説作家ダンディン（七―八世紀）の『ダシャクマーラ・チャリタ』（田中・指田訳『十王子物語』平凡社、「東洋文庫」一七二頁）に、美しい少女を描写して、「深く沈んだ臍のあたりは、わずかに窪んで美しく、三條の襞が腹部を飾っている。」と述べられ、また愛経文献として有名なコーッコーカ（又はコーカ）の『ラティ・ラハスヤ』（愛秘）では、女性を四種に分類しているが、その第一級のパドミニ

ー（蓮華性）の女を解説して、「その歩みはやさしく媚を含みて雌の紅鶴の如く、細身にして腹に三條の襞あり…」（一・一三）と述べている。

詩聖とよばれるカーリダーサ（四―五世紀）の叙事詩『クマーラ・サンバヴァ』（軍神の誕生）には、

降り初めし雨の滴は、しばし乙女の睫毛に憩い、唇にふれて下に流れ、高くふくらむ乳房にくだけ、腹の條にやすらう間もなく、はては臍の深味に宿る。（五・二四）

と歌われ、また同じ作家の叙情詩『リトゥ・サンハーラ』（季節のめぐり）では、

盛りあがる色めく胸を首環にかざり
円き腰には薄絹の、白きドゥクーラの衣をまとい、
さやかに水を浴びし女の　腹には三條の美しき襞、いと鮮かにあらわれぬ。（二・二五）

と詠んでいる。叙情詩人バルトリハリ（七世紀）も、『シュリンガーラ・シャタカ』（恋愛百頌）の中で、

そちこちと休む間もなき切れ長の目
若さを誇るふくよかなふたつの乳房
細き腹の上に輝く蔓草の如き三條の襞、
かかる姿を目のあたりに見て、
心乱れぬ男こそ、げに幸せというべけれ。（六一）

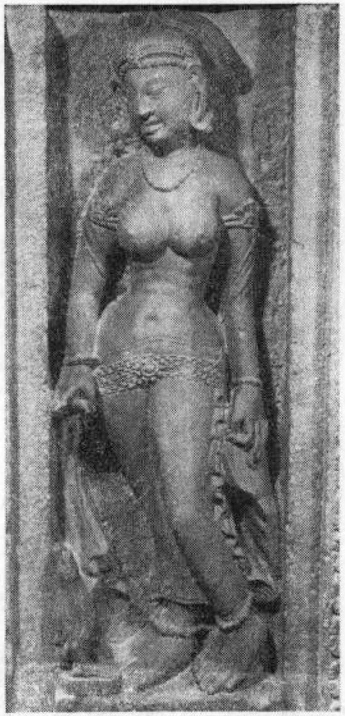
と詠んでいる。

インド詩人がこのように称讃する美しいトリ・ヴァリーについて、私は医学的ないし解剖学的に解明できぬものかと考えた結果、岡嶋敬治博士の記述を発見した。同博士は、鈴木文太郎纂著『人体系統解剖学』巻二、第三篇、第一章、第三節において、「腹部の外表」の項で次のように述べている。

腱画（Inscriptio tendinea）の部にては、腹直筋はその筋膜鞘と強く癒着するを以て、外表には横溝となりて現はる。この横溝は通常臍の上方に三條あるも、時として臍の上部に猶ほ一條存することあり。その精密なる位置は個人によりて差異あり。

と。

トリ・ヴァリーに関しては、どうやら解明できたようだが、何分にも第一級の美女の特徴というのだから、簡単にはお目にかかれないし、われわれにとって美しいものと映じるかどうかもわからない。



トリ・ヴァリーの見られる彫像

ローマーヴァリー(romāvalī, romarāji, romālī) は roma (生毛) の āvalī又はāvali (列・條) で、これには二種の解釈がある。

第一は、妊娠した女の腹部 (臍の下、nābher adhah) に見られる生毛の條で、ヴィディヤーカラ (十二世紀頃) の詞華集『スバーシタ・ラトナコーシャ』(名句の宝庫) に、

黒い蜜蜂のような乳首をもつ、愛する女の、盛り上って寄り合った二つの蓮華の如き乳房を、一本の生毛の條の太い茎が支えているのは、臍の下に大きな宝庫〔胎児〕のあることを語っている。(四三四)

とあり、乳首の黒いのは妊娠の兆としてよく知られているから、このローマーヴァリーは臍の下にあるものと思われ、若い女の美点ではなさそうである。このことに関しては、インゴールス博士の同書の英訳 (An Anthology of Sanskrit Court Poetry, Vidyākara's "Subhāṣitaratnakoṣa," translated by Daniel H.H.Ingalls. (Harvard Oriental Series, vol. 44), Cambrige, Mass., 1965) の、この詩に対する註 (p.500) を参照されたい。

さて問題となるのは第二の解釈で、これは若い女の二つの乳房の間から臍に至る縦の黒い生毛の條で、これが美女の特徴だというので、本書では第五二句 (註29) に romarāji として挙げられている。

上掲の詞華集に、

若い女の魅力のある胸に、
美しい生毛の條が、
愛の神の都に立てられた
魚の印のある旗の如くに輝く。(三三八)

若い女の輝く三條の襞の上に、
川の苔の如くに生毛の條が浮かんでいる。（三六三）

とある。

ダンディンの『十王子物語』（前篇、第五章）では、美しい王女を描写して、あたかも愛神カーマが愛妃ラティーの面影を心に描いて、個性のある一人の女性を創造したかのようだ、と言い、「恒河の流れの渦にも似た臍を、宮殿の階段を変じて腹部の三條の襞を、カーマの弓弦をなす蜜蜂の列りの黒さに似せて腹部の細毛の列を……創り出したかと紛うほどである」といっている。

ヴァッラバデーヴァ（十五世紀頃）の詞華集『スバーシターヴァリ』（名句連集）に次のような詩句がある。

シヴァ神の怒りに身を焼かれた愛神カーマが、焔を消すために、私の恋人の腿の間の湖にとびこんだ。そこで臍の窪味の上に、生毛の條が煙の如く立っている。（一五五八）

昨年急逝された、ケンブリッジ大学のブラフ教授は、その訳詩集（John Brough, Poems from the Sanskrit, translated with an introduction, Penguin Books, London 1968）の中で（188, p.119）、この詩

の最後の部分を "hence as smoke arise, The curling hairs, on Venus mount above" と訳している。「ヴィーナスの丘の上の縮毛」といえば恥毛（pubic hair）のことであろう。それならば臍の下で横に走っていることになるわけであろう。原文の nābhikuhare は「臍の穴において」の意味である。ローマは生毛（downy hair）で、roma-harṣa（生毛の立つ喜び）は身毛喜竪などと漢訳され、快感の表現として本書にもしばしば使われている。かつて私はこれについてブラフ博士と話し、（ライフ誌の表紙の）拡大した細密画を示したが、博士は写真の影だろうといって納得してくれなかった。マイヤーの『クッタニー・マタ』の翻訳（第五二句）の註（p. 10）に、Viśveśvarapaṇḍita（十八世紀）の 'Romāvaliśatakam', Kāvya Mālā 8, 1891）（ローマーヴァリー百頌）という作品があって、その魅力を詠っているとのことを知ったが、残念ながら見られなかった。

実は、私は先年このローマーヴァリーを実見したことがある。インド旅行の帰途、エア・インディアの機内のことで、エア・インディアのスチュワーデスは美人が多く、サリーの服装もシックで、心なしかチャウリー（ブラウス）も割合短く、腹部が広く露出して魅力的である。それとなく見ていると、一人のスチュワーデスの腹部が少し毛深いなと思っていたが、彼女が食事のサービスをしながら、私の前で腕をのばした時、はっきりと黒い縦の條を見せてくれたのである。私は長年の疑問が解決したような思いで、ひそかに北叟笑んだ次第である。ところが、つい先頃、七年間もバナーラスの大学に留学して帰国した、私のかつての学生にこの話をしたところ、それは確かで、彼の住んでいた

家の近くにも、そういう女性がいたと証明してくれた。なお曩に挙げたインゴールス博士の訳書（一五三頁）に、「これは膚の色が明るく、毛の黒い女のみに見られ、それが美女の特徴として受け取られ、詩の題材として普及したのは、おそらく胴を露わにするような、短い胴衣（チャウリー）を着ける、南インドの風習からも一部は由来するものらしい」と述べられている。

あとがき

梵語のこんな本を苦労して訳すのは、私のような学者仲間のはぐれものより外にあるまい。しかも出来栄えは、ごらんの通り、原文がなかったらこんな表現はするまい、と思うこともしばしば、これは翻訳者の宿命であり、訳者の無能の致すところである。

誤訳もあろうし、不明な点も少なくない。それは何れ有能な若い人が解明してくれるであろうし、すぐれた訳も出してくれるであろう。不評を覚悟の公刊も、古典インドにこのような奇書のあることを知ってもらいたいためで、余生の程も測られぬ身にとっては、若し完訳を果せぬ場合は、何方か残りを継いでくださることを期待する次第である。